

京都府遺跡調査概報

第106冊

1. 山田黒田遺跡
2. 高梨遺跡第2次
3. 木津川河床遺跡第15次
4. 東原遺跡
5. 内里八丁遺跡第18次
6. 薪遺跡第3次
7. 三山木地区区画整理事業関係遺跡
 - (1) 二又遺跡第2次
 - (2) 三山木遺跡第5次
8. 畑ノ前遺跡第6次

2 0 0 3

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がありますが、当センターでは、それに対応するために3種の刊行物を刊行しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成14年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、八幡市、京田辺市の依頼を受けて行った山田黒田遺跡、高梨遺跡第2次、木津川河床遺跡第15次、東原遺跡、内里八丁遺跡第18次、薪遺跡第3次、三山木地区区画整理事業関係遺跡、畑ノ前遺跡第6次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、野田川町教育委員会、京北町教育委員会、八幡市教育委員会、京田辺市教育委員会、精華町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- | | |
|--------------------|------------|
| 1. 山田黒田遺跡 | 2. 高梨遺跡第2次 |
| 3. 木津川河床遺跡第15次 | 4. 東原遺跡 |
| 5. 内里八丁遺跡第18次 | 6. 薪遺跡第3次 |
| 7. 三山木地区区画整理事業関係遺跡 | |
| 8. 畑ノ前遺跡第6次 | |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	山田黒田遺跡	与謝郡野田川町大字上山田小字カリヤ	平14. 8. 7～9. 3	京都府土木建築部	村田和弘
2.	高梨遺跡第2次	北桑田郡京北町大字周山小字中山54-2ほか	平14. 5. 7～6. 7	京都府土木建築部	石尾政信
3.	木津川河床遺跡第15次	八幡市八幡一丁目畑	平14. 11. 5～11. 28	京都府土木建築部	増田孝彦
4.	東原遺跡	八幡市橋本東原地内	平14. 7. 22～8. 29	八幡市	中村周平
5.	内里八丁遺跡第18次	八幡市大字内里小字八丁・中島・日向堂	平14. 6. 19～8. 12	京都府土木建築部	河野一隆
6.	薪遺跡第3次	京田辺市大字薪地内	平14. 1. 9～2. 27	京都府土木建築部	竹原一彦
7.	三山木地区区画整理事業関係遺跡			京田辺市	岡崎研一
	二又遺跡第2次	京田辺市三山木田中19-2ほか	平14. 5. 20～9. 27		
	三山木遺跡第5次	京田辺市三山木柳ヶ町52-4ほか	平14. 5. 21～7. 12		
8.	畑ノ前遺跡第6次	相楽郡精華町大字植田小字畑ノ前17-5	平14. 4. 15～6. 13	京都府土木建築部	柴 暁彦

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。

また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 山田黒田遺跡発掘調査概要	1
2. 高梨遺跡第2次発掘調査概要	7
3. 木津川河床遺跡第15次発掘調査概要	11
4. 東原遺跡発掘調査概要	15
5. 内里八丁遺跡第18次発掘調査概要	19
6. 薪遺跡第3次発掘調査概要	25
7. 三山木地区区画整理事業関係遺跡発掘調査概要	33
(1) 二又遺跡第2次	36
(2) 三山木遺跡第5次	44
8. 畑ノ前遺跡第6次発掘調査概要	53

付表目次

7. 三山木地区区画整理事業関係遺跡	
付表1 三山木遺跡調査一覧表	33

挿図目次

1. 山田黒田遺跡	
第1図 調査地位置図	1
第2図 調査地周辺図	2
第3図 トレンチ配置図	3
第4図 各トレンチ土層断面図	4
第5図 遺物出土状況図	4
第6図 出土遺物実測図	5
2. 高梨遺跡第2次	
第7図 調査地位置図および周辺遺跡分布図	7

第8図	調査地平面図	-----	8
第9図	調査地断面図	-----	9
第10図	出土遺物実測図	-----	10
3. 木津川河床遺跡第15次			
第11図	調査地位置図	-----	11
第12図	トレンチ配置図	-----	12
第13図	トレンチ南壁東半部分土層断面図	-----	13
第14図	遺構平面図	-----	13
第15図	出土遺物実測図	-----	14
4. 東原遺跡			
第16図	調査地位置図	-----	15
第17図	トレンチ配置図	-----	16
第18図	第7トレンチ平面・断面図	-----	17
第19図	出土遺物実測図	-----	18
5. 内里八丁遺跡第18次			
第20図	調査地および周辺遺跡分布図	-----	20
第21図	調査トレンチ配置図	-----	21
第22図	第1～10トレンチの平面および断面図	-----	22
第23図	出土遺物実測図	-----	24
6. 薪遺跡第3次			
第24図	調査地周辺遺跡分布図	-----	26
第25図	調査トレンチ配置図	-----	28
第26図	調査トレンチ平面図	-----	30
第27図	出土遺物実測図	-----	31
7. 三山木地区区画整理事業関係遺跡			
第28図	調査地および周辺遺跡分布図	-----	34
第29図	二又遺跡・三山木遺跡調査地配置図	-----	35
(1)二又遺跡第2次			
第30図	二又遺跡第1トレンチ実測図	-----	36
第31図	二又遺跡第2トレンチ遺構実測図	-----	37
第32図	S B 01・02実測図	-----	38
第33図	S E 03実測図	-----	39
第34図	二又遺跡第3トレンチ実測図	-----	40
第35図	出土遺物実測図(1)	-----	41
第36図	出土遺物実測図(2)	-----	42

第37図	出土遺物実測図(3)	-----	43
(2)三山木遺跡第5次			
第38図	三山木遺跡遺構配置図	-----	46
第39図	第1・2トレンチ土層図	-----	47
第40図	出土遺物実測図(1)	-----	48
第41図	出土遺物実測図(2)	-----	49
第42図	出土遺物実測図(3)	-----	50
第43図	二又遺跡遺構図	-----	51
8. 畑ノ前遺跡第6次			
第44図	調査地位置図(1)	-----	53
第45図	調査地位置図(2)	-----	54
第46図	北調査区北壁断面図	-----	54
第47図	北・南調査区遺構平面図	-----	55
第48図	S H88実測図	-----	56
第49図	S B84実測図	-----	56
第50図	S D86断面図	-----	56
第51図	東調査区平面図	-----	57
第52図	出土遺物実測図(1)	-----	57
第53図	出土遺物実測図(2)	-----	58
第54図	出土遺物実測図(3)	-----	59
第55図	出土遺物実測図(4)	-----	60

図 版 目 次

1. 山田黒田遺跡

図版第1	(1)調査地周辺(北から)	(2)調査前風景(南西から)
	(3)第1トレンチ作業風景(南西から)	
図版第2	(1)第2トレンチ重機掘削風景(東から)	(2)第2トレンチ作業風景(南西から)
	(3)第3トレンチ重機掘削風景(南から)	
図版第3	(1)第3トレンチ自然流路(南から)	
	(2)第3トレンチ自然流路土層断面(南東から)	
	(3)第3トレンチ自然流路内遺物出土状況(南東から)	
図版第4	出土遺物	

2. 高梨遺跡第2次

- 図版第5 (1) 全景(北から) (2) 調査地全景(南東から)
- 図版第6 (1) 1トレンチ全景(西から) (2) 3トレンチ全景(北から)
- 図版第7 (1) 2トレンチ全景(西から) (2) 2トレンチ全景(東から)
- 図版第8 (1) 4トレンチ全景(北から) (2) 2トレンチ北壁(南東から)

3. 木津川河床遺跡第15次

- 図版第9 (1) 調査前の状況(西から) (2) トレンチ全景(東から)
- 図版第10 (1) トレンチ南壁土層断面(北東から) (2) 検出遺構(西から)

4. 東原遺跡

- 図版第11 (1) 調査地全景(東から) (2) 調査地全景(南東から)
- (3) 第1トレンチ壁面整形作業(南東から)
- 図版第12 (1) 第2トレンチ重機掘削風景(北西から)
- (2) 第3トレンチ全景(南西から)
- (3) 第5トレンチ全景(南西から)
- 図版第13 (1) 第7トレンチ全景(南西から) (2) 第7トレンチ溝跡(南東から)
- (3) 第7トレンチ溝跡土層断面(南東から)
- 図版第14 (1) 第7トレンチ北東壁土層断面(南東から)
- (2) 第8トレンチ全景(南東から)
- (3) 第8トレンチ南東壁土層断面(南東から)

5. 内里八丁遺跡第18次

- 図版第15 (1) 第1トレンチ完掘状況(北東から) (2) 第2トレンチ完掘状況(西から)
- (3) 第3トレンチ完掘状況(南東から)
- 図版第16 (1) 第4トレンチ完掘状況(北西から) (2) 第5トレンチ完掘状況(北西から)
- (3) 第6トレンチ完掘状況(北西から)
- 図版第17 (1) 第7トレンチ完掘状況(北西から) (2) 第8トレンチ完掘状況(南東から)
- (3) 第9トレンチ完掘状況(北東から)
- 図版第18 (1) 第10トレンチ完掘状況(南東から)
- (2) 第5トレンチ土器出土状況1(南東から)
- (3) 第5トレンチ土器出土状況2(南西から)

6. 薪遺跡第3次

- 図版第19 (1) 遠景(北西から) (2) 第2トレンチ調査前(南東から)
- (3) 第1トレンチ調査風景(東から)
- 図版第20 (1) 第1トレンチ全景(西から) (2) 第1トレンチ全景(南西から)
- (3) 第2トレンチ全景(北西から)
- 図版第21 (1) 第2トレンチ古墳周濠検出状況(南西から)

- (2)第2トレンチ古墳周濠検出状況(北東から)
 (3)第2トレンチ北壁、古墳周濠部(南東から)
- 図版第22 (1)第3トレンチ全景(南から) (2)第3トレンチ北拡張部(南から)
 (3)第3トレンチ土坑SK1(東から)
- 図版第23 (1)第4トレンチ全景(北から) (2)第4トレンチ全景(南から)
 (3)第4トレンチ中央部遺構検出状況(西から)
- 図版第24 (1)第4トレンチ集石土坑(東から) (2)第4トレンチ集石検出状況(南から)
 (3)第4トレンチ北部東壁土層断面(東から)

7. 三山木地区区画整理事業関係遺跡

(1)二又遺跡第2次

- 図版第25 (1)遠景(北東から) (2)第2トレンチ全景(真上から)
 (3)第3トレンチ全景(南から)
- 図版第26 (1)第1トレンチ調査前全景(南東から) (2)第1トレンチ調査後全景(北から)
 (3)第1トレンチ東壁断面(西から)
- 図版第27 (1)第2トレンチ調査前全景(南東から) (2)第2トレンチ調査後全景(東から)
 (3)第2トレンチSB01・03検出状況(南から)
- 図版第28 (1)第2トレンチSB01完掘後近景(南から)
 (2)第2トレンチSB02検出状況(南から)
 (3)第2トレンチSB02完掘後近景(真上から)
- 図版第29 (1)第2トレンチSE03近景(南から) (2)第2トレンチSE03完掘状況(南から)
 (3)第2トレンチSB01柱検出状況(北西から)
- 図版第30 (1)第3トレンチ調査前全景(南西から) (2)第3トレンチ調査後全景(北西から)
 (3)現地説明会風景 第2トレンチにて(東から)
- 図版第31 出土遺物(二又遺跡)

(2)三山木遺跡第5次

- 図版第32 (1)第1・2トレンチ重機掘削状況(北から)
 (2)第1・2トレンチ調査前近景(南から)
 (3)第2トレンチSD09近景(東から)
- 図版第33 (1)第2トレンチSD12近景(南から) (2)第2トレンチ南壁堆積状況(北から)
 (3)第2トレンチ瓦出土状況(北から)
- 図版第34 (1)出土遺物(1) (2)出土遺物(2)

8. 畑ノ前遺跡第6次

- 図版第35 (1)調査地遠景(北から) (2)調査地全景(真上から)
- 図版第36 (1)調査前の状況(南西から) (2)北調査区北壁断面(南東から)
 (3)北調査区SH88完掘状況(南西から)

- 図版第37 (1)北調査区 S D86検出状況(南西から) (2)東調査区上層遺構完掘状況(東から)
(3)東調査区下層遺構完掘状況(西から)
- 図版第38 (1)南調査区 S B84完掘状況(南から)
(2)南調査区 S B84ピット検出根石(北から)
(3)南調査区 S B84ピット検出根石(北から)
- 図版第39 出土遺物(1)
- 図版第40 出土遺物(2)

1. ^{やまだくろだ}山田黒田遺跡発掘調査概要

1. はじめに

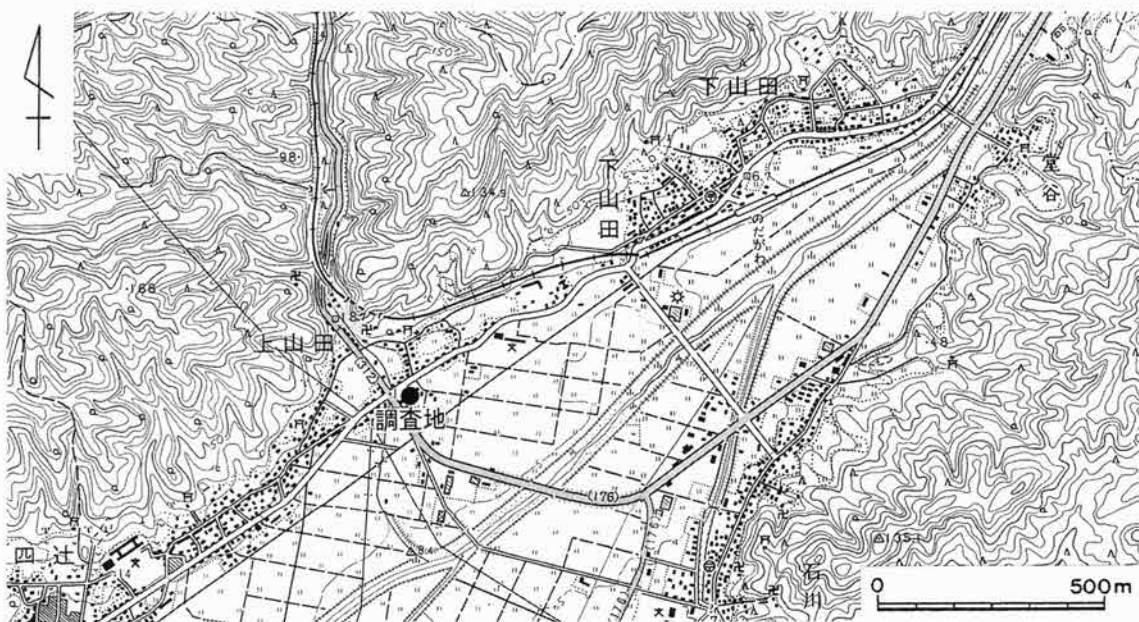
今回の調査は、平成14年度主要地方道宮津八鹿線交通安全施設等整備事業に伴い京都府土木建築部の依頼を受けて、道路拡幅予定部分の発掘調査を実施した。

山田黒田遺跡は、弥生時代から中世にかけての遺物が散布する集落遺跡として認知されている遺跡である。調査地は、与謝郡野田川町大字上山田小字カリヤに所在し、遺跡範囲内の南西端部にあたる(第1図)。野田川町から大宮町にかけての町境にある水戸谷の南側にあり、西側を流れる水戸谷川に隣接する。水戸谷を越えると大宮町に至り、峰山町・網野町・弥栄町など奥丹後といわれる地域へ抜けられる。また、北側の丘陵の裾部には、北近畿タンゴ鉄道も通っている。現在においても交通の要所である。

当遺跡はこれまで未調査であり、遺構・遺物の有無の確認・範囲確認を目的として調査を実施した。調査地は、道路拡幅予定地内に東西方向に3か所のトレンチを設定した(第2図)。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長石井清司、同調査員村田和弘が担当した。調査期間は、平成14年8月7日～9月3日で、調査面積は約140㎡である。本調査の概要報告は村田が執筆した。

現地調査・整理作業にあたっては、作業に携わった地元の方々、ならびに整理員の方々、野田川町教育委員会・京都府教育委員会をはじめとする諸機関の方々には、多大な援助と協力をいただいた。^(注1)記してお礼申し上げたい。なお、調査に係る費用は、全額京都府土木建築部が負担した。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000四辻・宮津)



第2図 調査地周辺図

2. 調査の概要

調査対象地内の道路拡幅予定地内において、民家の出入り口を確保するため、3か所に分けてトレンチを設定し調査した(第3図)。

表土掘削は重機で、現代の盛土を除去し旧水田面まで掘削を実施した。約1.2mのところまで重機での掘削作業を行い、それより下層においては人力による掘削作業を実施した。現代の盛土直下から、昭和2(1927)年3月7日に起こった北丹後の地震による火災の焼け土が確認できた。

その後、旧水田面の耕作土と床土を除去したのち、人力による掘削と遺構検出に努めた。

今回の調査地内に3か所に設けた調査トレンチの調査概要について、トレンチごとに報告したい。

第1トレンチ 約3.2×12.6mのトレンチを設定し調査した。深さ約1.5mまで掘り下げたが、トレンチが小規模であったことに加え、湧水が著しい砂の堆積層で地盤が安定しておらず、遺物は少量出土するものの顕著な遺構は検出できなかった。遺物が出土したのは古墳時代の土器のほかに、暗灰色砂層から弥生時代の土器片も少量出土した(第6図8)。

第2トレンチ 約3.7×6.8mのトレンチを設定し調査した。第1トレンチと同様に、湧水が著しく、遺物は少量出土するものの顕著な遺構は検出できなかった。

第3トレンチ 約5×15.4mのトレンチを設定した。現地表から約1.5mの深さ(標高約8.3m)のところ、比較的安定した面(暗青灰色砂質土上面)を確認した。明確な遺構は検出できなかったが、トレンチ東端で北西から南東へ流れていたと思われる自然流路を検出した。

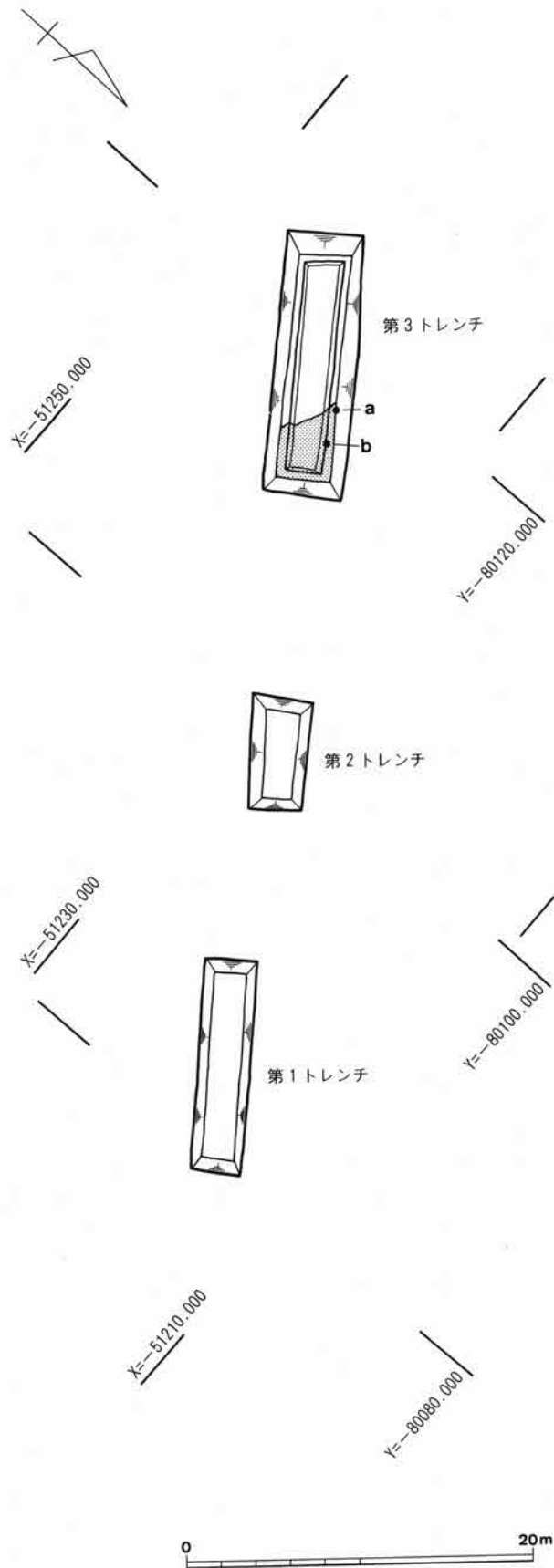
自然流路は、水戸谷川の氾濫や北側にある丘陵からの流れ込みによって形成されたものと考えられる。この流路内の堆積は、粘土と砂との互層になっている。この堆積状況から、幾度かの流

れが確認できた(第4図)。堆積層のうち、黒灰色粘質土層からは、古墳時代前半に属する土器が集積した状態で出土した(第5図)。出土した遺物には、小型丸底壺や長脚の高杯など完形品に近い土器も数点出土した。

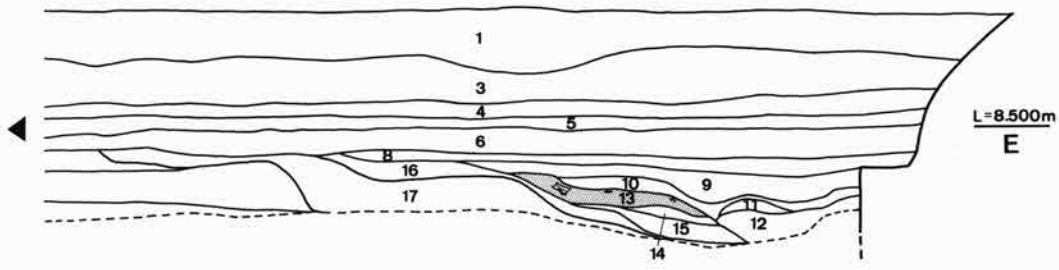
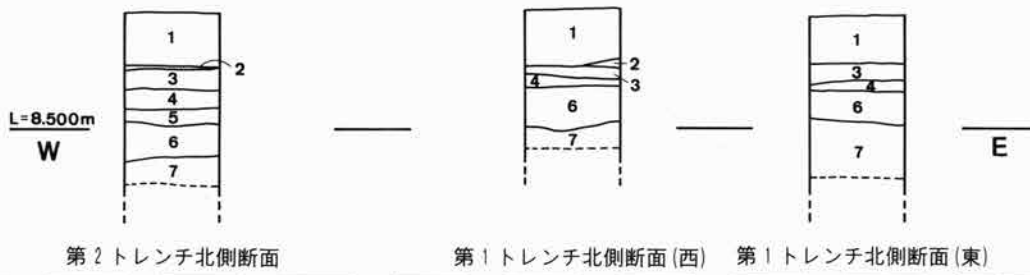
3. 出土遺物

遺物は、主に第3トレンチの自然流路から出土したもので残存率が良好なものを対象として掲載した(第6図)。また、第1トレンチから出土した土器を1点掲載した(第6図8)。出土した遺物の主な時期は、古墳時代前半に属するものと考えられる。自然流路の堆積層のうち、黒灰色粘質土層から出土した土器は、完形品に近い土器が出土し良好な資料が得られた(第6図1・2・4～7・9～14)。また、同一層から石器1点が出土した(第6図15)。そのほかの時期の遺物として下層より、弥生土器片が数点出土している(第6図3・8)。

1は土師器の小型丸底壺で、外面に横方向のヘラミガキが施されている。口縁部が体部より大きく、外側に開いている。2も土師器の小型丸底壺であるが、口縁部はあまり開かない。外面調整はヘラケズリのちにナデを施している。3は暗灰色砂層から出土した弥生土器の二重口縁端部である。調整は磨滅が激しく不明である。器種はおそらく壺と思われるが、小片のため特定できない。4～7は土師器の甕である。4・6・7には外面にハケメの調整がみられる。6・7の内面には、ヘラケズリとハケメがみられる。8は弥生土器の高杯の脚部で、第1トレンチの暗灰色砂層から出土した。外面全体には縦方向のヘラミガキ、内面は

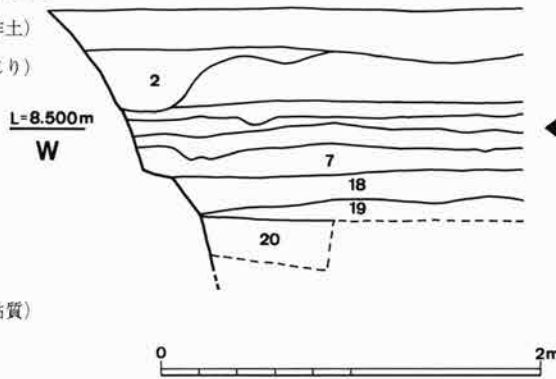


第3図 トレンチ配置図

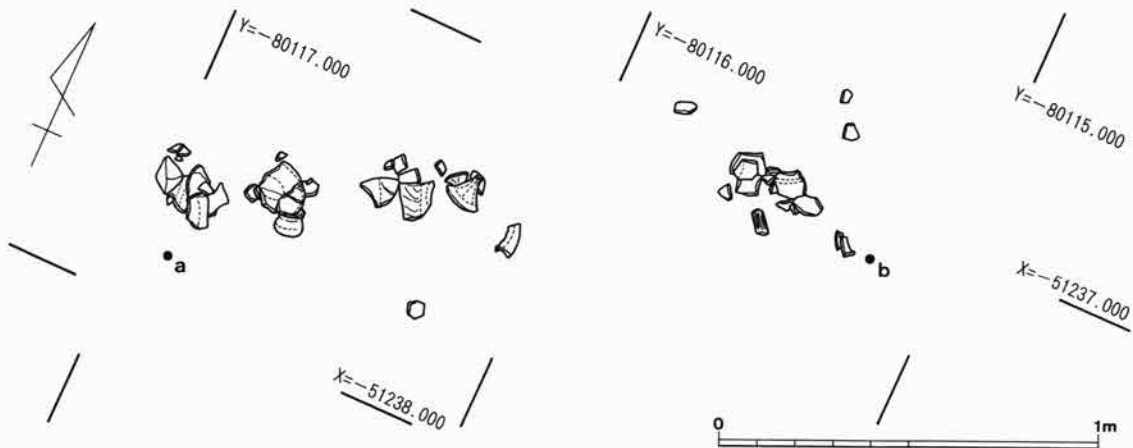


第3トレンチ北側断面

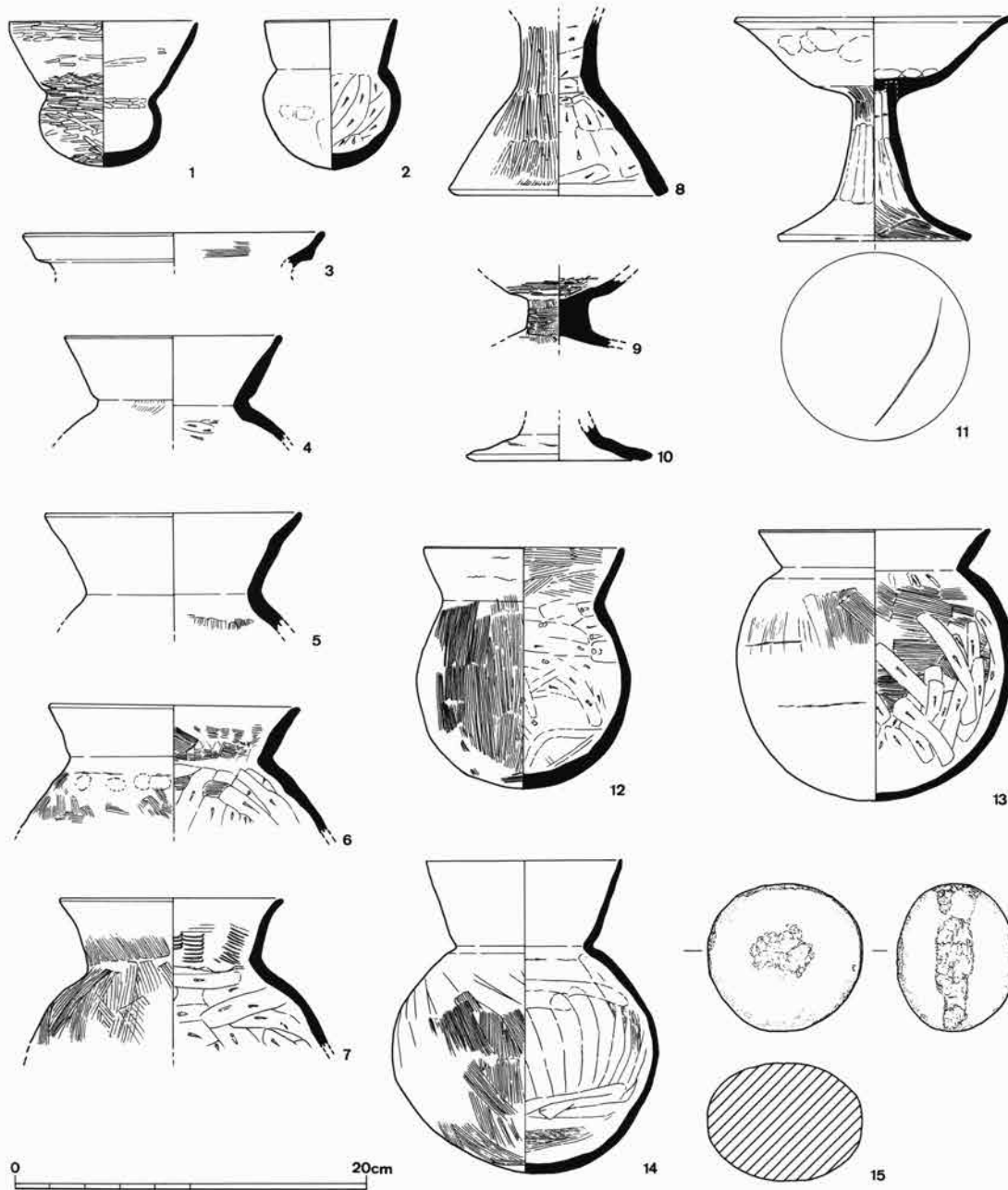
- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. 黄色砂質土(現代の盛土) | 2. 暗茶灰色粘質土(焼土混じり) |
| 3. 淡茶灰色砂質土(礫を含む) | 4. 暗灰色粘土(旧水田耕作土) |
| 5. 暗緑灰色砂質土(床土) | 6. 暗灰色砂質土(粗砂混じり) |
| 7. 暗青灰色砂質土(粗砂混じり) | 8. 暗青灰色砂質土 |
| 9. 暗青灰色粘質土(粗砂混じり) | 10. 暗灰色砂 |
| 11. 淡灰色粗砂(粗砂混じり) | 12. 淡黄灰色粗砂 |
| 13. 黒灰色粘質土(土器堆積層) | 14. 黒灰色砂 |
| 15. 暗茶褐色粘土(木片含む) | 16. 暗青灰色粗砂 |
| 17. 白灰色砂(粗砂混じり) | 18. 黒青灰色砂質土(やや粘質) |
| 19. 淡灰色砂(粗砂混じり) | 20. 淡灰色細砂 |



第4図 各トレンチ土層断面図



第5図 遺物出土状況図



第6図 出土遺物実測図

ヘラケズリの調整がみられる。9は土師器の低脚の高杯で、杯の底部から脚柱部にかけての部分である。外面には縦方向と横方向の細かいミガキが施されている。10も土師器の低脚の高杯で、脚部である。内外面ともにナデの調整がみられる。11も土師器の高杯であるが、長脚のタイプである。杯部の内外面にはナデの調整があり、脚部内面にはヘラ描きの線刻がみられる。脚柱部には15面の細かい面取りがされている。

12・13は土師器の甕である。調整は外面がハケメ、内面はヘラケズリとハケメがみられる。14は土師器の壺である。体部の外面にはヘラケズリののちのハケメがみられる。内面は全面のヘラケズリと一部のハケメの調整がみられる。口縁部にはナデの調整がみられる。15は石器で敲き石である。形状は扁平な円形で、平面と側面の数か所に打撃の痕跡がみられる。また、一部分に擦

った痕跡も確認できた。

今回の出土遺物で掲載できなかった遺物の中に、古墳時代中期と思われる須恵器片が1点のみであるが暗青灰色粘質土層から出土していることも付け加え報告しておく。

4. まとめ

山田黒田遺跡が所在しているところは、現在でも与謝地域と奥丹後地域とを結ぶための重要な交通の要所である。

古代においても、同様であったことが想像でき、調査当初は遺構の検出が期待された。しかし、調査としては、各トレンチとも小規模なものであり、水戸谷川に近く丘陵裾部の最先端部という地形上からも顕著な遺構を検出するまでは至らなかった。

調査において集落跡を示すような遺構は検出できなかったが、第3トレンチでは古墳時代前半を中心とした遺物が出土する北西から南東へ流れていた自然流路を検出した。遺物は、上流もしくは北側の丘陵から流れ込み集積したものであると考えられる。遺物の出土状況から周辺に集落跡などの遺構が存在することが考えられる。

今回の調査では、遺跡の範囲や性格を示すような遺構は確認できなかったが、遺物は弥生時代から古墳時代の土器などが少量ではあるが出土した。これらのことから、調査地より北側の丘陵裾部の形成されている平坦地部分に集落の中心部が存在することが推察でき、今後の周辺での調査に期待したい。

(村田和弘)

注1 調査参加者 逸見芳・斎藤友太可・藤原巳代治・小長谷士郎・河嶋進・村上奈弥・藤村文美

参考文献

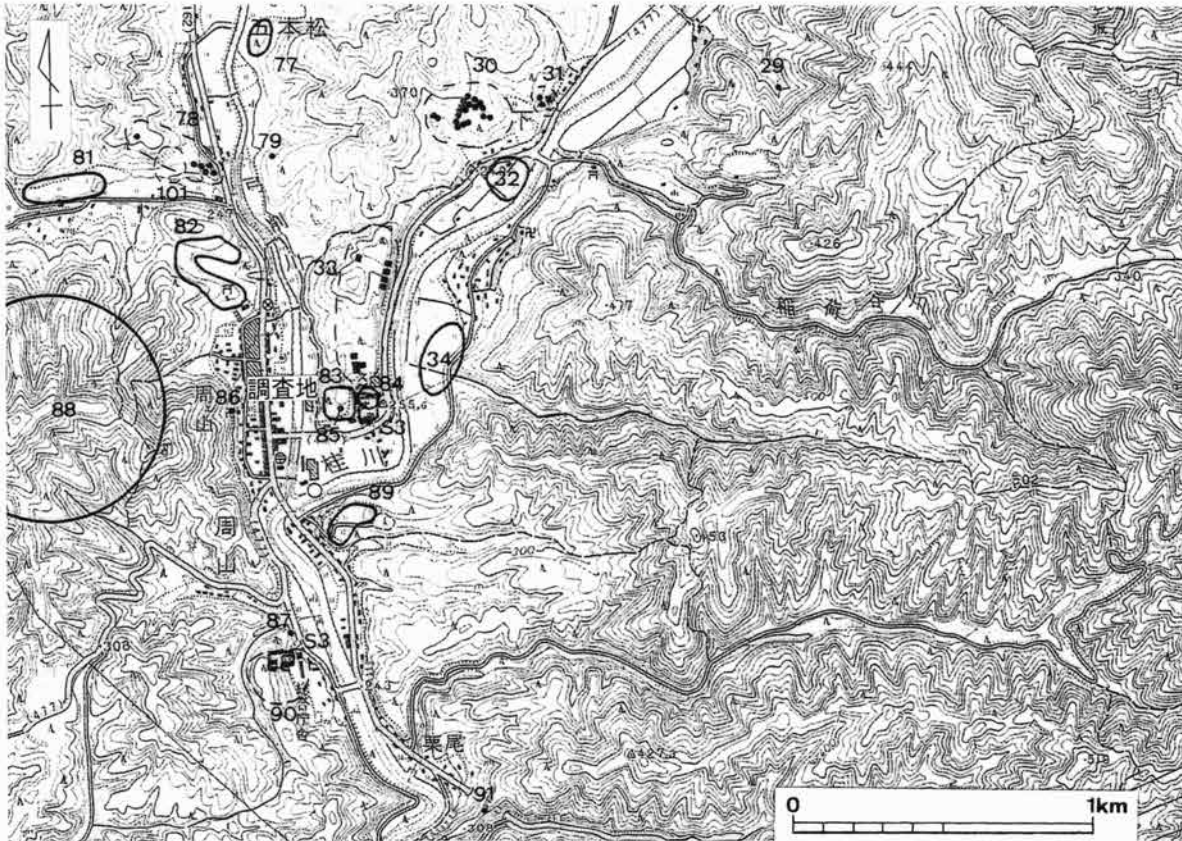
佐藤晃一「中世の町加悦・石川・幾地・山田」加悦町歴史文化シリーズ第1集(『歴史探訪 丹後の中世社会を探る I』加悦町教育委員会) 1997

2. ^{たかなし}高梨遺跡第2次発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、国道162号線周山バイパス整備事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。今回調査地は、京都府北桑田郡京北町大字周山小字中山54-2ほかで、京都の観光名所嵐山より高雄・北山を通り抜けて約25kmで高梨遺跡に着く。高梨遺跡は、桂川(大堰川)と弓削川が合流する地点の北側、両河川に挟まれた丘陵の南端に位置し、周辺には丘陵南端に周山廃寺(府指定史跡)、高梨経塚、周山古墳群などが、また、丘陵東側の水田地帯には、祇園谷遺跡、南側の丘陵には東山遺跡、桂川右岸には周山瓦窯跡(府指定史跡)がある。高梨遺跡は、周山中学校グランド造成工事で竪穴式住居跡が検出され、飛鳥～平安時代の集落遺跡として登録されており、周山中学校グランドを中心とする丘陵の西南端地域にあたる。

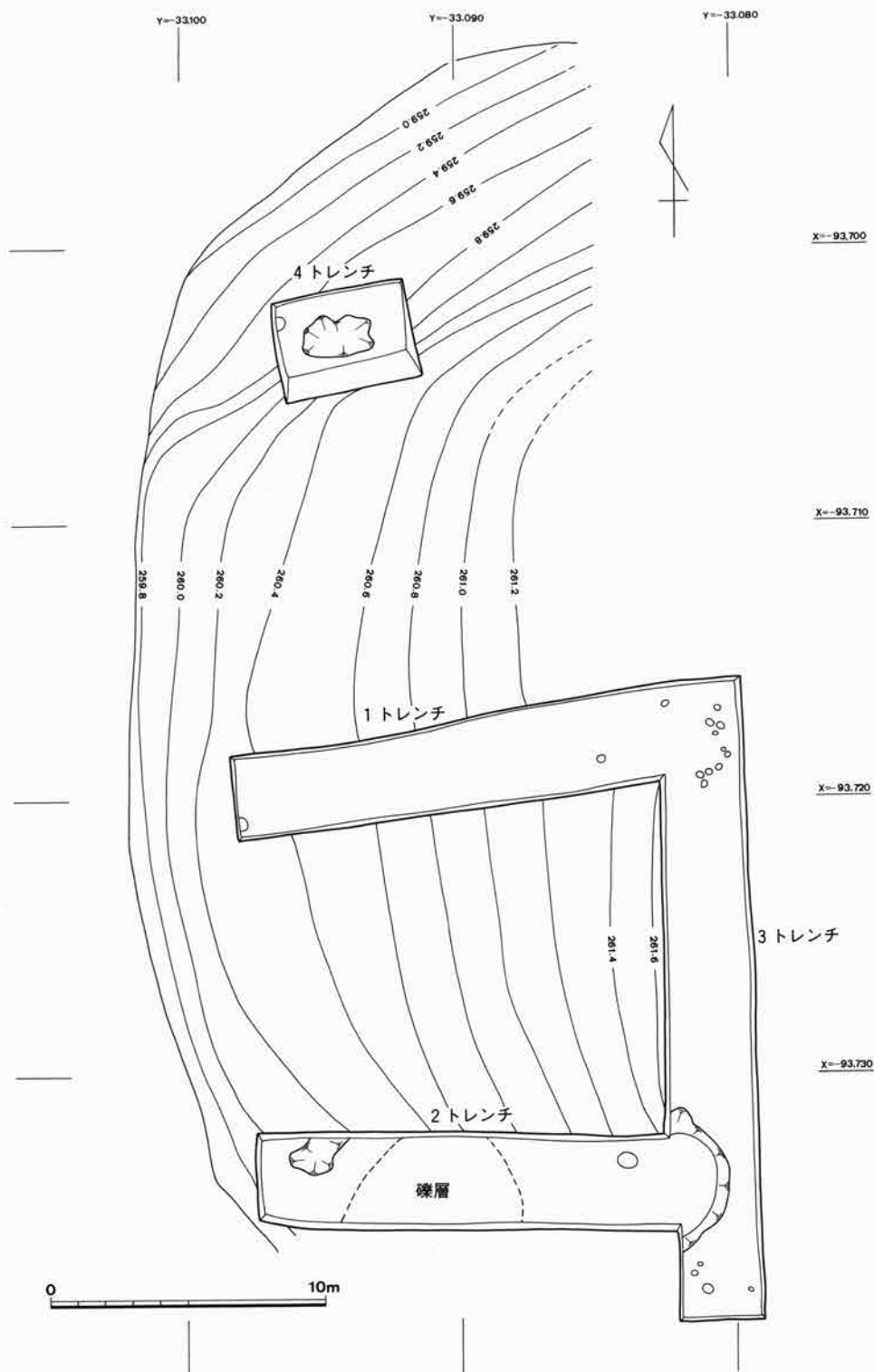
現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長石井清司、同専門調査員石尾政信が担当し、平成14年5月7日から6月7日まで実施した。調査面積は、約150m²である。



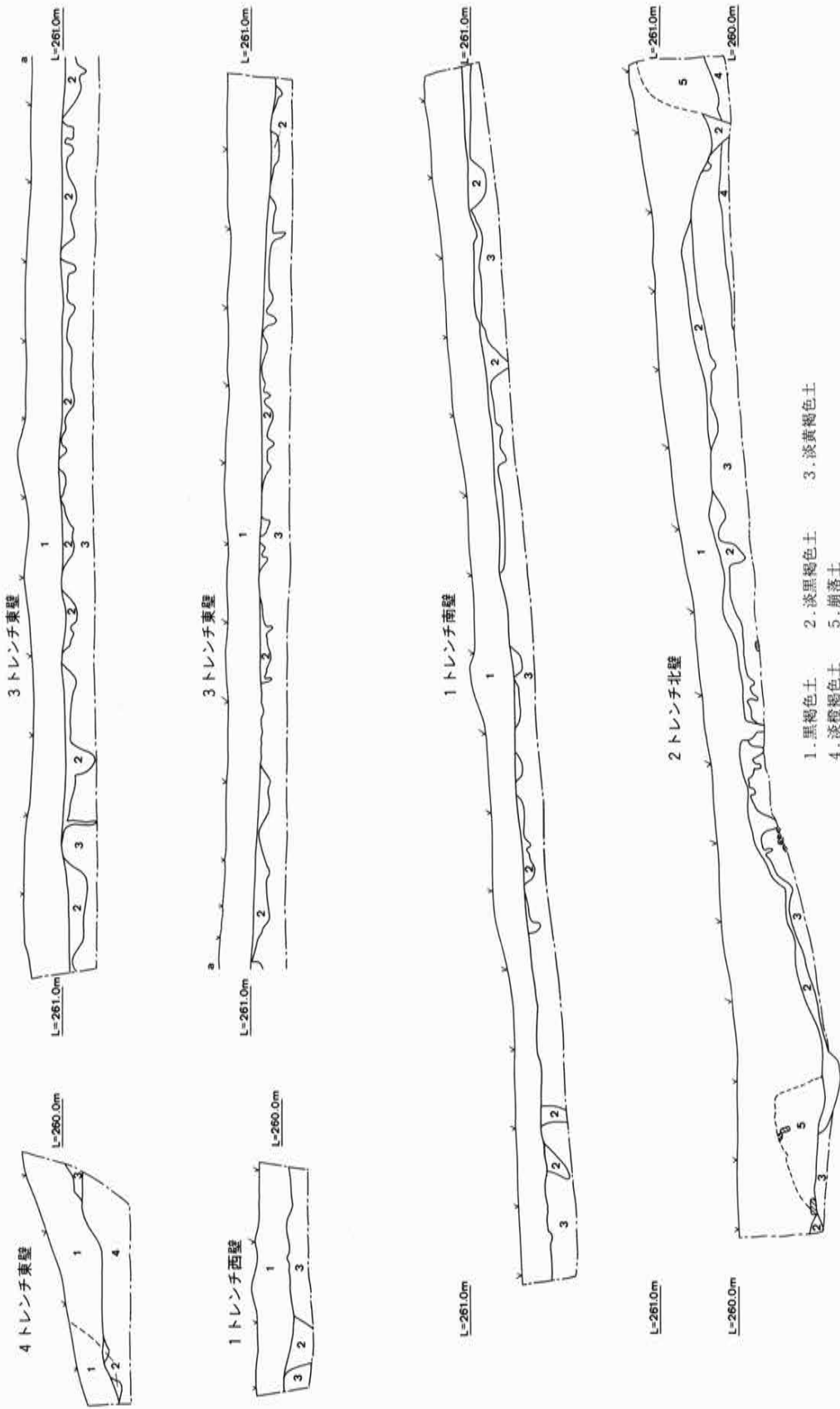
第7図 調査地位置図および周辺遺跡分布図(京都府遺跡地図より転載・加筆)

- | | | | | | |
|-----------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 83. 高梨遺跡 | 84. 周山廃寺 | 85. 高梨経塚 | 33. 周山古墳群 | 34. 祇園谷遺跡 | 88. 周山城跡 |
| 81. 卯滝谷遺跡 | 82. 八津良城跡 | 86. 慈眼寺経塚 | 89. 東山遺跡 | 87. 周山経塚 | 90. 周山瓦窯 |
| 30. 折谷古墳群 | 31. 折谷東古墳群 | 32. 殿橋遺跡 | 78. 大年古墳群 | 79. 宮坂古墳 | 91. 小栗尾古墳 |

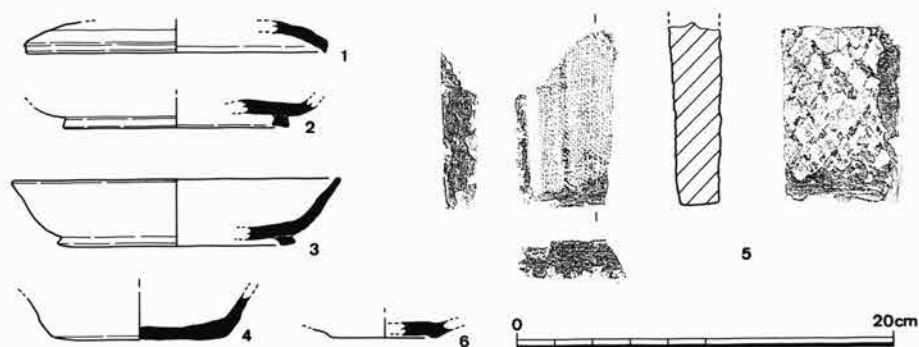
現地調査においては、京北町教育委員会をはじめとする関係機関から協力を得た。



第8図 調査地平面図



第9図 調査地断面図



第10図 出土遺物実測図

2. 調査の概要

調査対象地は、周山中学校グランド造成工事で住居跡が検出された地域から北西方向に約80mの地点で、標高260m前後である。丘陵の緩斜面地で、西側は弓削川に向かって急激に下がる。

「コ」字状に幅3mのトレンチを設定し、重機で表土を掘削した後、人力で掘り下げた。調査地の基本層序は、黒褐色土(表土層)・淡黒褐色土・淡黄褐色土(地山)・淡橙褐色土となり、その下層では岩盤や風化した礫層が見られる。地山土直上での遺構検出に努めたが、明瞭な遺構は検出できず攪乱土坑と木根痕跡を確認したのみである。

出土遺物(第10図)は、表土層から少量出土したほか、調査地および周辺で採集したものがある。1は須恵器蓋、2・3は須恵器杯B、4は須恵器杯Aである。5は平瓦片で凸面に粗い格子叩き痕、凹面に布目痕と杵板痕が明瞭で桶巻作りとわかる資料である。これらは、周山廃寺・高梨遺跡に関連するもので、7世紀末～8世紀前半の遺物である。6は瀬戸・美濃系皿の底部である。16世紀後半の遺物である。

3. まとめ

高梨遺跡第1次調査では、竪穴式住居跡5基、段状遺構2か所が検出された。2基の住居跡では、焼土・鉄屑塊や鉄製品が木炭とともに発見され、周山廃寺に関連した鍛冶が行われていたと推定されている。今回の調査では、顕著な遺構を検出していないが、調査対象地に隣接した造成地断面には、焼土層が見られること、周辺から瓦類・土器を採集しているので、住居跡が検出された地点に近い南側では遺構が残存している可能性がある。

(石尾政信)

注1 「高梨遺跡・高梨経塚現地説明会」資料 京北町教育委員会 2001.6.15

注2 調査参加者(順不同・敬称略) 新江尚生・谷山きよみ・田尻昭一・牧忠司・宮西恵津子・太田一夫・太田秀子・新井弘之・安井多喜男・木村悟・草薙大蔵・本間賢司・浅田育裕・陸田初代

3. きづがわかしょう 木津川河床遺跡第15次発掘調査概要

1. はじめに

木津川河床遺跡は、八幡市北部の木津川河道沿いから男山丘陵裾部にかけて広がる弥生時代から中世にかけての広大な集落遺跡である。調査対象地は、八幡市八幡一丁目畑に所在し、木津川・淀川・桂川の三河川が合流し淀川となる地点の東側にあたり、木津川と淀川に挟まれた洛南浄化センター内に位置する。

木津川河床遺跡は、洛南浄化センター建設に伴い、昭和58年度から発掘調査が行われており(第12図)、八幡市教育委員会が実施した木津川河川敷の調査も含め、今回の調査で第15次調査となる。洛南浄化センター内の調査では、弥生時代後期・古墳時代後期の竪穴式住居跡や古代の土壙墓、中世の掘立柱建物跡など多くの遺構が検出されている。また、木津川河川敷では、井戸・柱・石垣や中世の遺物包含層などが確認されている。

今回の調査は、洛南浄化センター内における汚泥乾燥施設棟建設工事に伴い京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。調査地周辺では、昭和60年度に汚泥脱水機棟建設に伴う調査で古墳時代後期の竪穴式住居跡が確認されており、本調査地でも集落の一端がかかる可能性が期待された。

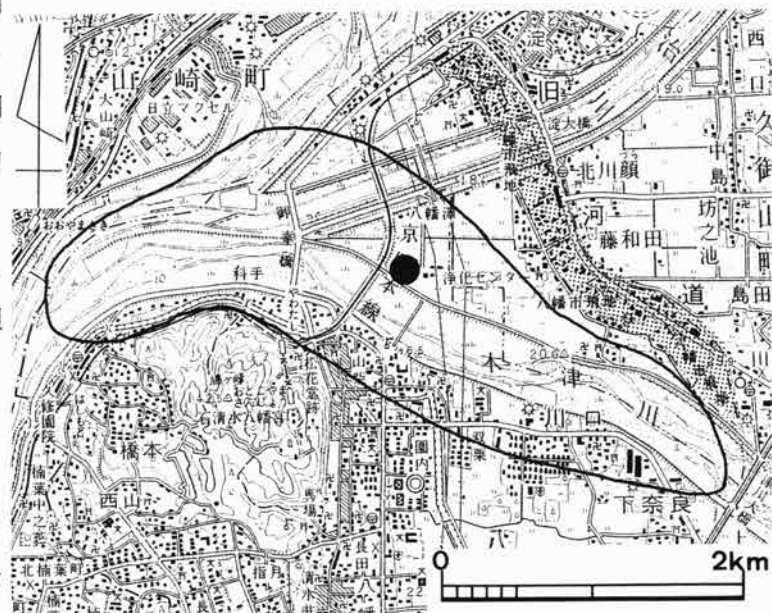
現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎と調査第2課調査第3係主任調査員増田孝彦が担当し、平成14年11月5日から11月28日まで実施した。本調査概要は増田が執筆した。現地調査にあたっては、京都府教育委員会・京都府流域下水道建設事務所・八幡市教育委員会をはじめとする関係諸機関

からさまざまな指導・助言・協力をいただいた。また、調査補助員・整理員の参加協力を得た。記して感謝したい。^(注1)

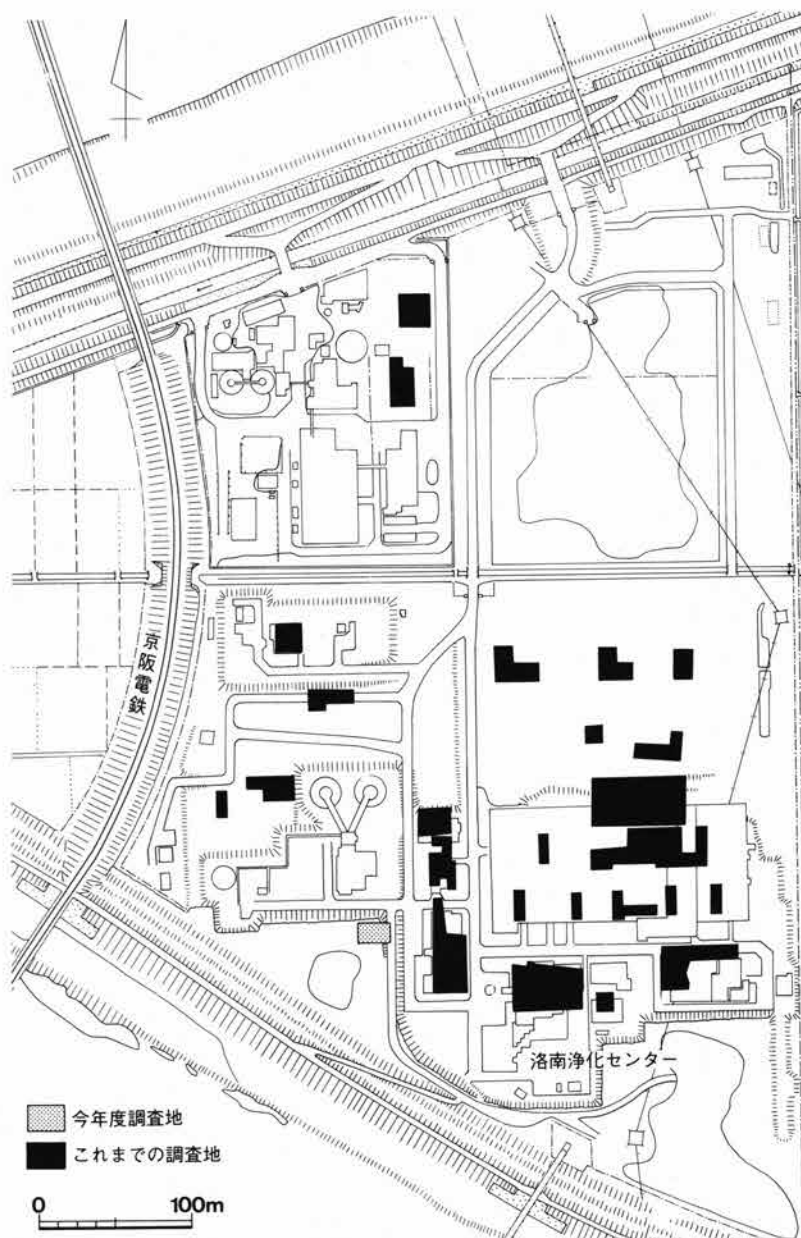
なお、調査に係る費用は、京都府土木建築部が全額負担した。

2. 調査概要

調査地は、洛南浄化センター内南西端に位置し、浄化センター建設工事に伴う盛土に



第11図 調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西南部)



第12図 トレンチ配置図

覆われていた。過去の調査結果からすると、遺構面までは相当深くなると考えられ、安全対策(壁面崩壊防止)として予め調査面積の倍近くの広さを掘り下げて盛土の除去を行い、調査面積約300㎡の掘削を行った。

基本層序(第13図)は、表土下約3.1mまでは盛土や旧耕作土、工所用仮設道路および水路・暗渠排水が設けられていた。これを除去すると、表土下約3.7mで鳥島の盛土である茶褐色粘質土が約0.7m堆積していた。表土下約4.5mで中世遺物包含層である暗灰色粘土となり、その下層に暗灰色粘質細砂、暗灰色～青灰色粘質細砂が堆積し、この下には木津川流域の氾濫原に見られる黄白色砂の堆積が認められた。鳥島下層には、地震により黄白色砂が液状

化したために起こったとされる東西方向に延びる噴砂が認められた。この噴砂は、過去の調査結果からすると、文禄五(1596)年に起こった伏見大地震によるものと考えられており、今回検出したものも同様のものと考えられる。

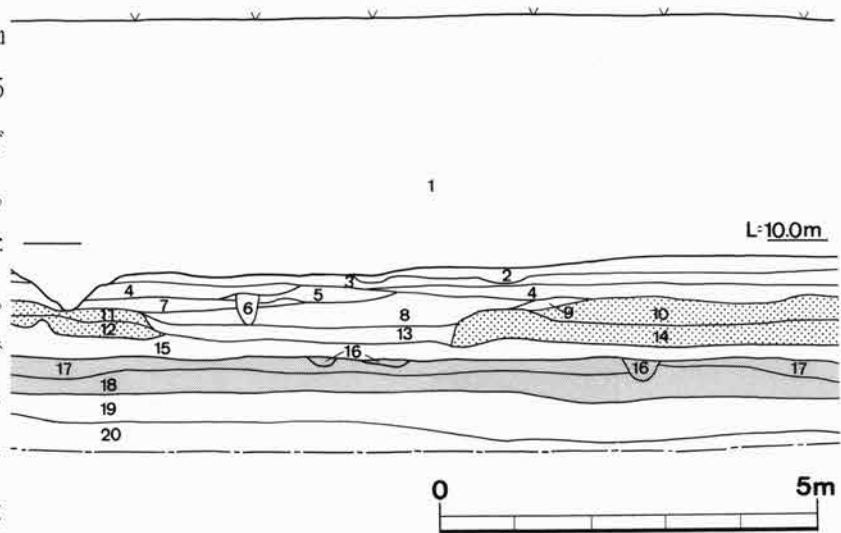
これまでの調査では、上層遺構は暗灰色粘土層、下層遺構は暗灰色粘質細砂層から検出されているが、今回の調査では上層遺構のみ確認できた。鳥島造成は、波打った状態の緑灰色砂質土上に茶褐色粘質土の造成盛土層があり、以後、水平堆積となっており地震の影響を受けていないことがわかる。

3. 検出遺構

中世の遺物包含層である暗灰色粘土より、南北方向に延びる大小の溝をトレンチ全面で検出し

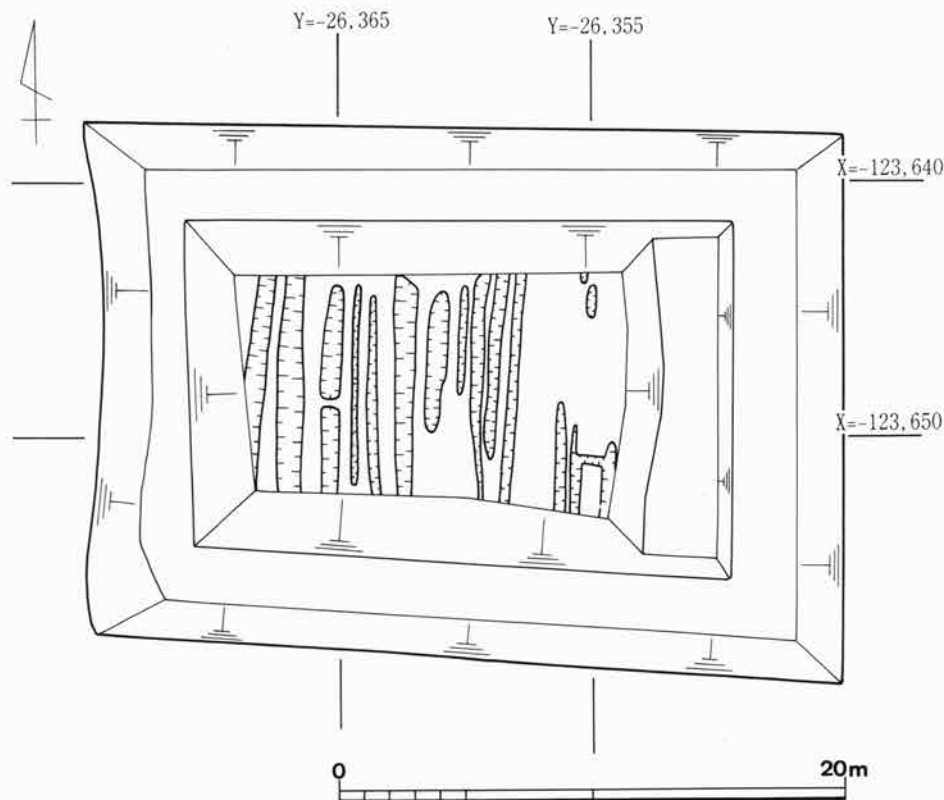
た(第14図)。溝は幅約0.8
 ~1.0m、深さ約4~8cm
 のものと、幅約0.2~0.5
 m、深さ約4~12cmほど
 のものの2種類がある。
 いずれも断面が「U」字
 形を成す浅い溝である。
 埋土は暗灰褐色粘質土で
 あるが2~3条のものを
 除き平面では溝の輪郭を
 確認できても、断面では
 確認できないものが大半
 である。

平面で確認された土色
 の変化部分を掘削すると
 磨滅した瓦器、土師器の
 細片とともに土釜が出
 土した。耕作に伴う溝と

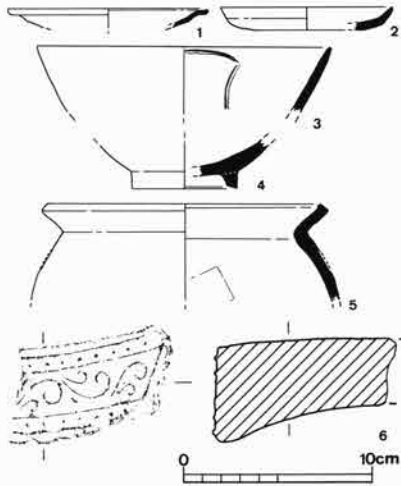


第13図 トレンチ南壁東半部分土層断面図

- | | | | |
|-------------------|------------------|------------|-----------|
| 1. 造成盛土 | 2. 旧耕作土 | 3. 淡明褐色砂質土 | 4. 淡灰色粘質土 |
| 5. 明黄褐色粘質土 | 6. 淡灰褐色粘質土 | 7. 茶褐色粘質土 | |
| 8. 暗茶褐色粘性砂質土 | 9. 灰褐色粘質土 | | |
| 10. 茶褐色粘質土・鳥島盛土 | 11. 明茶褐色粘質土・鳥島盛土 | | |
| 12. 緑灰色粘性砂質土・鳥島盛土 | 13. 暗灰色粘質土 | | |
| 14. 淡茶灰色粘質土・鳥島盛土 | 15. 緑灰色砂質土 | | |
| 16. 淡黒灰色粘質土 | 17. 暗灰色粘土 | | |
| 18. 暗灰色粘質極細砂 | 19. 暗灰色~青灰色細砂 | 20. 黄白色砂 | |



第14図 遺構平面図



第15図 出土遺物実測図

推定され、過去の調査でも多数確認されており12～13世紀を中心とする遺構と考えられている。下層遺構面である暗灰色粘質極細砂では、遺構は検出されなかったが、細片化した土師器が少量出土した。

4. 出土遺物

出土遺物には、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器(青磁・白磁)、瓦がある。大半が中世以降の細片化した遺物で包含層から出土したものであり図化できるものは少ない(第15図)。土師器には皿、土釜がある。1は暗灰色粘土より出土したもので10世紀、2は素掘り溝から瓦器細片とともに出土したもので14世紀と考えられる。3・4は青磁碗で、3は龍泉窯系のものである。4は底部片で暗灰色粘土より出土した。いずれも12～13世紀と思われる。5は大和型の土釜で14世紀前後と推定される。6は軒平瓦で、暗灰色粘土層より出土した。平城宮式6721H c型式と認定される。

5. まとめ

今回の調査では、南北方向をとる14世紀の素掘り溝を検出し、中世には今までの調査成果同様に、耕作地として土地利用されていたことが明らかとなった。また、島畠は地震を受けていないことから、伏見大地震後に造成されたものであり、暗灰色粘土との間に認められる緑灰色砂質土を伏見大地震までとすると、この層は15～16世紀、素掘り溝が検出された上層遺構は12～14世紀、下層から遺物が検出された暗灰色粘質極細砂は、それ以前と考えられる。

古墳時代の集落は検出されなかったが、少量ではあるが土器が出土していることから、隣接する汚泥脱水機棟部分で確認されている集落が、周辺にまで延びてきていた可能性もある。

今回の調査によって確認できた成果は以上である。

(増田孝彦)

注1 現地調査および整理作業参加者 大歳浩史・兵藤真千

4. ^{ひがしはら}東原遺跡発掘調査概要

1. はじめに

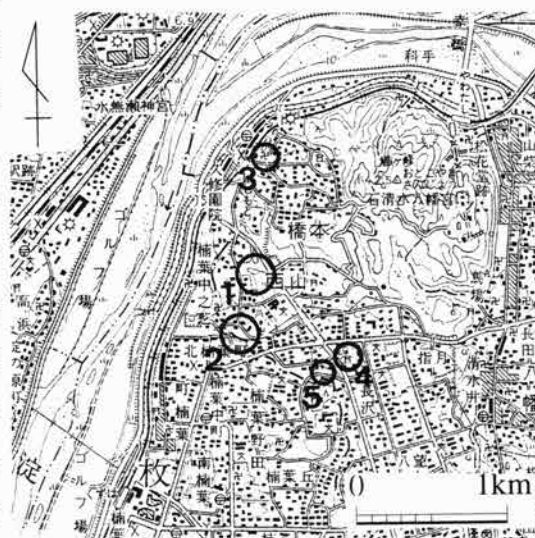
東原遺跡は八幡市橋本東原地内に所在し、男山丘陵の南西部の東に裾を開く丘陵周辺に位置する。遺跡周辺には丘陵稜線を挟んで南西部に四天王寺・平城宮式の瓦の出土で知られる楠葉・平野山瓦窯跡が、北部に室町時代の橋本経塚が、南東部に飛鳥時代から近世にかけての寺院跡である西山廃寺跡や奈良時代の瓦窯である足立寺瓦窯跡が存在する(第16図)。また、今回調査区の西隣には、猿田彦神社が存在する。東原遺跡はこれまで散布地としては認識されていたが、遺跡としての実体は不明であり、その確認が急がれた。このため調査では、遺跡確認のため9本の試掘坑(トレンチ)を丘陵部に設定し、遺跡の実体の確認につとめた。各トレンチは幅約3m、長さ約10~27mの規模で、北西~南東に順に第1~9トレンチとした。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、同調査員中村周平が担当した。調査面積は約600㎡で、調査期間には7月22日から8月29日までをあてた。なお、本調査は橋本農住組合の土地区画整理事業に伴い八幡市の依頼を受け実施した。調査を実施するにあたっては、京都府教育委員会・八幡市教育委員会の指導・助言を得たほか、調査補助員・整理員諸氏(注1)を始めとする多数の方々(注1)の参加・協力を得ることができた。記して感謝したい。

2. 調査概要(第17図)

調査の結果、各トレンチにおいてほぼ同様な竹林の土入れによると見られる盛土の堆積を、下層では、青灰色シルト層や灰褐色細砂・微砂の堆積を確認した。下層のシルト・微砂層については、大阪層群を構成する安定した海成堆積層と判断される。今回、遺構を検出したのは、第1・3・5~7トレンチである。遺構は、落ち込み・水田跡・ピット・溝などで、いずれも表土・盛土層直下のシルト・砂層を基盤層とする。第6トレンチの落ち込みを除くこれら遺構からは、遺物は出土しなかった。以下、遺構検出のトレンチを中心に概観する。

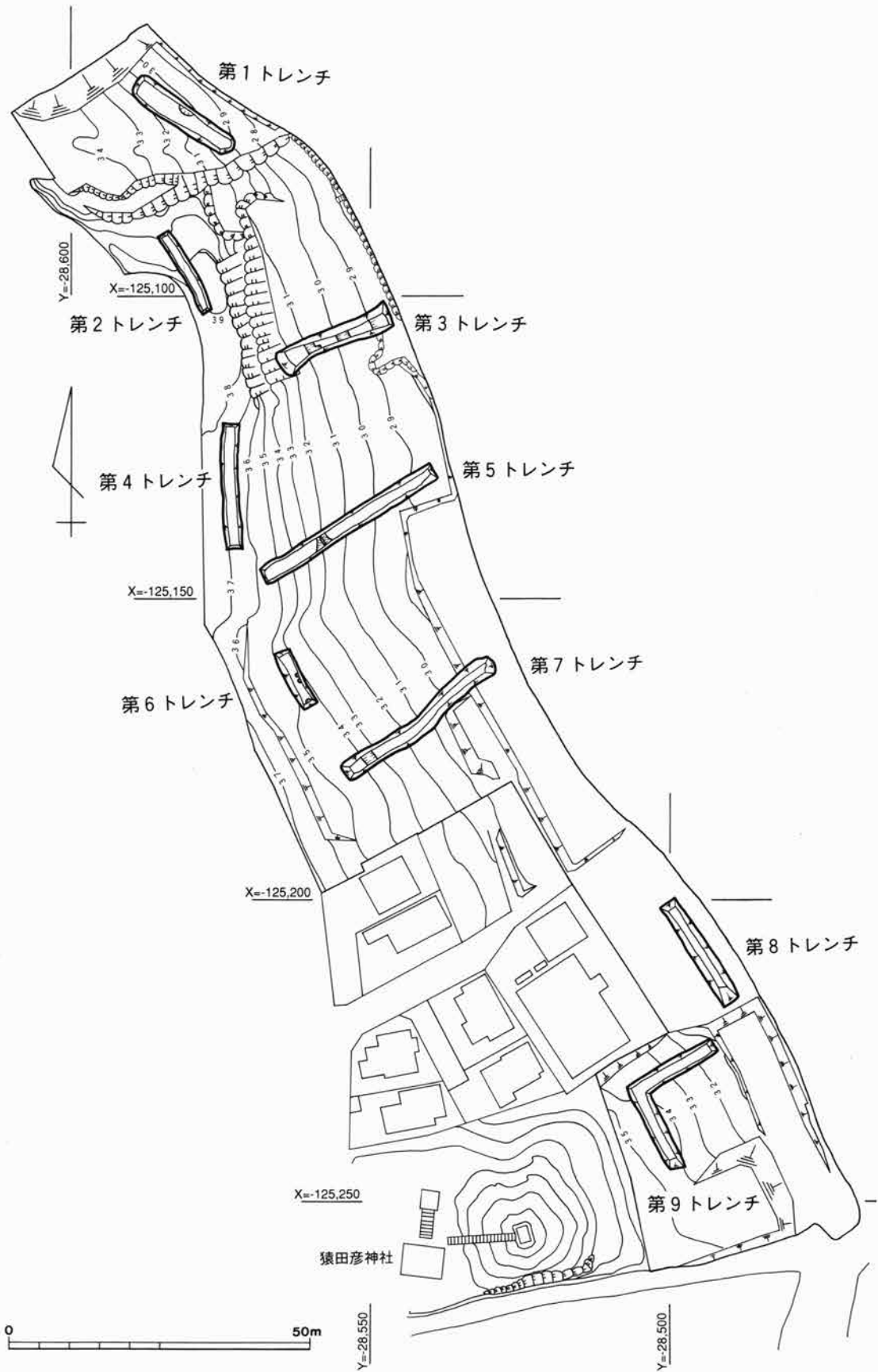
第1トレンチ 丘陵北東辺の中腹部に設定した幅約3m、長さ約20mのトレンチである。地表下



第16図 調査地位置図

(国土地理院 1/50,000 京都西南部)

1. 調査地
2. 楠葉平野山瓦窯跡
3. 橋本経塚
4. 西山廃寺
5. 足立寺瓦窯跡



第17図 トレンチ配置図

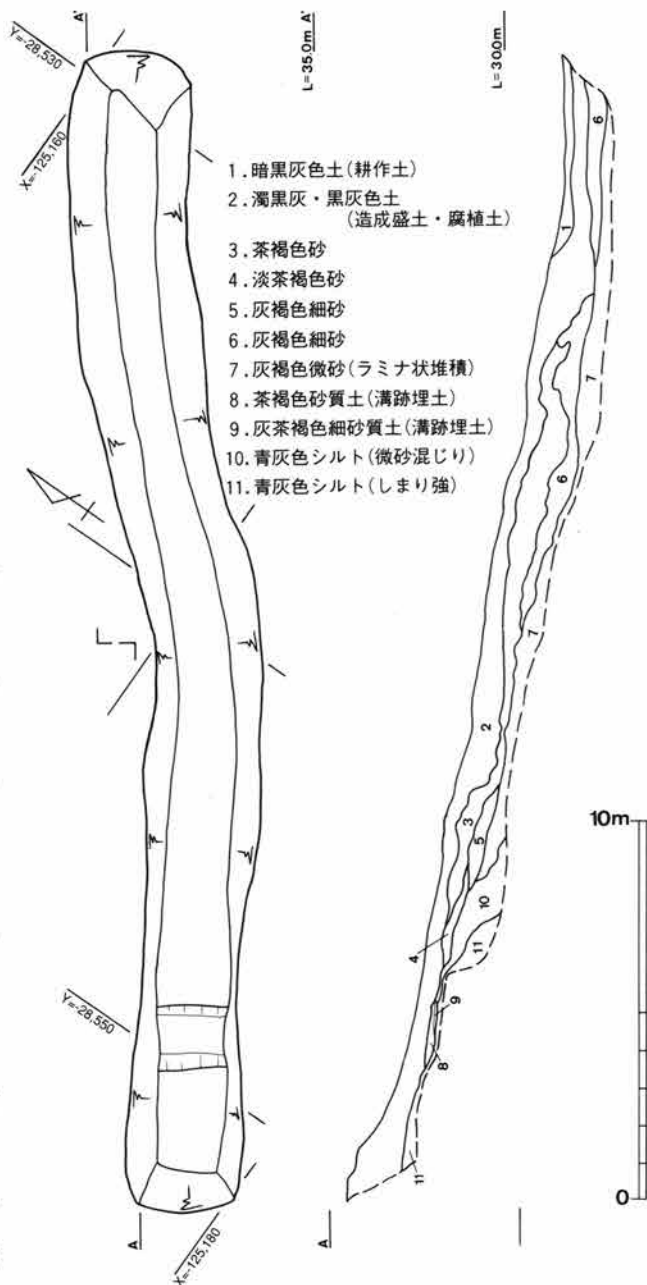
約1.2~1.8mまでは造成時の盛土、以下、黄褐色~青灰色シルトが堆積する。シルト層上でトレンチ中央部北東壁にかかる半円形の落ち込みを検出した。直径約2.2m、深さ約0.4mのすり鉢状を呈し、埋土は主に茶褐色砂質土である。瓦器碗片(第19図2)・土師器片などが盛土から出土した。

第3トレンチ 丘陵北東辺の中腹~裾部に設定した幅約3m、長さ約20mのトレンチである。中腹~裾部は傾斜角で14.8°、比高差で約5.5mを測る。地表下約1.0~1.6mまでは造成時の盛土、以下、中腹部では青灰色シルト、中腹~裾部では灰褐色の細砂・微砂の堆積となる。中腹~裾部で2条の溝、裾部で水田跡を検出した。溝はシルト層や微砂層での検出だが、盛土や細砂を埋め土とし、土取りのための採掘坑と考える。旧水田面は断面観察から灰褐色の細砂層や微砂層を掘り込んで2回の造成が認められた。盛土中からは土師器片が出土した。

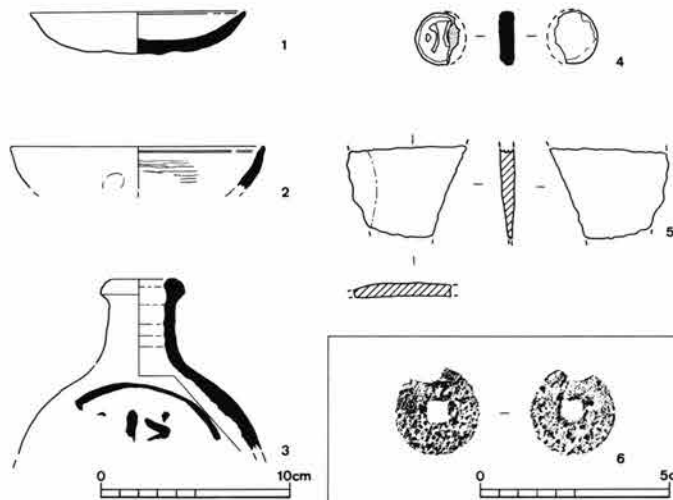
第5トレンチ 丘陵中央辺の頂~裾部に設定した約幅3m、長さ約33mのトレンチである。頂~裾部は傾斜角約11.5°、比高差約7.3mを測る。地表下約0.3~1.0mまでは造成時の盛土、以下、頂部では青灰色シルト、中腹~裾部では灰褐色細砂・砂・微砂が堆積する。中腹部付近では細砂層の上面で2条の落ち込みを検出した。盛土で埋まっており、第3トレンチ同様の土取りの採掘坑と考える。盛土中からは砥石(第19図5)が出土した。

第6トレンチ 丘陵中央辺の頂部に設定した幅約3m、長さ約10mのトレンチである。地表下約1.2mまで造成時の盛土、以下、青灰色シルトの堆積となる。シルト層上で、トレンチ南壁にかかる落ち込み、東壁際でピットを2か所検出した。落ち込みは半円形で、直径約1.2m、深さ約0.3mを測る。埋土中からは江戸時代後期の染め付け片が出土した。ピットは直径約0.2mと0.1mで深さはともに0.1m未満である。いずれも茶褐色砂質土を主な埋土とする。

第7トレンチ(第18図) 丘陵中央辺の頂~裾部に設定した幅約3m、長さ約33mのトレンチである。頂~裾部の傾斜角



第18図 第7トレンチ平面・断面図



第19図 出土遺物実測図

約9.8°、比高差約6.0mを測る。地表下約1.4～0.3mまでは造成時の盛土・腐植土、裾部付近ではその上を耕作土が覆う。それ以下、頂部では青灰色シルト、中腹～裾部では茶褐色砂、灰褐色細砂・微砂の堆積となる。土層断面では、頂部からのシルト層が途中、傾斜下降して谷状に落ち込み、上から微砂・細砂が折り重なる堆積様相を示す頂部付近、シルト層上から溝を検出した。幅約0.7m、長さ約0.8m、深さ約0.2mを測

り、主に茶褐色砂質土で埋もれていた。両端はトレンチ外に延び、何らかの区画溝であると考えられる。なお、この溝の西側のシルト層直上からは平安時代後期の土師皿(第19図1)が出土した。盛土中からは徳利(第19図3)、陶磁器片、棧瓦などが出土した。

3. 出土遺物 (第19図)

出土遺物は量にしてコンテナ1箱弱である。図化し得るもの6点を示した。いずれも包含層出土である。1は土師皿である。口縁部は一段ナデ。器壁は厚く、器形は弧状を呈する。口径11.4cmを測る。2は瓦器碗である。磨滅が著しく内面に圏線ミガキがわずかに残る。口径13.6cmを測る。3は丹波焼の徳利である。内外面ともロクロナデ、のち鉄釉を施す。4は泥面子である。表面に弧文を印刻する。第8トレンチ出土。5は砂岩製の砥石である。6は乾隆通寶である。磨滅が著しく表面の「乾」のみが判読できる。1736年初鑄。第2トレンチ出土。

4. まとめ

調査の結果、調査区内はほぼ全域、表土以下に安定地盤が広がっていることが判明した。裾部付近で地表下約3.0mまで掘り下げたが、生活面は認められなかった。また、この地盤をベースとする遺構も概して数が少なく散発的である。その多くは竹林の管理によって消失した可能性は指摘できるものの、遺物の全体量を見ても、いぜん調査区全体の遺構や遺物の兆候は希薄であると言わざるを得ない。水田跡を除けばこれらの遺構はほぼ同様な砂質土で埋もれている。土師皿・瓦器碗を除く出土遺物が、概ね江戸時代後期～末期の時期におさまることからも、これら遺構の時期については当該期に帰属する可能性を考えておきたい。

(中村周平)

注1 調査補助員 大歳浩史・川邊恵幸・土谷真代 整理員 川村真由美

5. 内里八丁^{うちさとばちちょう}遺跡第18次発掘調査概要

1. はじめに

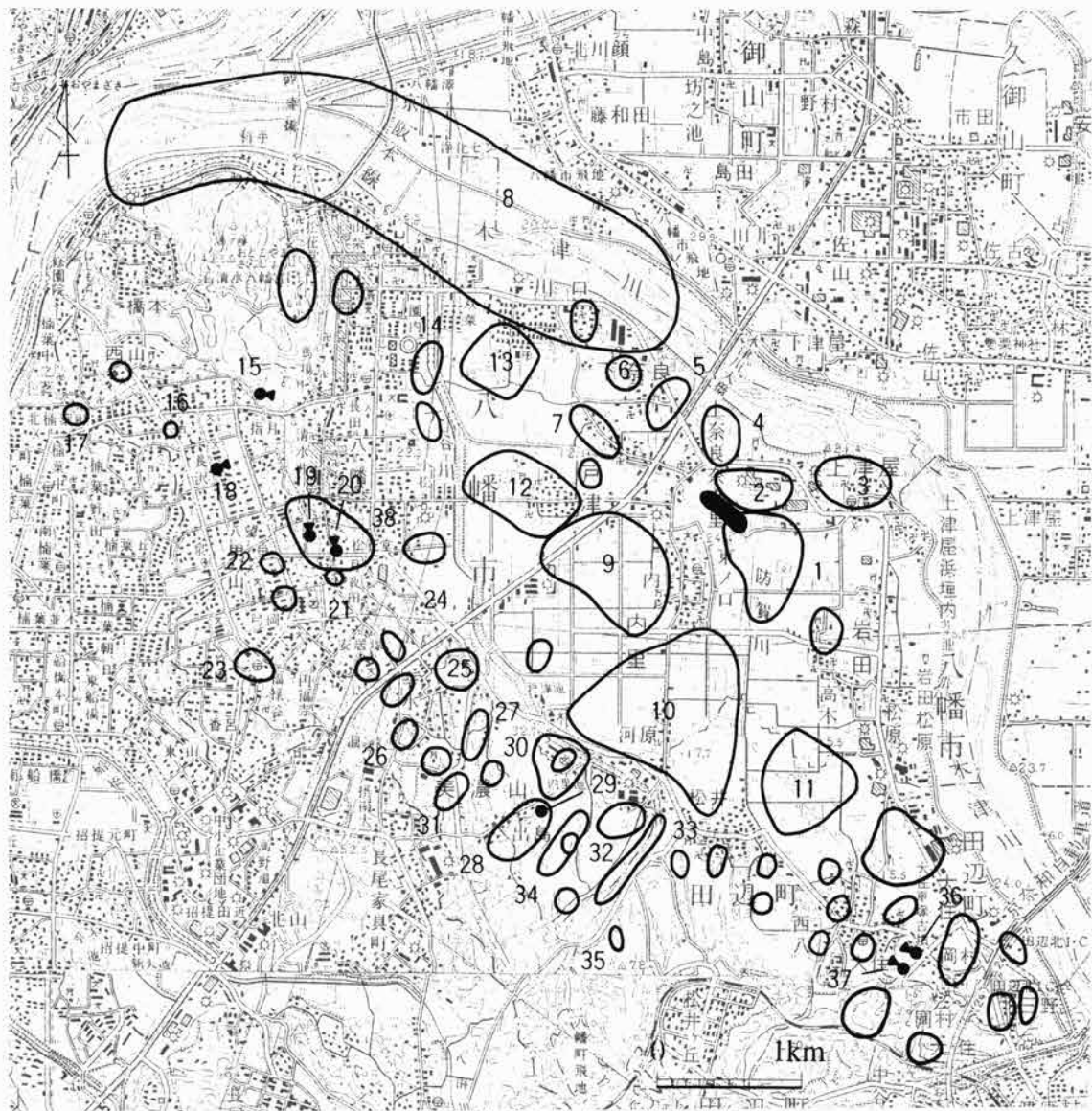
内里八丁遺跡は、八幡市大字内里小字八丁・中島・日向堂に所在する。この遺跡は、第二京阪自動車道(京都南道路)の建設工事に先立って、当調査研究センター・京都府京都文化博物館によって発掘調査が実施され、縄文時代～中世にかけての掘立柱建物跡や溝などが多数検出されるとともに、当地に推定される古山陰道と関連する遺構が検出されたこともあって、よく知られている。今回の調査は、第二京阪自動車道にアクセスする府道八幡木津線整備事業に伴って、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査対象地は、第17次調査B地区の北東側に隣接する防賀川に沿った休耕地であり、大門川を越えて上奈良遺跡に接する。調査は、道路計画線のうち南西側(防賀川寄り)のセンターライン付近に、原則として長さ10m、幅4mの長方形の試掘トレンチを10か所に設定した。その後、重機にて遺構面付近まで掘削し、その後、人力によって包含層および遺構の掘削作業を実施した。このうち、ボックスが設置されて遺構の破壊が懸念される第1トレンチ部分は、協議を経た上で拡張し、面的な調査を実施した。調査面積は、総計約430㎡である。現地での調査は、平成14年6月19日に開始し、同8月12日をもって終了した。終了に先立って、京都府田辺土木事務所・京都府教育委員会・八幡市教育委員会の確認を経た後に、安全を考慮して埋め戻し作業を実施した。

なお、調査は、調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎ならびに同主任調査員増田孝彦・同調査員河野一隆が担当して実施し、本概要報告は河野一隆が執筆した。調査にあたっては、上記の機関をはじめとして多くの関係諸機関からご教示・ご指導をいただいたほか、補助員・整理員として参加していただいた方からも、ご助力を賜った。記して感謝したい。^(注1)なお、調査に係る経費は全額京都府土木建築部が負担した。

2. 調査概要

先述のとおり、調査は10か所の長方形グリッドによって構成された試掘である。遺構の有無を確認するという調査の性格から、平均して地表下約2m程度掘り下げて平面図・土層断面図を作成した。トレンチは、最も南東に位置する部分を第1トレンチ、北西に位置するものを第10トレンチと名付けた。

第1トレンチ 平成13年度に実施した第17次調査B地区の隣接部分であり、ボックスの埋設に伴ない破壊される危険性が高いため、面的な調査を実施した。標高11.9m付近に盛土によって構築された島島が検出された。その下位、標高11.3m付近で飛鳥～奈良時代の遺構面があり、ピットと溝とを検出した。溝の南西側端部の底部付近から奈良時代の土器口縁部を逆位で検出した。



第20図 調査地および周辺遺跡分布図

(国土地理院1/50,000京都西南部・京都東南部・大阪東北部・奈良)

- | | | | | |
|------------|--------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 内里八丁遺跡 | 2. 上奈良遺跡 | 3. 上津屋遺跡 | 4. 上奈良北遺跡 | 5. 出垣内遺跡 |
| 6. 下奈良遺跡 | 7. 今里遺跡 | 8. 木津川河床遺跡 | 9. 内里五丁遺跡 | 10. 神殿遺跡 |
| 11. 魚田遺跡 | 12. 戸津遺跡 | 13. 河口扇遺跡 | 14. 嶋遺跡 | 15. 石不動古墳 |
| 16. 西山廃寺 | 17. 平野山瓦窯 | 18. 茶臼山古墳 | 19. 西車塚古墳 | 20. 東車塚古墳 |
| 21. 志水廃寺 | 22. 中の山遺跡 | 23. 幣原遺跡 | 24. ヒル塚古墳 | 25. 幸水遺跡 |
| 26. 西ノ口遺跡 | 27. 金右衛門垣内遺跡 | 28. 本郷遺跡 | 29. 王塚古墳 | 30. 狐谷横穴群 |
| 31. 宮ノ背遺跡 | 32. 女谷横穴群 | 33. 荒坂横穴群 | 34. 美濃山廃寺 | 35. 荒坂遺跡 |
| 36. 大住車塚古墳 | 37. 大住南塚古墳 | | | |

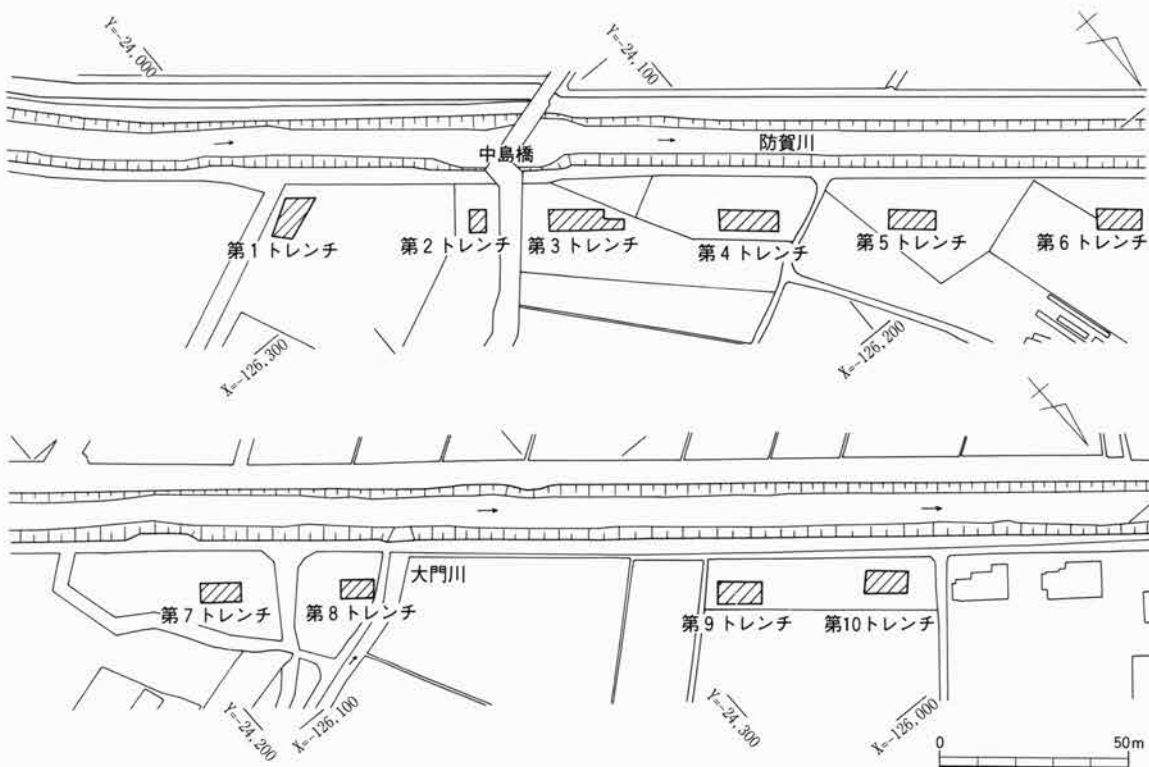
また、この遺構面のベースには弥生時代の土器片を多く交えており、標高11.1m付近に遺構面が求められる可能性があるが、明確な弥生時代の遺構は検出できなかった。出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器のほか、遊離した状態で石庖丁を検出した。

第2トレンチ 道路計画線のうち、防賀川に掛かる中島橋の東詰に設定したトレンチで、人力により掘削した。このトレンチでは、標高12m付近で中世後期の鳥島を検出した。その下位、標

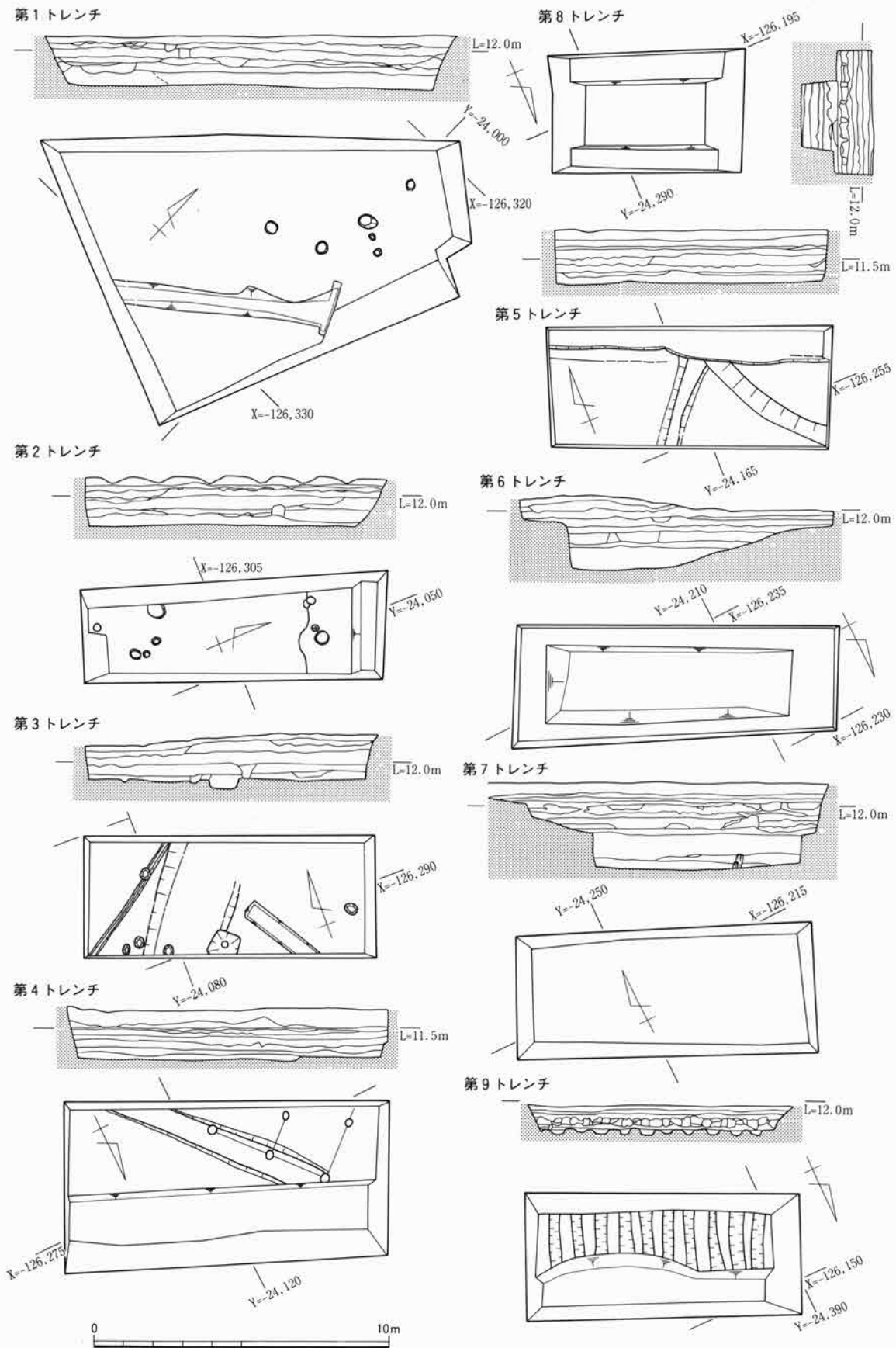
高11.3m付近では面的にピットを検出したが、この面では飛鳥・奈良時代の遺物と弥生時代の土器や古墳時代前期に該当する鉄製鋤鋤先を検出した。しかし、ベース面が漸移的に変化しており、自然堤防の形成と人為による削平が継続的に行われていたと判断される。この面の20cm程度下層には、厚さ約1cm程度の炭化物層が面的に広がるが、遺物が伴わず、湿地が離水する過程で一定度の安定期間があったものと推測される。

第3トレンチ 他のトレンチ同様、標高11.9m付近に中世の鳥島がある。この遺構面は調査はしなかったが、そこから掘削された土坑内から牛あるいは馬の頭蓋骨と見られる獣骨をトレンチ壁面で確認した。その下位、標高11.6m付近には、奈良～平安時代の土器類を投棄した溝2条とピットを検出した。そのピットの1つからは、杏仁形の有溝土錘が出土した。さらにその下層では、標高11.4m付近で弥生後期の土器が投棄された溝を検出した。これは、ほぼ完形の土器であり、溝幅も約3mと大形であるが、いかなる性格かは明らかにできなかった。

第4トレンチ 防賀川によって断ち切られた里道を挟んで南側に設定したトレンチである。標高10m付近で検出される青灰色細砂をさらに掘り下げて、より下層の確認を行ったが、調査中に湧水によって壁面が崩落した。標高9.5m付近より下は地下水位が高く、自然流路であったと判断される。遺構は、標高11.7m付近で鳥島と掘立柱建物跡の一部を検出した。掘立柱建物跡は、南北2間以上、東西1間以上の総柱建物の可能性があるが、大半がトレンチ外へと延びており詳細は分からない。その下位の標高11.0m付近では水田畦畔を検出した。堆積状況から水田耕土面は削平されて、上層の土層がプリントされたものと見なされる。共伴遺物はないが、他のトレンチの状況から弥生時代後期～古墳時代前期に該当するものと考えられる。



第21図 調査トレンチ配置図



第22図 第1～10トレンチの平面および断面図

第5トレンチ 調査対象範囲のほぼ中央に設定したトレンチであり、トレンチ壁面には明確に3時期の遺構を重層して検出することができた。まず、標高11.6m付近で、トレンチ南東部にかけり鳥島の境界部が検出された。断面からこの鳥島は約11.3m付近から約30cmの盛土を施し、水田部は約30cm分、掘り下げることによって造成されたと判断された。鳥島盛り上げ開始面が奈良～平安時代の遺構面に該当する。トレンチ北西端のコーナー部をかすめるように多量の土器が投棄された溝の一部を検出した。その約30cmほど下位から水田畦畔を検出した。本トレンチの出土遺物は、奈良～平安時代を中心とする須恵器・土師器が大半で完形品が多く、一部を検出したにもかかわらず、コンテナにして約3箱に達した。

第6トレンチ 第5トレンチと第6トレンチとで、基本層位は大きく転換する。まず、標高11.8m付近で、砂に覆われた素掘り溝を検出した。この素掘り溝は箱掘りされている点などから、根茎類などの栽培に適するように設えた近代の耕作面の可能性がある。これと位置をほぼ同じくして、約40cm下層にも素掘り溝がある。これも洪水によって供給されたと見なされる粗砂によって埋没している。その下層は青灰色のシルトが約1m以上も堆積している。この青灰色シルト内からは瓦器碗の細片が出土し、後背湿地の乾陸化に伴って耕作面が形成されたと推定される。

第7トレンチ 上津屋方面への里道の南側に設定したトレンチで、第6トレンチ同様、2面の素掘り溝を検出した。その下位には、不整合に灰褐色粗砂層が堆積している点が第6トレンチとは異なる。この砂層を掘り下げて下層を確認したところ、青灰色シルトや褐色砂層が互層をなして堆積し、不安定地盤であったと推測される。下位の耕作面の下に堆積する砂層内から、ローリングの著しい須恵器片や土師器片が検出された。

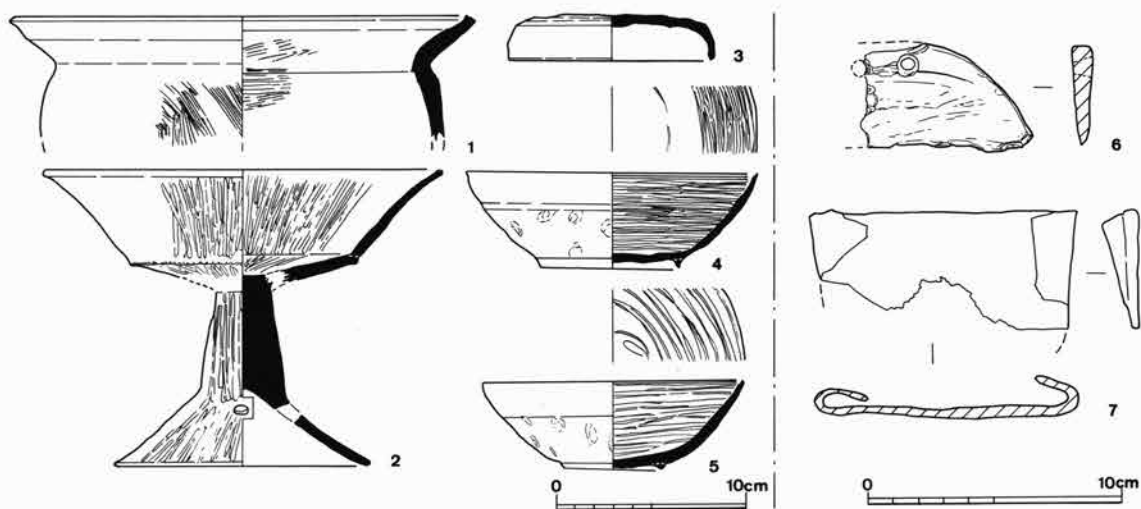
第8トレンチ 当初、大門川の北側に計画していたトレンチであるが、諸般の事情によりその南側に設定した。第6・7トレンチ同様、2面の耕作面とその下層に洪水起源の粗砂層を確認した。粗砂層の下部は、標高11m付近で青灰色シルト層へと変化した。本トレンチからはほとんど遺物が出土しなかった。

第9トレンチ 上奈良方面への里道の北側に設定したトレンチである。第6トレンチ以後の調査区と同様、2面の耕作面を検出したが、このトレンチでは上下の間に洪水砂層がほとんど介せず、直下に検出されている点が異なっている。下位の耕作面の下層には灰褐色砂層が1.5mにわたって堆積していたが、地盤が不安定で、遺構面は確認できなかった。

第10トレンチ 今回の調査でもっとも北西寄りに設定したトレンチである。堆積状況は第9トレンチとほぼ同様で、2面の耕作面の下層には不安定な砂層が広がっていた。今回の調査は、原則的に地表下2mまでを掘削したが、本トレンチは人家に近接していることもあり、安全を考慮して下層の耕作面の直下の確認までにとどめた。

4. 出土遺物 (第23図)

今回の調査で出土した遺物の一部を図示した。1は奈良時代の長胴甕の口縁部。内外面をハケ目によって仕上げる。第5トレンチ出土。2は、弥生時代後期の有稜高杯、脚裾部の境界に円形



第23図 出土遺物実測図

スカシを持ち、内外面はていねいなミガキで仕上げる。第2トレンチ出土。3は第5トレンチの土器溜まりから出土した須恵器蓋。4は第5トレンチの島島水田面から出土した楠葉形瓦器碗。密接に暗文が周回し、見込みには圈線がめぐる。5は第4トレンチの重機掘削時に出土したほぼ完形の瓦器碗。暗文の間隔が広いので13世紀に下る可能性がある。6は第1トレンチから出土した半月形の粘板岩製石庖丁で、ほぼ半分が欠けている。片面から2孔が開けられており、刃部は刃こぼれを観察することができる。7は第2トレンチから出土した鉄製鋤鋤先である。

5. まとめ

内里八丁第18次調査では、試掘調査ではあったが、遺跡の広がりを確認することができた。まず、遺構の営まれた木津川旧流路の自然堤防が、第1～5トレンチにまで延び、第6～10トレンチは氾濫原または後背湿地に該当して、近世に乾陸化するまで土地利用がなされなかったことが判明した。特に大門川より北西方向は、従来、上奈良遺跡の範囲として区画され、昨年度の八幡市教育委員会の調査で中世の仏像片が出土した地点に近接しており、遺構の存在が期待されたが、今回の試掘調査では確認できなかった。反面、第1～5トレンチでは、中世・飛鳥～平安・弥生後期～古墳前期の3時期の遺構面を確認した。中世では中世後期に造営された島島が中心であり、完形の瓦器碗も出土しているから付属する建物などの施設が検出される可能性もある。飛鳥～平安時代の遺構・遺物は、第1～5トレンチで満遍なく出土しているが、特に第5トレンチで検出された多量の土器が投棄された溝を中心に稠密な遺構の存在が予測される。弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、遺物出土量に比して遺構はさほど確認されなかったが、第3トレンチの甕が投棄された溝や畦畔などの水田遺構がこの時期に該当しよう。

(河野一隆)

注1 調査参加者 奥浩和・大歳浩史・金倫延・土谷真代・藤田久子・井上聡

6. 薪^{たきぎ}遺跡第3次発掘調査概要

1. はじめに

薪遺跡は、南山城盆地の中央部、木津川左岸丘陵裾部に位置する。今回の調査は、主要地方道八幡木津線道路整備促進事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

今回の調査地は、近鉄京都線新田辺駅の西方約1.5km、J R学研都市線(旧片町線)京田辺駅から北西約1.3kmに位置し、京都府京田辺市大字薪小字狭道・泥々・巽に所在する。調査地は、西薪集落の東側縁辺部に広がる、水田および畑地が対象となった。

薪遺跡は木津川の支流であり、甘南備山を源流とする手原川が開積した扇状地に立地する。遺跡は、東西南北方向とも約900m四方に及ぶ広範囲の遺跡である。過去の調査や採集遺物から、古墳時代と平安～鎌倉時代を中心とする集落遺跡と考えられていた。薪遺跡は過去、本格的な調査例^(注1)がわずかであり、遺跡の実体は今だ不明な状況にある。今回は、計画路線帯内の遺構の状況把握、遺跡範囲の確認などを主目的とし、一部の田畑において試掘調査を実施した。調査次数は、今回調査が薪遺跡の第3次調査となる。

調査は、平成14年1月9日から開始し、重機による表土層の除去作業を経た後、人力による掘削・精査を行った。試掘トレンチは幅5mを原則とした。試掘面積は約400m²である。調査終了は平成14年2月27日である。調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

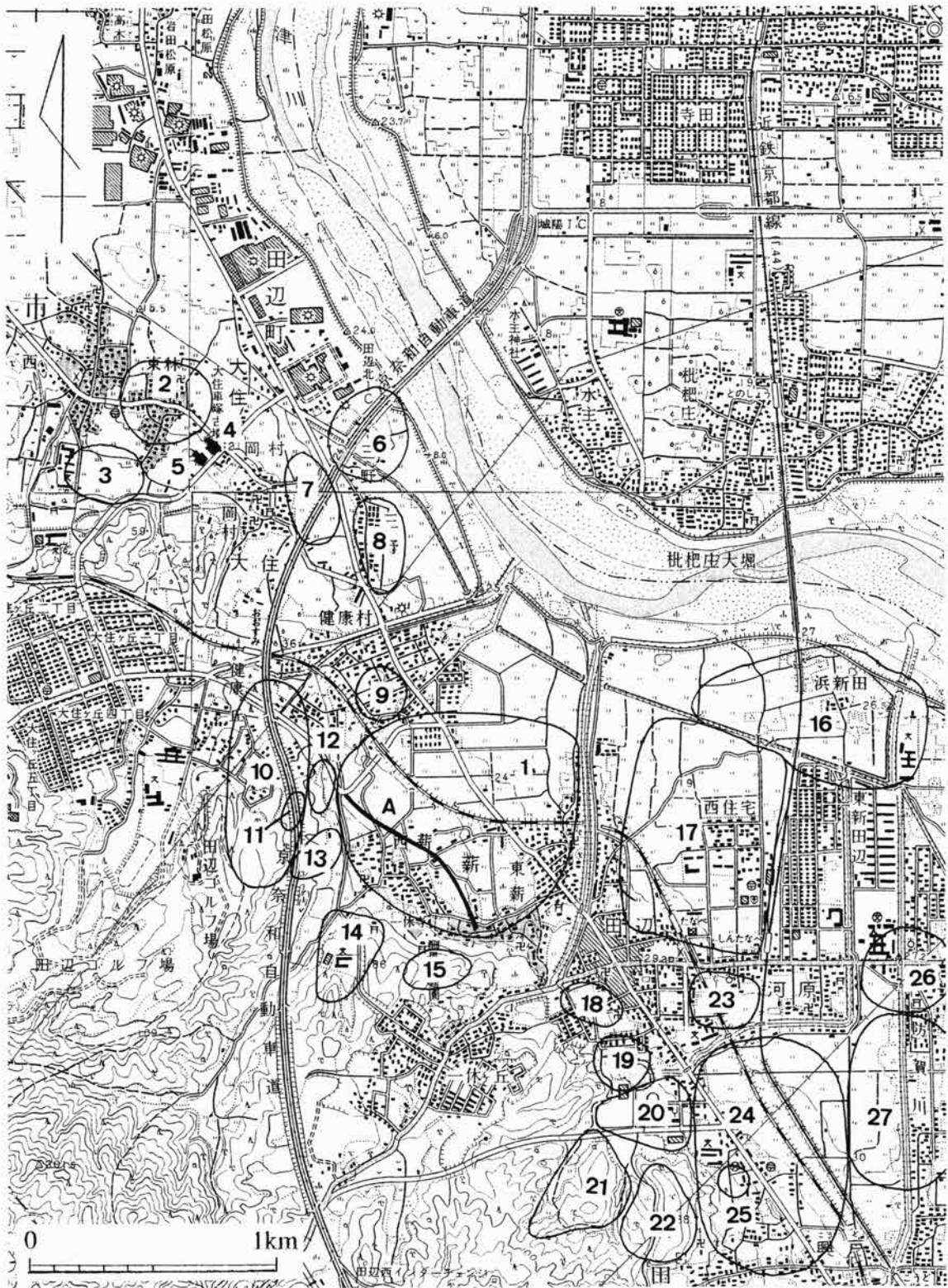
今回の発掘調査を実施したのは、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美、同主任調査員竹原一彦である。

調査を実施するにあたり、京田辺市教育委員会・京都府教育委員会・地元自治会などからご協力をいただいた。現地調査にあたっては、天候不順や酷寒の中にもかかわらず、地元有志・大学生の方々の参加を得ることができた^(注2)。あわせて謝意を表したい。

2. 位置と環境

京田辺市は、京都府南部に位置する。奈良時代には山背国綴喜郡に属し、山背国南部に位置する木津川流域は、一般的には南山城と呼ばれている。京田辺市は、市域西部に生駒山地や田辺丘陵、東部には木津川沖積地を抱える。田辺丘陵は、洪積期の粘土や砂・礫などが堆積した大阪層群大住礫層で形成され、地盤の軟弱な丘陵である。この田辺丘陵から流れ出した木津川支流の小河川の多くは、上流からの土砂堆積の進行によって川底が上昇し、天井川を形成している。市域東部の沖積地には、道路や水田畦畔・水路によって方形に区画された地割が存在し、古代からの条里形地割を今に良く残す景観が広がる。

古代の交通路は、水運では木津川上流で大和に通じ、淀川・宇治川を介しては近江・難波と通



第24図 調査地周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000宇治・田辺・淀・枚方)

- | | | | | |
|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| A. 調査対象地 | 1. 薪遺跡 | 2. 東林遺跡 | 3. 杉谷遺跡 | 4. 大住車塚古墳 |
| 5. 大住南塚古墳 | 6. 三本木遺跡 | 7. 久保田遺跡 | 8. 三野遺跡 | 9. 薪城跡 |
| 10. 狼谷遺跡 | 11. 畑山古墳群 | 12. 畑山遺跡 | 13. 西山古墳群 | 14. 堀切古墳群 |
| 15. 天理山古墳群 | 16. 伝道林遺跡 | 17. 稲葉遺跡 | 18. 尼ヶ池遺跡 | 19. 竹ノ脇遺跡 |
| 20. 田辺遺跡 | 21. 田辺城跡 | 22. 興戸古墳群 | 23. 河原遺跡 | 24. 興戸遺跡 |
| 25. 興戸廃寺跡 | 26. 鍵田遺跡 | 27. 大切遺跡 | | |

じている。陸路では、7世紀には山陰道・北陸道・東山道が南山城の地を通過する。このうち京田辺市は山陰道が通過し、和銅四(711)年には山本駅が設置される。このように、京田辺市は古代から水陸両交通の幹線路に位置していたといえる。

京田辺市の歴史環境をみると、旧石器～縄文時代に属する遺跡はわずかに数遺跡にとどまる。旧石器時代では、市域南部山間地の高ヶ峰遺跡から、サヌカイト石核1点が出土している。縄文時代では、三山木遺跡(縄文晩期～鎌倉時代)から土器の出土をみている。また、三山木遺跡に近い山崎神社には、縄文時代の石棒・異形石製品(石冠・凹石?)が御神体として伝わっている。

弥生時代の遺跡としては、前期の遺跡として宮ノ下遺跡・宮ノ口遺跡・三山木遺跡が知られる。中期では、薪遺跡背後の丘陵部に、土器や石器の出土をみた狼谷(小谷)遺跡が知られるほか、堀切古墳群の存在する丘陵部でも土器の出土をみている。後期の主要な遺跡としては、住居跡や方形周溝墓を検出した飯岡遺跡(弥生後期～鎌倉時代)、水田跡が検出された興戸遺跡(弥生後期～鎌倉時代)、田辺天神山遺跡が知られる。古墳時代では、前期の大王級の首長墳として飯岡車塚古墳(全長約90m)が挙げられるが、首長墳の築造はその後木津川対岸の城陽地域に移行する。首長系列の前方後円墳では、前期からの興戸古墳群があり、中期では大住車塚古墳・大住南塚古墳が知られる。後期にはいると、薪地区周辺の丘陵上に群集墳が築かれる。また、古墳時代末頃には沖積地に近い丘陵斜面に多くの横穴墓群が築かれていく。薪遺跡周辺部では、西側丘陵上に郷土塚古墳群(6基)・畑山古墳群(4基)・西山古墳群(3基)が、南側丘陵上には天理山古墳群(4基)・小欠古墳群(3基)・堀切古墳群(10基)が存在する。郷土塚古墳群は前期～後期にかけて築造され、うち3号墳は前期古墳、2号墳は中期古墳とみられている。郷土塚2号墳(中期)では、豊富な鉄器や家形埴輪・鳥形埴輪などの出土が知られる。また、堀切7号墳では周濠から人物埴輪3体・船形埴輪・靴形埴輪などが出土し、うち人物埴輪1体は顔面に直弧文を描いた男子像として注目される。このような薪地区周辺の古墳の様相は、近隣地域の中でも形象埴輪の豊富な地域といえる。

横穴墓群では、市内に松井横穴群・堀切横穴群・飯岡横穴群が知られる。堀切6号横穴では凝灰岩製の組合式家形石棺が出土したほか、10号横穴では8世紀の金属製帯金具が出土している。また、北に隣接する八幡市域では、美濃山地区を中心に多くの横穴墓群が存在する。これら横穴墓築造集団は「隼人」集団との関連性が窺える。

奈良時代以降は、先述した交通の幹線に位置する。平安時代の薪集落は、平安京中心線の南目印となった甘南備山が集落背後に存在し、後期末頃～鎌倉時代にかけては石清水八幡宮の荘園に含まれている。室町時代には、一休禪師が薪集落内にあった妙勝寺(大応国師創建)を復興して酬恩庵を開き、晩年を過ごしたのち88才で入寂したことが知られる。

2. 調査概要

調査対象地のうち4か所の水田・畑で調査トレンチを設定し、北から第1～4トレンチの名称を付け、調査を行った(第25・26図)。今回は各トレンチに分布する遺構の検出に努め、一部の遺



第25図 調査トレンチ配置図(注1文献第6図を転載・加筆・修正)

構に対してのみ断ち割り、部分調査を実施した。その他の遺構に関しては、今後の本格調査に委ねている。以下、各トレンチの概要を簡単に述べる。

第1トレンチ 小字狭道18・19番地の畑地に設定したトレンチである。トレンチは南北5m、東西15mの規模を測る。耕作土の床土下には、上部から緑灰色微砂層1(厚さ約30cm)・暗茶灰色粘質砂層(同30cm)・緑灰色微砂層2(地山)の堆積を検出した。耕作土床土では、瓦器碗破片など平安～鎌倉時代の遺物の出土をみた。また、暗茶灰色粘質砂層から、縄文時代後期前半と判断する土器破片(第27図1～3)が多数出土した。床土直下の緑灰色微砂層1は地山層と酷似した土層であり、遺物は含まれていない。地山面は西から東方向にゆるやかに下る傾斜地であり、この地山面で精査を行ったところ、流路2本・土坑4基・柱穴10か所を検出した。

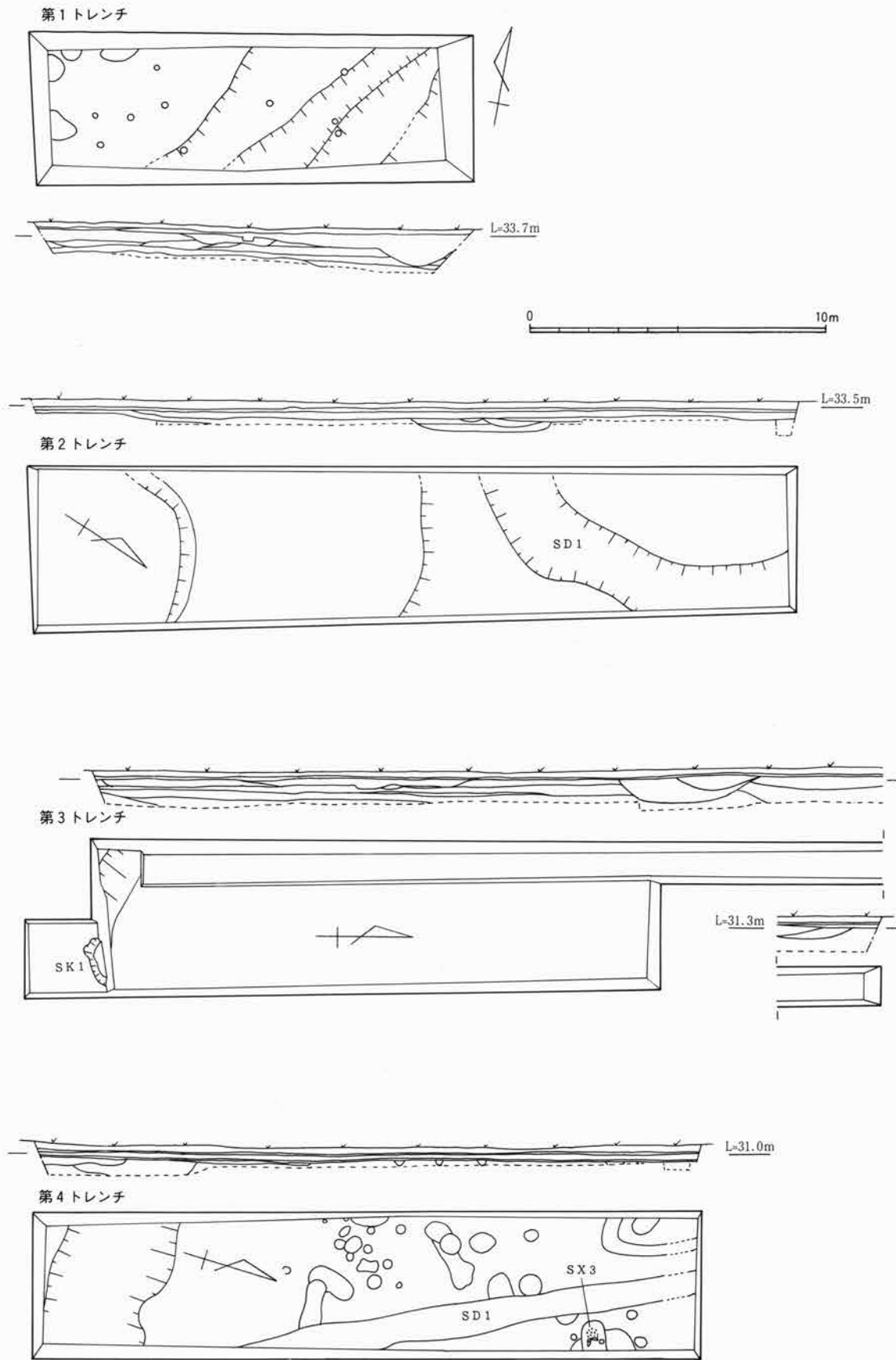
第27図1は、口縁端部が内外に肥厚する緑帯文系の深鉢である。肥厚した口縁頂部は渦巻文と弧線文を配し、波頭頂に刺突文が存在する。2・3は、体部外面に2条ほどの沈線文を配する深鉢である。いずれの土器も色調は黒色の強い暗茶褐色を呈している。

第2トレンチ 5×25mの規模で、やや北から西に振る南北方向トレンチである。耕作土床土直下に、古墳時代後期～平安時代の遺物を含む包含層(20～30cm)を検出した。検出遺構として、トレンチ北端付近から幅約2mの弧を描く溝(SD1)を検出した。このSD1では、古墳時代後期の埴輪(円筒形埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪)が多量に出土した。また、包含層中には、埴輪片(第27図7・8)と奈良時代後半の土器片(第27図4～6)が数多く存在した。

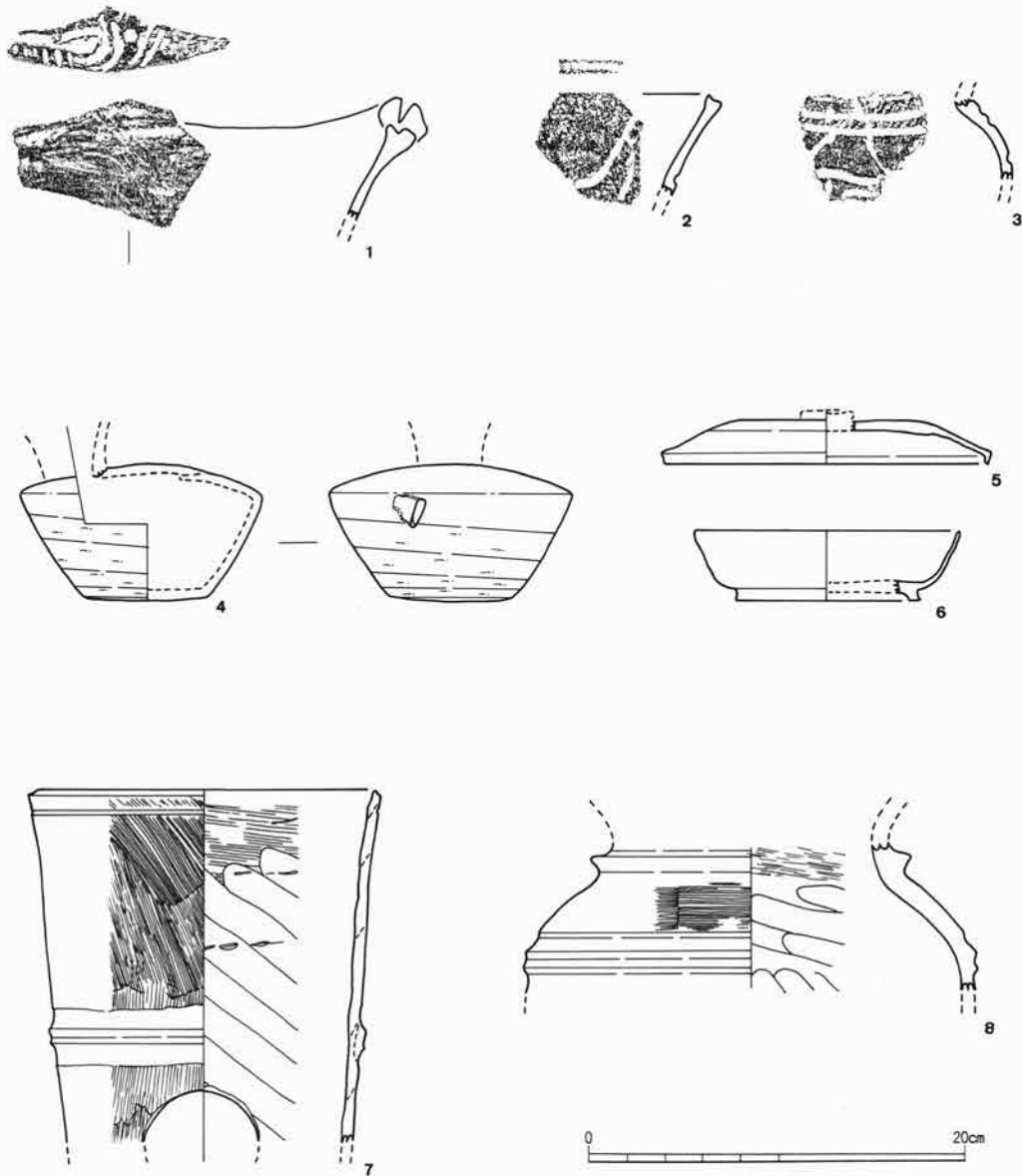
第27図4は、やや軟質の須恵質焼成の平瓶であり口縁部を欠く。体部上半に1か所穿孔が認められる。5・6は須恵質の蓋と杯である。7は小ぶりの円筒形埴輪であり口径は18.8cmである。口縁端部からやや下がった外面に、1条の沈線をめぐらす。8は朝顔形埴輪の頸部である。いずれの埴輪も胎土が精良で硬質焼成である。川西編年V期に属する。

第3トレンチ 5×18mの南北方向トレンチである。耕作土床土下には灰色系の粗砂(30cm)が堆積し、その下層に第1トレンチで確認した緑灰色微砂層と同様な土層が存在する。当トレンチは地下水の水位面が高く、緑灰色微砂層上面の地表下50cm付近で湧水が始まり、緑灰色微砂層自体は軟弱なシルトの様相を呈する。調査地内では明確な遺構は認められないが、南端部トレンチ壁面で緑灰色微砂層を掘り込む土坑(SK1)を検出した。土坑埋土は暗灰色粘質土であり瓦器碗破片(鎌倉時代)がわずかに含まれていた。

第4トレンチ 5×22mの南北方向トレンチである。耕作土床土下に暗茶灰色礫混じりの砂質土(20cm)が認められ、縄文時代後期～平安時代の遺物が含まれていた。包含層出土遺物では、縄文土器が多数を占めている。地表下50cmで地山(淡黄灰色砂質土)に達し、この地山面から溝・土坑・配石遺構を検出した。遺構の埋土はいずれも暗茶褐色土で酷似し、縄文土器が含まれることから、これらの遺構は縄文時代に属すると判断する。調査地を縦断する幅1mの素掘り溝(SD1)は、縄文土器片を含むが、検出面で須恵器破片の一群を検出している。古墳時代以降の溝とも考えられるが、詳細は今後の機会に委ねる。



第26図 調査トレンチ平面図



第27図 出土遺物実測図

1～3. 第1トレンチ包含層 4～6. 第2トレンチ包含層 7・8. 第2トレンチSD1

3. まとめ

今回の調査では、わずか4か所の小規模なトレンチ調査であったが、これまで知られていた新遺跡の様相に、新たな知見を加えることができた。

縄文時代

新遺跡は、古墳時代後期以後の遺跡とみられていたが、今回、縄文時代に遡ることが明らかとなった。第1および第4トレンチから溝・土坑・柱穴を検出し、多くの土器と石器が出土している。出土した土器は、福田K2式～北白川上層式の中間に位置する広瀬土坑40段階並行期とみられ、縄文時代後期前半に属するものである。遺構の検出状況から、第1・4トレンチ周辺に縄文時代の集落関連遺構が多数存在するとみられる。また、縄文時代の集落は、小規模な住居群が扇状地内の微高地上に点在すると判断する。

古墳時代

これまで、古墳は堀切古墳群・郷土塚古墳群など周辺丘陵上に存在し、平地には存在しないとみられていた。今回、第2トレンチから古墳の周濠とみられる溝を検出したことから、丘陵を下った扇状地上にも古墳が築かれていた状況が明らかとなった。SD1を古墳周濠と判断する根拠として、溝から出土した埴輪片は数も多く、接合資料も多数含まれる。器表面の磨滅が少なく、丘陵上の古墳から流出した埴輪ではなく、直近に存在した古墳に伴う埴輪と判断する。

古墳は、墳丘と埋葬施設がすでに失われている状況にあるが、SD1の規模・形状から直径約16mの円墳と推測される。また、周辺の状況から古墳は単独古墳とは考えにくく、さらに周辺部に幾つかの古墳の存在が予測される。

奈良～平安時代

第1、第2、第4トレンチで土師器・須恵器などの出土をみている。特に第2トレンチ南東部包含層からの出土が顕著であるが、遺構は確認できなかった。周辺に同時期の集落が存在する可能性が高い。

鎌倉時代

第3トレンチから鎌倉時代の土坑(SK1)を検出した。第3トレンチは湧水が激しく、土質も特に軟弱である。時期不明(鎌倉時代以前)であるが、旧河川か湿地が存在した可能性が高い地点である。検出した緑灰色微砂層は、第1トレンチ例をみるならば、縄文時代後期の地山と考えられる。南端部で検出した土坑(SK1)は、縄文時代遺構と土色・土質が異なる。第4トレンチで検出した縄文時代遺構は、第3トレンチでは確認できない。

(竹原一彦)

注1 鷹野一太郎ほか「新遺跡発掘調査概報」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第30集 京田辺市教育委員会) 2000

注2 調査参加者(順不同) 汐碓誠・内田真一郎・与十田節子・福田玲子・吉岡弘子

参考文献

千葉豊ほか『京都大学埋蔵文化財調査報告』(京都大学埋蔵文化財研究センター) 1991

7. 三山木地区区画整理事業関係遺跡 発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、三山木地区区画整理事業に伴い、京田辺市の依頼を受けて実施した。この事業にかかる遺跡としては、二又遺跡と三山木遺跡がある。二又遺跡は、三山木遺跡北側の沖積地に広がる。飛鳥から平安時代後期にかけての井戸や堀跡(土塁状遺構)などが検出されている^(注1)。三山木遺跡は、山崎から北東方向に延びる微高地付近に広がる遺跡で、弥生時代から中世にかけての土器が散布する^(注2)。

この地は、古山陰・山陽併用道が通っており、近畿日本鉄道三山木駅東側に山本の字名が残っていることから、この付近に「山本駅」が存在したと想定されている。平成10年度以降、京田辺市教育委員会と当調査研究センターが、両遺跡の発掘調査を実施してきた。これらの調査によって、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を発見しさまざまな成果を得たが、道路関係遺構の発見には至っていない(付表1)。

今回の調査地は、二又遺跡が、京田辺市三山木田中19-2ほかにあたり、三山木遺跡が、京田辺市三山木柳ヶ町52-4にあたる。発掘調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼第3

付表1 三山木遺跡調査一覧表

遺跡名	回数	調査期間	調査面積	調査主体	調査担当	年代	検出遺構
二又遺跡	第1次	平成10年11月9日 ～ 平成11年2月5日	約1,500㎡	京田辺市教育委員会	鷹野一太郎 五百磐顕一	飛鳥時代 ～ 鎌倉時代	土坑・溝・掘立柱建物跡・井戸
同上	第2次	平成14年5月21日 ～ 平成14年10月30日	約1,000㎡	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	岡崎研一 河野一隆	奈良時代 ～ 鎌倉時代	掘立柱建物跡・井戸・柱穴・溝
三山木遺跡	第1次	平成10年11月9日 ～ 平成11年2月5日	約300㎡	京田辺市教育委員会	鷹野一太郎 五百磐顕一	縄文晩期 ～ 鎌倉時代	溝・柱穴
同上	第2次	平成11年5月17日 ～ 平成11年10月28日	約1,800㎡	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	岡崎研一 田代弘	弥生前期 ～ 鎌倉時代	土坑・溝・掘立柱建物跡・井戸
同上	第3次	平成12年5月15日 ～ 平成12年9月28日	約1,400㎡	同上	岡崎研一	平安時代	掘立柱建物跡・溝・土坑
同上	第4次	平成13年5月21日 ～ 平成13年10月26日	約1,300㎡	同上	引原茂治 岡崎研一	弥生時代 ～ 江戸時代	土坑・溝・掘立柱建物跡・井戸・池
同上	第5次	平成14年5月20日 ～ 平成14年10月30日	約350㎡	同上	岡崎研一 中村周平	弥生前期 ～ 平安時代	溝・柱穴・土坑

係長奥村清一郎、専門調査員岡崎研一、調査員河野一隆・中村周平が担当した。現地での調査期間は、二又遺跡が平成14年5月20日から9月27日、三山木遺跡が同年5月21日から7月12日までで、調査面積は、二又遺跡が約1,000㎡、三山木遺跡が約350㎡の、合計約1,350㎡である。9月19日には、65人の見学者のもと、現地説明会を実施した。

本概報作成にあたっては、岡崎と調査補助員榎崎藍子ならびに船築紀子(奈良大学学生)が執筆し、文責を文末に記した。

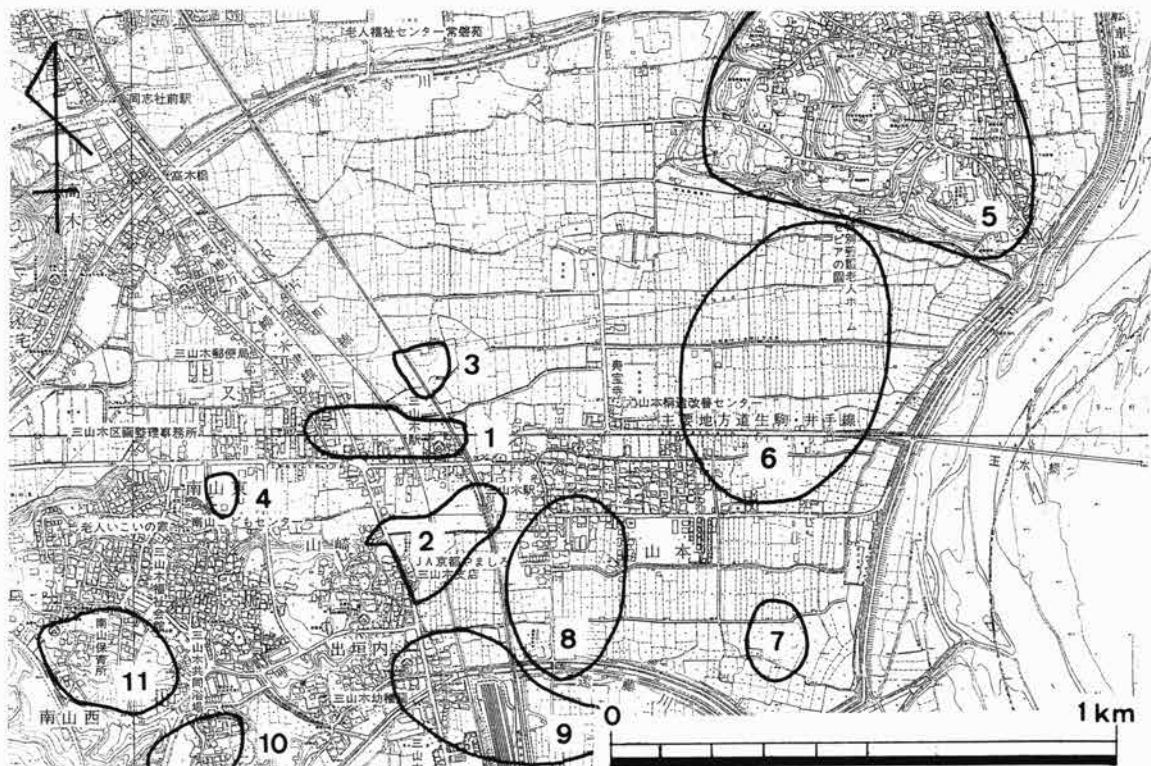
調査に係る経費は、京田辺市が全額負担した。

調査を実施するにあたっては、京都府教育委員会・京田辺市教育委員会の指導・助言を得た。また、調査期間中は、三山木地区区画整理室・京都府立山城郷土資料館・地元各自治会など各関係諸機関の協力をいただいたほか、地元の方々をはじめ学生諸氏には、調査補助員・整理員として従事していただいた。^(注3)ここに記して、感謝の意を表したい。

2. 位置と環境 (第28・29図、図版第25)

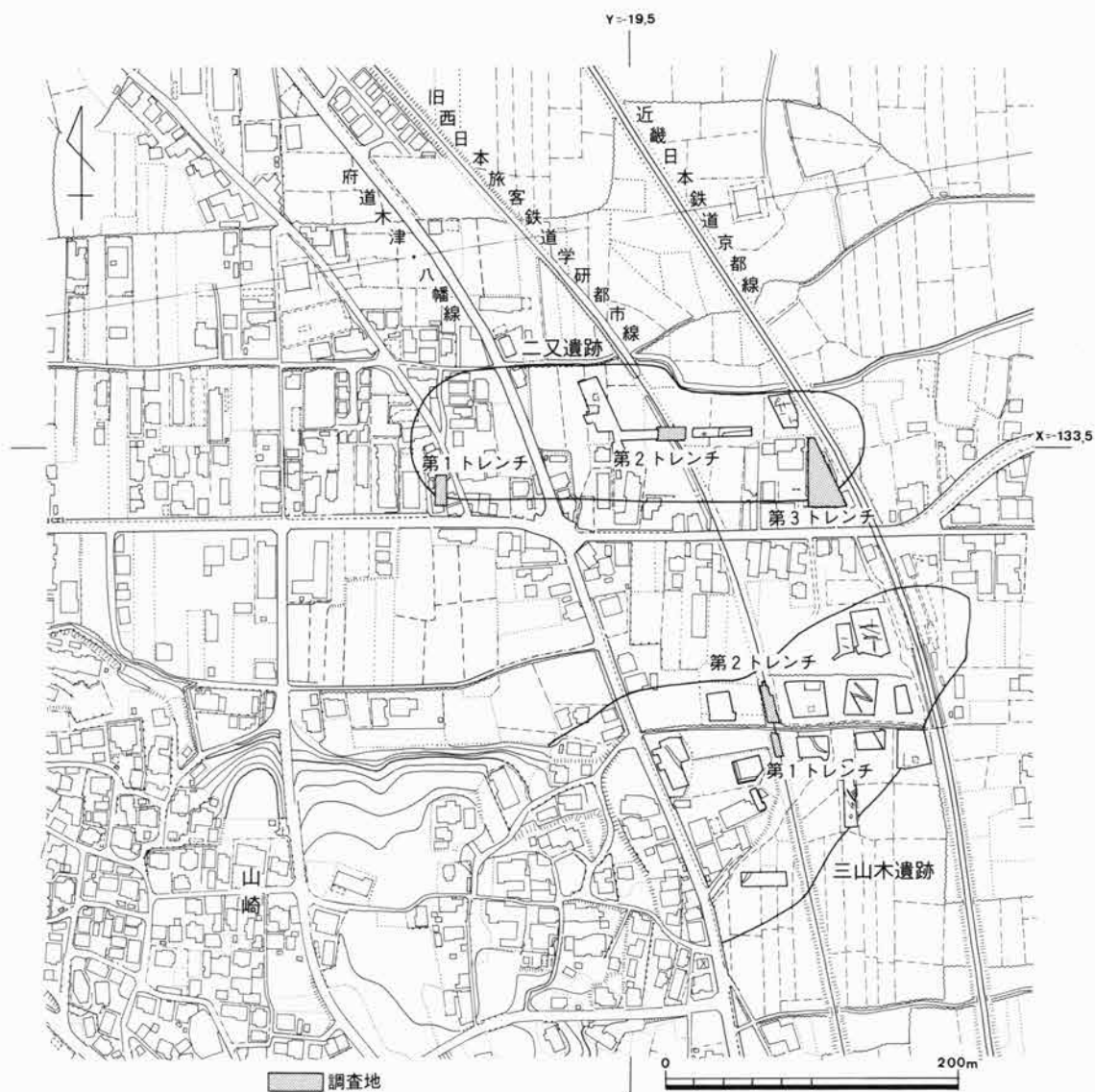
この付近は、三山木地区区画整理事業に先立ち、平成9年度に京田辺市教育委員会が試掘調査を実施した。その範囲は、およそ普賢寺川から遠藤川まで、木津川から府道木津・八幡線西側までの範囲である。この試掘調査結果から、三山木遺跡・二又遺跡・東角田遺跡・上谷浦遺跡が新たに認められた。

周辺の主要遺跡としては、二又遺跡の南方約600mに宮ノ下遺跡が広がる。近畿日本鉄道京都



第28図 調査地および周辺遺跡分布図(1/15,000京田辺市全図)

1. 二又遺跡 2. 三山木遺跡 3. 東角田遺跡 4. 上谷浦遺跡 5. 飯岡遺跡
6. 古屋敷遺跡 7. 遠藤遺跡 8. 直田遺跡 9. 宮ノ下遺跡 10. 西羅遺跡 11. 南山遺跡



第29図 二又遺跡・三山木遺跡調査地配置図

線の操車場建設に伴う調査で、弥生時代の遺構と奈良時代の掘立柱建物跡などを検出している^(注4)。宮ノ下遺跡南西方向の丘陵部には、奈良時代前期に創建されたとされる三山木廃寺がある。また、綴喜郡条里は木津川から以西の山際までほぼ真南北に施行されたとする歴史地理学の見解に対し、興戸遺跡の調査成果から、奈良時代から長岡京期には古山陰・山陽併用道に平行した方形地割が存在し、鎌倉・江戸時代に大きく地割の変更がなされ、徐々に真南北方向を向くようになるとみる仮説が提唱されている^(注5)。

古屋敷遺跡の調査時には、飯岡丘陵周辺の条里復原図が歴史地理学の手法によって示されており、一坪を南西隅に置き北進する千鳥式坪並であるとされる^(注6)。これによると、今回の調査地は、山本里の西隣の里にあたり、十四坪付近となる。相楽郡条里北端に所在する椋ノ木遺跡では、坪境溝の出土遺物から12世紀中葉～後半には、条里地割が施行されていたとされている^(注7)。

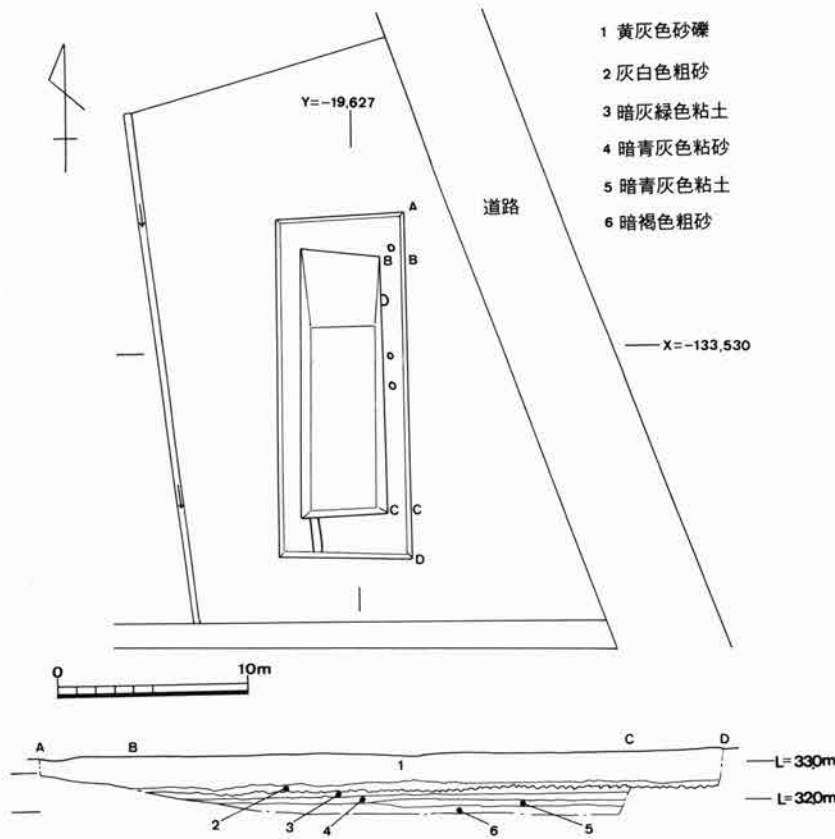
(1) ^{ふたまた}二又遺跡 第2次

遺跡内に3か所の調査地を設定した。西から東へ第1・第2・第3トレンチとした。第1トレンチは約130m²、第2トレンチは約190m²、第3トレンチは約680m²である。第2トレンチは、京田辺市教育委員会が調査したトレンチの中間地点にあたり、掘立柱建物跡と斎串が出土した井戸に挟まれた地点となる。

1. 検出遺構

①第1トレンチ(第30図、図版第26)

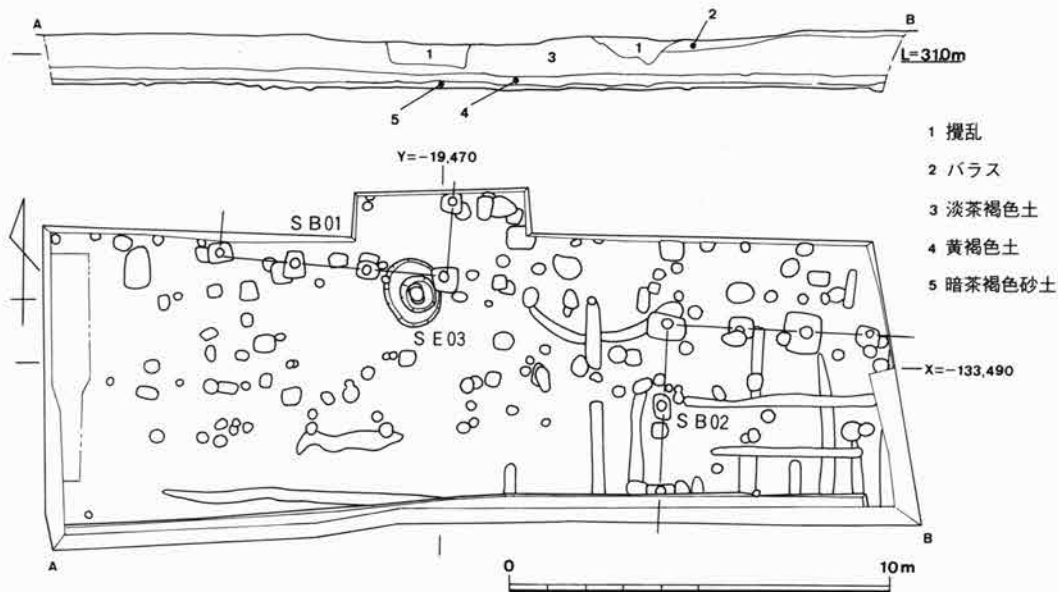
約7×18mの南北方向のトレンチを設定し、掘削した。地表下0.8mは、近代以降の堆積で、断面から家の基礎や溝などが認められた。この近代以降の堆積土下層からは家具の破片が出土している。その下は、主に灰色砂土と灰色粘土が互層となって厚さ0.7m堆積していた。暗灰緑色粘土の上面は波状を呈し、その上に灰白色粗砂が堆積していた。暗灰緑色粘土からはスタンプ文の伊万里の破片が出土し、一部家畜の痕跡も認められ、畜力を利用した耕作が窺えた。これらのことから、暗灰緑色粘土は近世後期の水田で、灰白色粗砂は近代の洪水による堆積層であると考えられる。この2層下にも砂土が厚く堆積していた。京田辺市教育委員会の試掘調査によってこの付近に谷地形が東西方向に通っていたと想定されている。



第30図 二又遺跡第1トレンチ実測図

②第2トレンチ(第31図、図版第25・27)

トレンチ中央には、J R線の攪乱が見られる。包含層は地表下約1mで、厚さ約0.3m確認できた。奈良・平安時代を主とする土器片が出土した。瓦器片など中世の土器片の出土は極少量であった。遺構は、この包含層下層から掘り込まれており、遺構内埋土と顕著な変化が認められないことから、包含層を取り除いた面で精査を行った。検出した遺構は、掘立柱



第31図 二又遺跡第2トレンチ遺構実測図

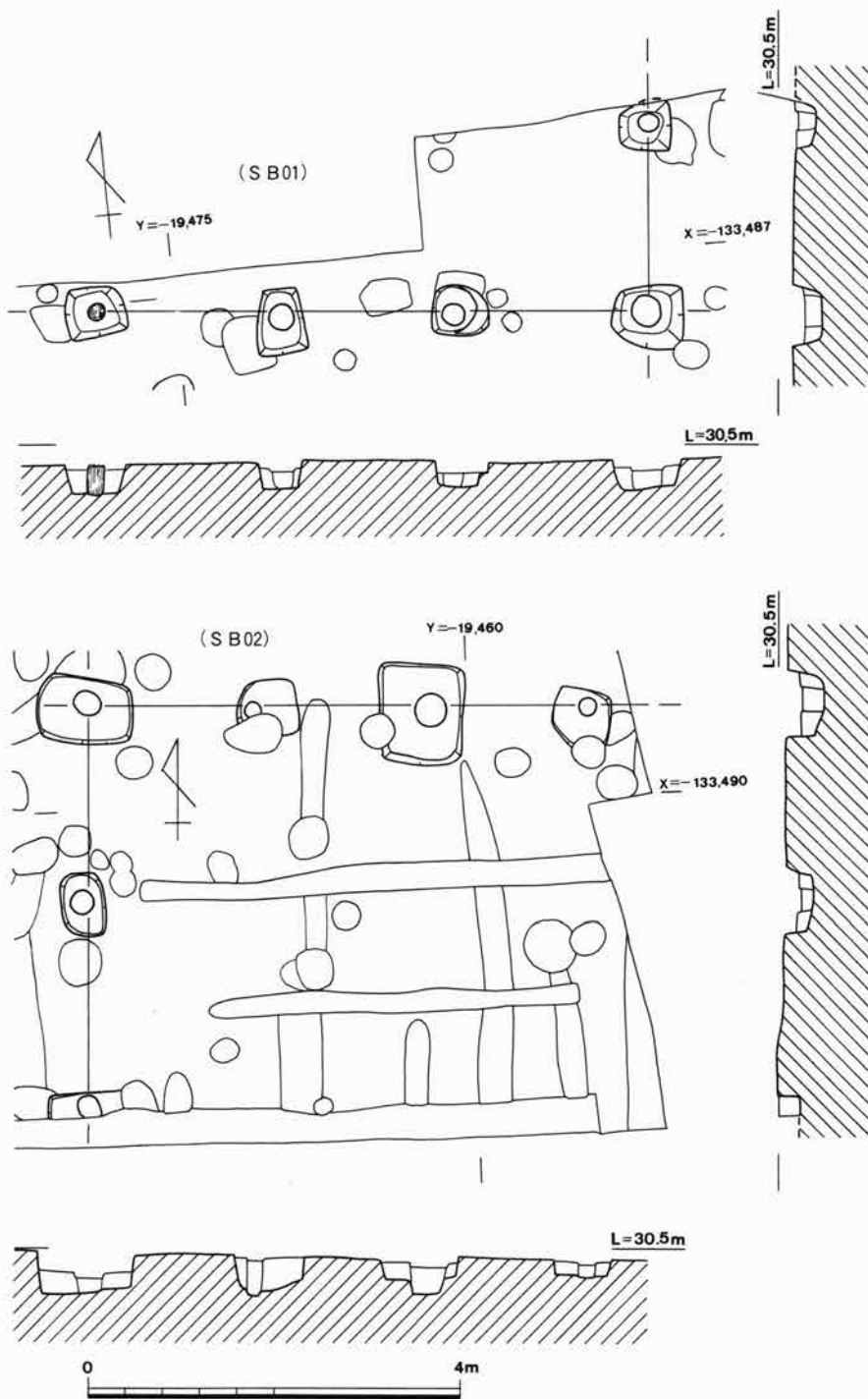
建物跡2棟・井戸1基・柱穴群・耕作溝などである。

S B01(第32図、図版第28) トレンチ中央部で検出した掘立柱建物跡である。東西3間、南北2間以上からなり、主軸方位はN5°Eである。トレンチ北側の調査対象地外に延びるため、全容については不明である。掘形は方形で、その規模は、一辺0.4~0.6m、深さ約0.3mを測る。建物南西隅の掘形中央に、直径約0.2mの柱根(第37図73、図版第29)が遺存していた。東西方向の柱間は約1.9m、南北方向は約2.1mである。柱部の埋土は暗茶褐色土、掘形内は暗黄灰色砂質土である。柱穴内や掘形から土器片が少量出土したが、時期を明確にするものでなかった。奈良時代中頃に埋められたとするS E03を切っていたことから、奈良時代後半から平安時代の建物跡と考える。

S B02(第32図、図版第28) トレンチ東部で検出した掘立柱建物跡である。東西4間以上、南北3間以上からなり、主軸方位はN2°Eである。トレンチ南側と東側にさらに延びるため、全容については不明である。掘形は方形で、その規模は、一辺0.6~1.0m、深さ0.2~0.4mを測る。直径0.2~0.4mの柱が使用されていた。東西方向の柱間は約1.8mで、南北方向は約2.1mである。柱部の埋土は暗灰色土、掘形内は暗黄褐色土である。柱穴内や掘形から土器片が少量出土したが、時期を明確にするものでなかった。S B01と平行関係にあることから、同時期の建物跡と考える。また、東側隣接地において京田辺市教育委員会が発掘調査(4トレンチ)を行っており、S E98429を検出している。この井戸の掘形は、南北方向に長い楕円形を呈しており、S B01・02の主軸方位とはほぼ同じである。この井戸は奈良時代後半とされていることから、S B01・02の時期も同じ時期である可能性が高い。

(岡崎研一)

S E03(第33図、図版第29) トレンチ中央部でS B01に切られた形で検出した井戸である。掘形は不明瞭であるが、三段に掘り込まれていた。上段は、東西約1.5m、南北約2.0mを測り、中



第32図 S B01・02実測図

段の掘形は、東西約1.0m、南北約1.0mで中央がさらに下がる。下段の掘形は、曲物より若干大きい。曲物は、あまり残りが良くないが、東西約0.3m、南北約0.4m、残存高約0.3mを測る。3点が重なるように出土した。これは、曲物2点を重ねて井戸の下段に据えていたが、廃絶時に上部の曲物が下部の外側に落ち込んだためと考える。これらを囲む形で曲物がもう1点認められた。土留めとしていたのか、その性格については不明である。トレンチのほぼ中央を南北に走る砂層が認められた。S E03は、この砂層を掘り込む形で存在する。この砂層が、水脈と考えられる。周辺の京田

辺市教育委員会の調査時には、1.5m近くの掘形を持つ井戸であったに対し、S E03は比較的浅くても曲物内に水が溜まったと思われる。遺物は、曲物(第37図72)内部ほぼ中央から須恵器蓋(第35図1)が、最下層から須恵器短頸壺(第35図8)・杯(第35図2)の破片が出土している。最上層から土師器皿(第35図12・13)も出土した。曲物内の須恵器蓋と、井戸上層埋土から出土した蓋の破片が接合したことから、奈良時代中頃に人為的に埋められたと考える。

(植崎藍子)

柱穴群(第31図、図版第25・27) 柱穴群は、直径20～40cmで、わずかにトレンチ南西部で希薄になるが、概ねトレンチ全面から検出することができた。これら柱穴の続きは、トレンチ北側に広がると思われ、今回の調査面積内では、建物や柵列にはならなかった。

耕作溝(第31図、図版第25・27) トレンチ南側で検出した。幅約0.3m、深さ約0.2mで、南北溝の後に東西溝が設けられていた。出土遺物は、ほとんどなく時期については不明である。これらの溝は、包含層上層あるいは上面から掘り込まれており、今回検出した掘立柱建物跡や井戸より後世のものである。

③第3トレンチ(第34図、図版第25・30)

近畿日本鉄道三山木駅北側に設定した調査地である。調査地北側を京田辺市教育委員会が発掘調査を行っており、柱穴群・溝・井戸などを検出している。その続きが今回の調査

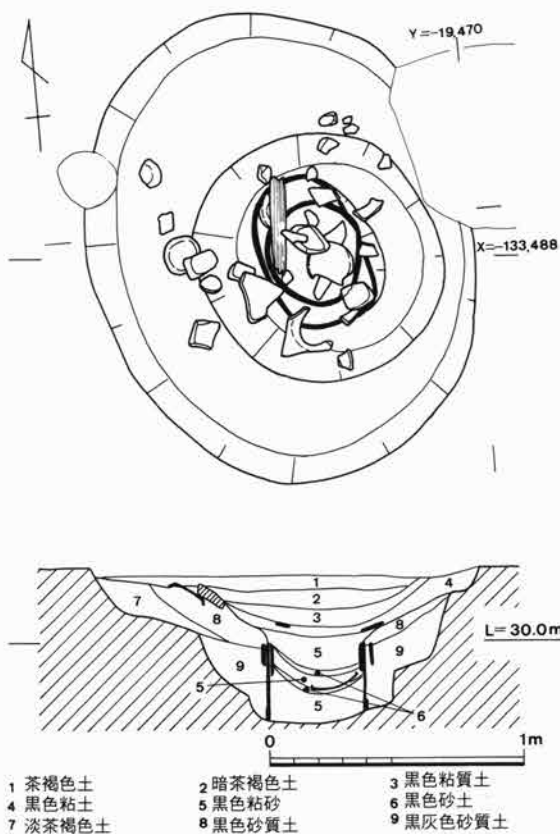
地に及ぶと推定された。掘削したところ、後世の厚い堆積が認められた。灰色砂土と淡灰色土を掘り込む溝が多数確認できた。その規模は、幅、深さとも0.6m前後であった。これは、ゴボウなどの栽培による溝ではないかと思われた。その下に包含層である暗茶褐色土が薄く堆積しており、奈良～鎌倉時代にかけての土器片が出土した。遺構は、この包含層下面から掘り込まれていた。耕作溝4条と畦状遺構2条である。標高約29mのレベルで検出しており、北側の京田辺市教育委員会が調査を行った第5トレンチの遺構面との比高差はおよそ1mで、第3トレンチが低くなっていた。このトレンチ付近は、全体に灰色土が覆っており、検出遺構から畑地あるいは水田であったと思われる。

耕作溝 調査地南側からN5°Eの傾きの耕作溝2条と、直行する溝2条の4条を、包含層である暗茶褐色土下面を掘り込む形で検出した。幅約0.3m、深さ約0.2mを測る。周辺から瓦器碗の破片が出土することから、概ね中世の溝と思われる。

畦状遺構 調査地北部で検出した、畦状にわずかな高まりを持つ。N65°Wの方向の畦状遺構は、包含層下の淡灰色砂土を取り除いた時点で検出した。耕作溝より古いものであるが、淡灰色砂土からも瓦器片などが出土したことから、中世の遺構と考える。

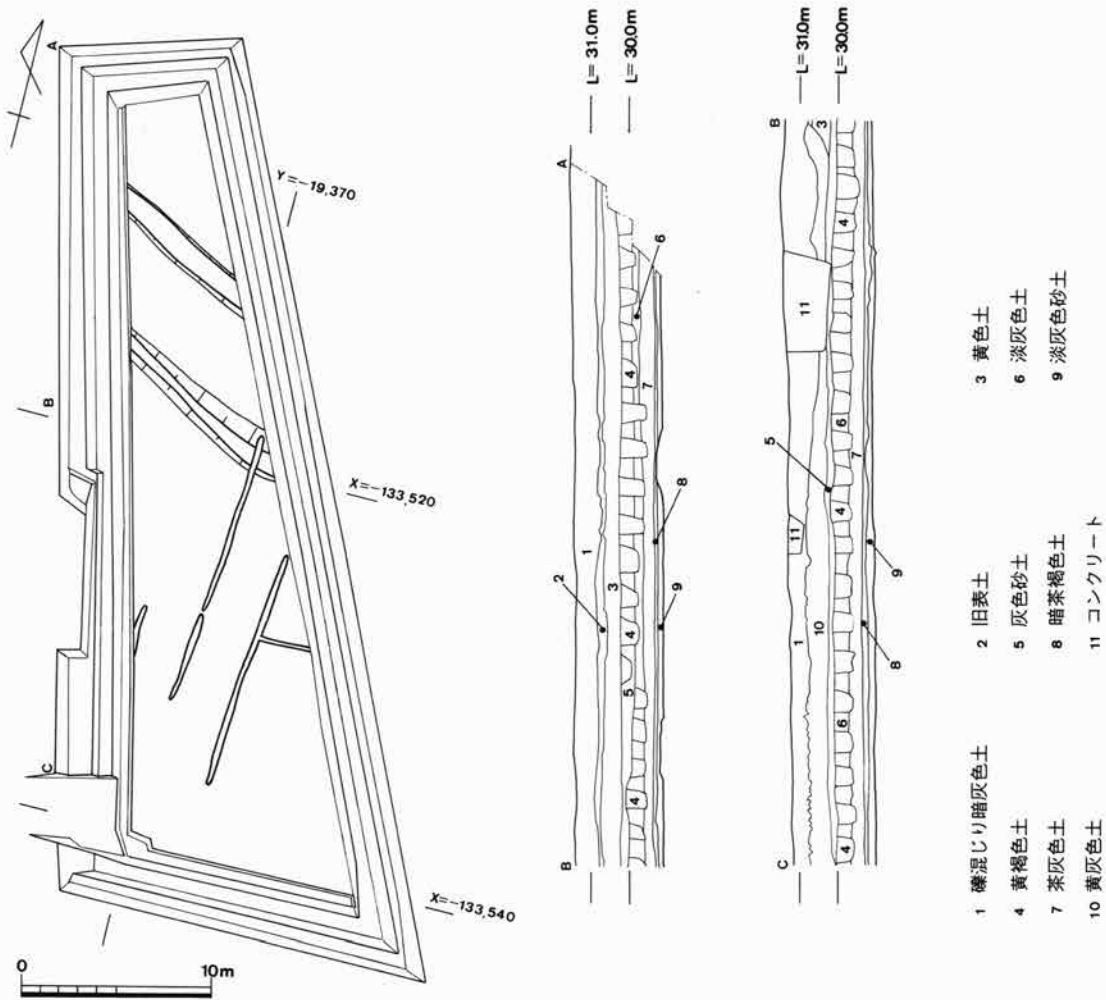
2. 出土遺物(第35～37図、図版第31・34)

主に第2・3トレンチ出土遺物を掲載した。第35図1・2・8・10～13はS E 03出土遺物で、



第33図 S E 03実測図

- | | | |
|---------|---------|----------|
| 1 茶褐色土 | 2 暗茶褐色土 | 3 黒色粘質土 |
| 4 黒色粘土 | 5 黒色粘砂 | 6 黒色砂土 |
| 7 淡茶褐色土 | 8 黒色砂質土 | 9 黒灰色砂質土 |

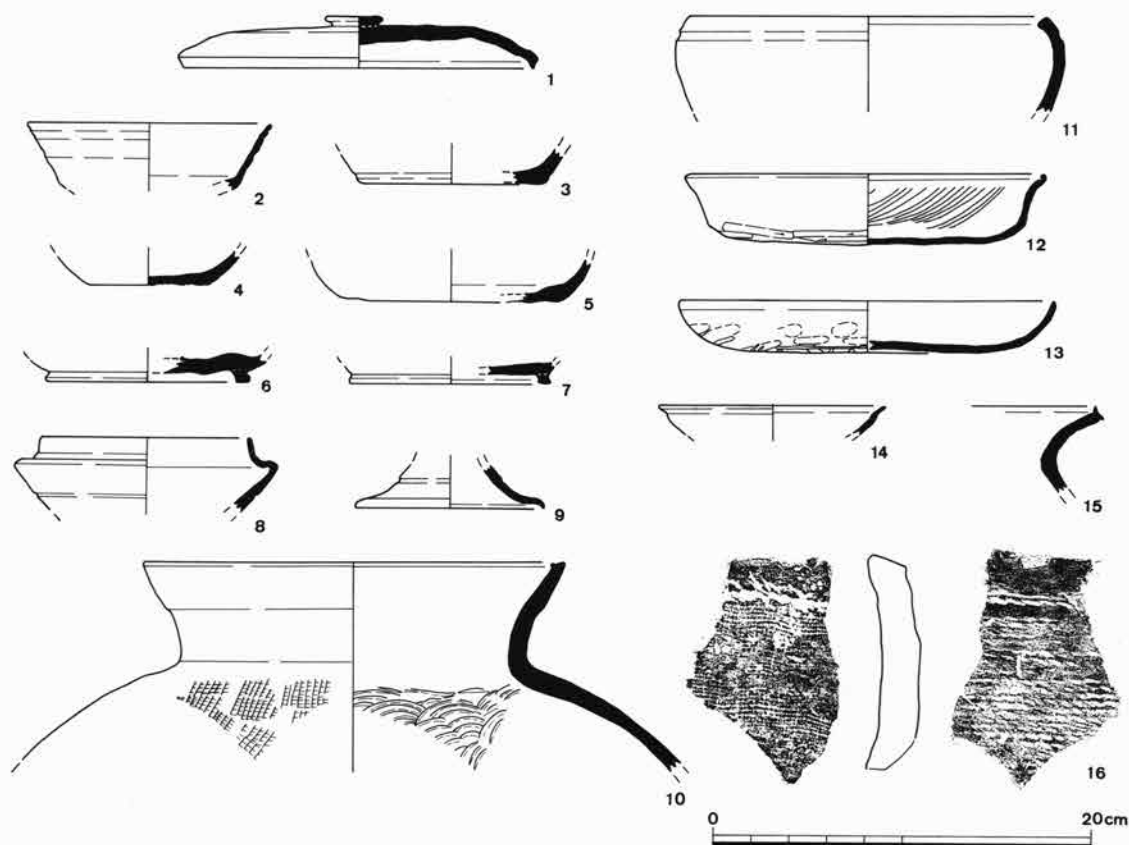


第34図 二又遺跡第3トレンチ実測図

3～7・9・14～16は柱穴出土である。第36図は、第2トレンチ暗茶褐色土出土の遺物である。第37図54～65は、第3トレンチ暗茶褐色土出土の遺物である。66～71は、第2トレンチ包含層の暗茶褐色土出土の遺物である。72はS E 03使用の曲物で、73はS B 01西端の柱穴内に遺存していた柱根である。

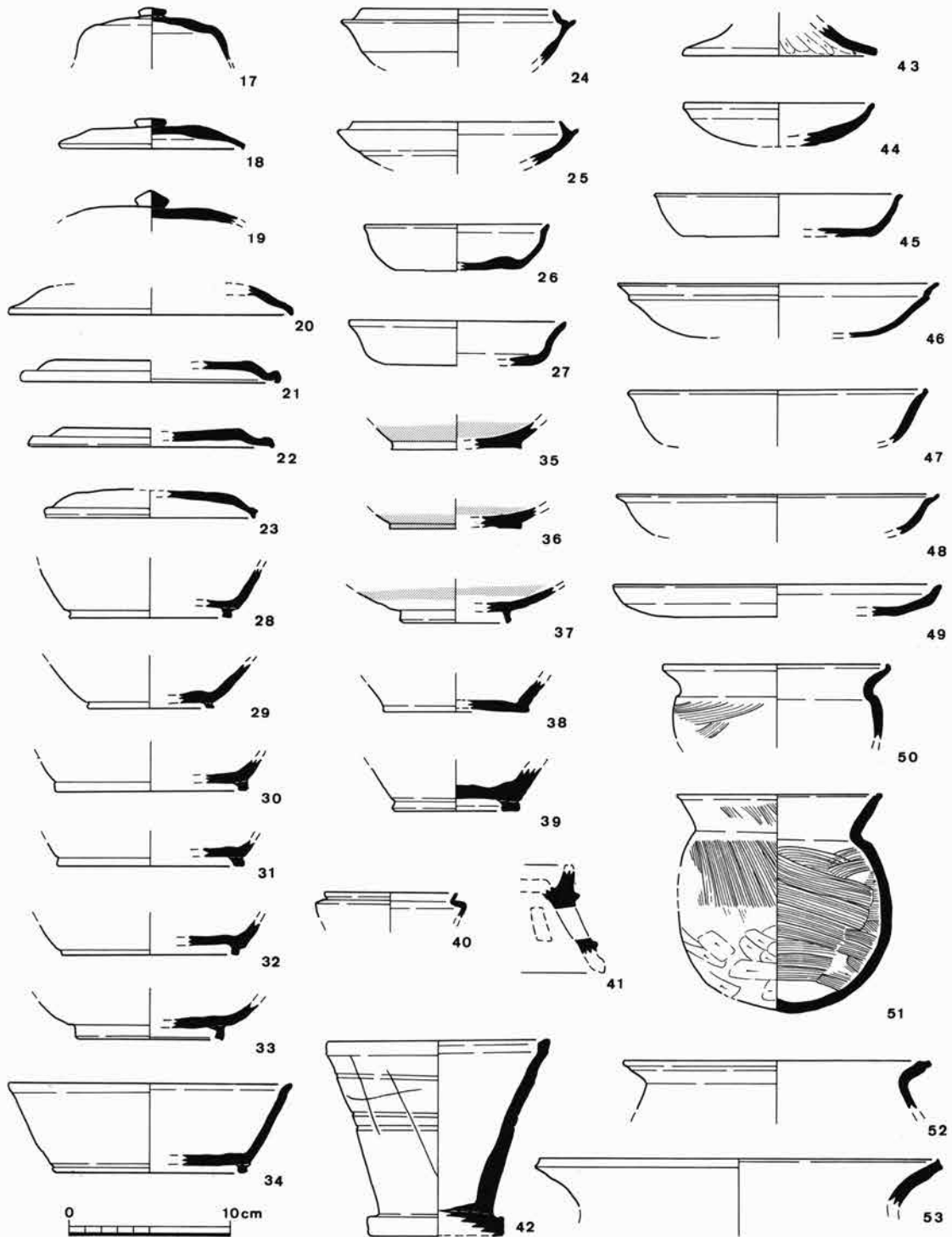
①土器・瓦類(第35～37図)

蓋(1)は、天井部からゆるやかに屈曲して口縁部に至る。端部は、下方に尖る。扁平なつまみが付く。須恵器杯(2～7)には、平底のもの(2～5)と、高台をもつもの(6・7)とがある。ロクロナデ整形する。短頸壺(8)の口縁部は、短く上方に立ち上がる。高杯(9)の脚端部は、「S」字状にゆるやかに屈曲する。甕(10)は、口縁部がわずかに外方に膨らむ。内外面に叩き痕がある。鉢(11)は、口縁端部が平坦面をなす、いわゆる鉄鉢形の鉢である。土師器杯(12・13)には、底部外面にヘラ削り(12)あるいは磨きとナデ(13)が施され、体部内面には一段放射暗文が施されるもの(12)もある。平城宮Ⅲ～Ⅳ並行期に相当すると考える。鉢(14)は、「S」字状に屈曲する口縁をもつ。器壁は薄く浅いものである。甕(15)は、口縁端部が内上方に尖る。平瓦(16)は、凸面に縄叩き痕が認められ、縄目は細かい。須恵器蓋(17～23)は、型的的にみて8世紀末～9世紀中頃に



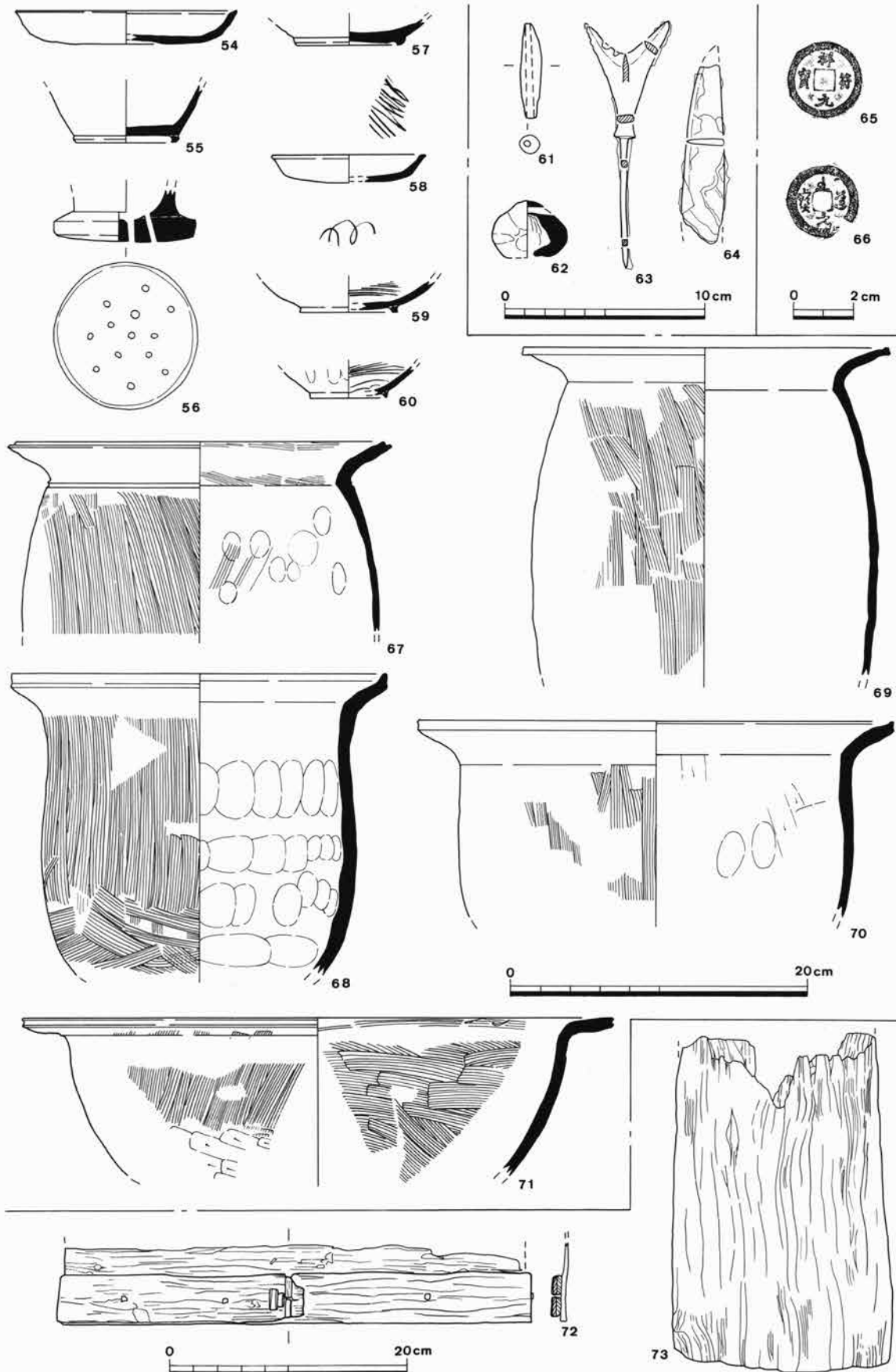
第35図 出土遺物実測図(1)

該当するものが大半を占める。比較的口縁部径の大きい蓋(20)や、平坦な天井部と「S」字状に屈曲する口縁部からなる蓋(18・21・22)や、丸味のある天井部からゆるやかに屈曲して口縁部に至る蓋(23)がある。天井部にはつまみが付く。蓋(23)には、つまみは付かない。いずれもロクロナデ整形する。須恵器杯(28~34)は、いずれも輪状の高台を底部外縁に貼り付ける。屈曲部のやや内側に高台を貼り付ける杯(33)もある。ロクロナデ整形する。8世紀末~9世紀前半のものとする。杯身(24・25)は、立ち上がりが短く内上方に立ち上がる。出土量は少ない。TK209並行期のものである。杯(26)は、外面調整が粗く仕上げたため杯とした。TK217並行期のものである。杯(27)は、平底の杯である。口縁部が大きく外反する。緑釉陶器碗(35~37)は、釉薬を内外面(網点部)にかけている。いずれも削り出し高台である。ミズビキ整形する。鉢(38)は、平坦な底部と外上方に立ち上がる体部とをもつものである。壺(39)は、平坦な底部と外上方に立ち上がる体部をもつ断片である。輪状の高台を貼り付ける。短頸壺(40)は、ミニチュア品である。口縁部が外方に短く立ち上がる。円面硯(41)は、海部と脚部のみの破片であるため大きさなどについては不明である。ねり鉢(42)は、円形の平坦な底部に、外上方に真っ直ぐ立ち上がる体部を貼り付ける。口縁端部は平坦である。体部外面にヘラ記号が施される。土師器高杯(43)は、外下方に大きく開く脚部をもつ。内面にヘラ削りが施されている。土師器杯(44~48)は、口径・口縁部の形状とも各種ある。土師器杯(47・48)は、器壁が磨滅しており調整が不明である。土師器皿(49)の口縁部は、短く上方に立ち上がる。器壁が磨滅しており調整が不明である。土師器甕



第36図 出土遺物実測図(2)

(50・51)は、球形の体部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。体部外面にはハケ調整を、内面にはハケ調整とヘラ削りが施される。遺構面直上から出土した。土師器甕(52・53)は、口縁部のみの破片である。器壁が磨滅しており調整は不明である。土師器皿(54)は、全体に丸味を帯びたものである。調整は、器壁が磨滅しており不明である。須恵器杯(55)は、底部縁に高台を貼り付ける。ロクロナデ整形である。須恵器ねり鉢(56)は、円形の底部と上方に立ち上がる体部とからなる。底部外面中央付近の孔は貫通する。須恵器椀(57)の底部は、削り出し高台である。ミズビキ



第37図 出土遺物実測図(3)

整形する。黒色土器皿(58)の内面底部にはジグザグの暗文が施されている。瓦器椀(59・60)は、底部から丸味を帯びて立ち上がる。底部内面に螺旋状の暗文が施される。このほかに密に暗文を施す瓦器も見られた。出土した瓦器椀の大半は、大和型であった。細片であるため図化していない。土師器甕(67~70)は、大きく開く口縁部と長胴傾向の体部からなる。外面は、縦方向のハケ調整し、内面は主にナデ調整である。これらも遺構面直上から出土した。土師器盤(71)は、丸味を帯びた体部と横方向に大きく屈曲する口縁部からなる。内外面はハケ調整を、外面下半はヘラ削りを施す。

②木器類(第37図)

曲物(72)は、S E 03出土で、もとは高さ約30cmあったが、取り上げの際に崩れ、下部の部分のみとなった。樹種は、ヒノキである。柱根(73)は、S B 01の西端の柱穴から出土した。加工された痕跡は認められない。

③その他(第37図)

土錘(61)は、長さ4.7cm、最大幅1.1cmで、径0.3cmの孔を施す。土鈴(62)は、頭部の孔(径0.3cm)に紐を通していたと推定される。底は一部欠損していたため、中にあった土玉は無くなっていた。底には、推定幅0.6cm、推定長1.7cmの細長い孔が設けられていたようである。鉄鏃(63)は、雁股式の鏃で、長さ12cm、最大幅4.3cmを測る。鳥羽遺跡出土のものに類似する^(註8)。刀子(64)は、残存長8.7cm、最大幅2.2cmである。63・64は出土付近から瓦器椀の破片が出土することから、鎌倉時代のものであろうか。銭貨は、「祥符元寶」(65)と「□□元寶」(66)である。

(2)三山木遺跡第5次

遺跡中央南側に2か所のトレンチを設定した。南側を第1トレンチ、北側を第2トレンチとした。調査面積は、第1トレンチが約130m²、第2トレンチが約220m²である。

1. 検出遺構

①第1トレンチ

J R学研都市線の旧線路部に設定した。遺跡中央南端に当たる。掘削したところ、山崎からの丘陵尾根筋にあたり、北東方向に延びる丘陵がこの付近にまで及び、後世の削平が大規模に行われていたことが判った。トレンチ北側で地山の落ちが認められ、第2トレンチへ続く。遺構の検出には至らなかった。

②第2トレンチ

第1トレンチ北側に設定した。第1トレンチから第2トレンチ南側にかけて傾斜しており、中央部から緩傾斜となる。第1トレンチの削平を受けた地山面から第2トレンチの遺構面までは、約1.2mの比高差があり、丘陵が第1トレンチ付近まで延びていた時は、2m以上であったと想

定できた。検出した遺構は、溝3条・柱穴・土坑(攪乱)である。

S D12(第38図、図版第32・33) トレンチ中央部で検出した、東西方向の溝である。西はかなり浅く、埋土は砂土である。平成13年度に調査したS D116に続く溝であることが判った。9世紀前半の須恵器片の出土から、この時期の溝とした。幅約4mで今回のトレンチでの検出長約5.4m、深さ約0.2mを測る。溝の中央にわずかな高まりが認められた。

S D09(第38図、図版第32・33) トレンチ南端で検出した、東西方向の溝である。幅約4m、検出長約6m、深さ約0.8mである。平成13年度調査地検出のS D113には、弥生土器片を多量に包含すると報告されている。S D09も同様な状況であったが、下層に黒色土器や瓦器片を少量包含する。弥生土器を多量に含むという共通点から、S D09とS D113は連続する同一の遺構であり、時期は鎌倉時代と考えられる。

S K04・10・11(第38図) トレンチ南側で検出した土坑である。平面は不定形で、S K11→S K10→S K04の順に掘っていた。S K11の埋土は灰色粘土で、S K10は砂土、S K04は暗茶褐色土である。埋土中に染め付けの磁器片があり、近世以降のものと思われる。

S D08(第38図) S D09に切られた形で検出した溝である。瓦器椀(第40図24)の出土から、鎌倉時代とした。埋土は、淡茶灰色土である。

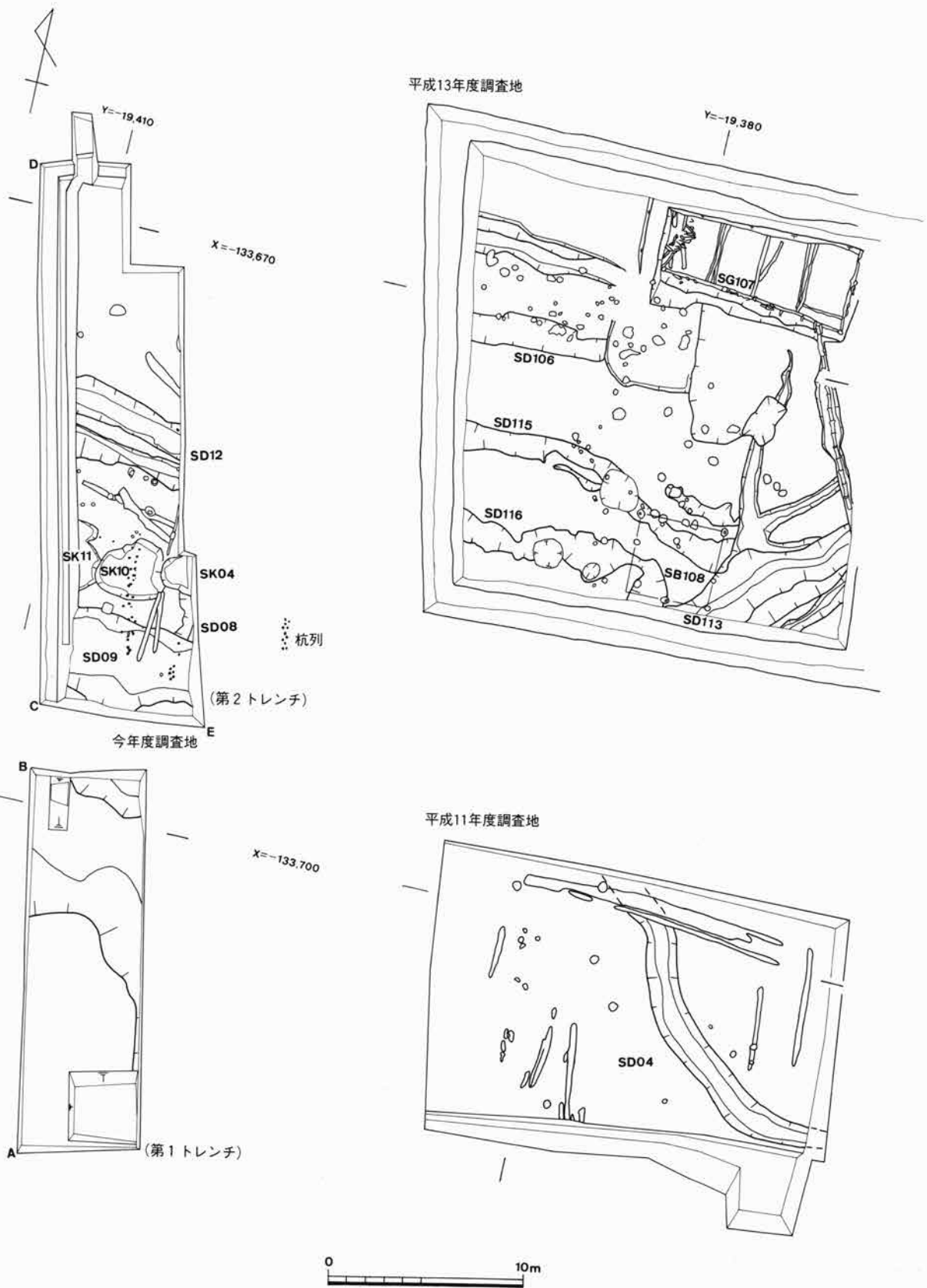
杭列(第38・39図) トレンチ南側の西側と東側で、灰色土が0.5mの段差が認められた。その段差に沿う形で杭列を検出した。トレンチ南東隅でも、平行する杭列があった。明治期に片町線が開通する以前の畦畔に伴うものと思われる。

2. 出土遺物(第40～42図、図版第34)

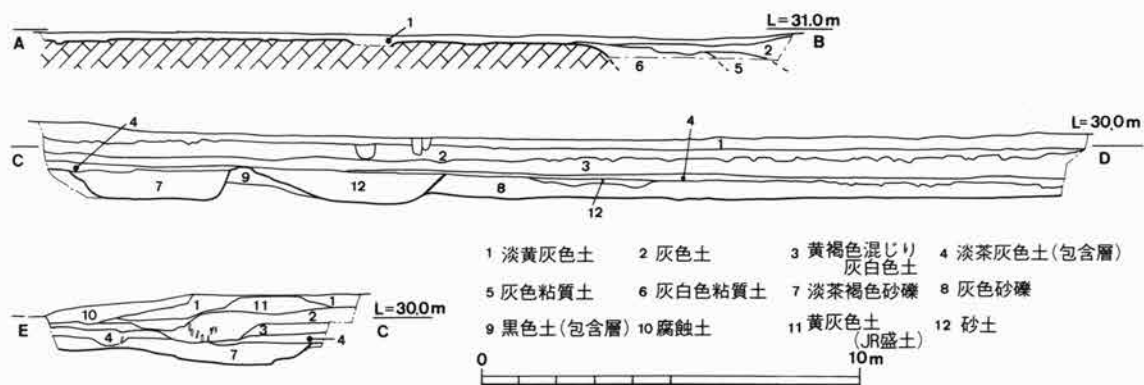
第40図は遺構出土の土器類を、第41図は包含層である黒色土と淡茶灰色土出土の土器類を、第42図は石器類を載せた。第40図1～14はS D09最下層から、15はS D09下層から、16～18・22・23・25・26はS D09上層から出土した。19・20はS D12から、21は柱穴から、24はS D18から出土した。第41図27～44は黒色土から、45～51は淡茶灰色土から出土した。第42図52・56は包含層である淡茶灰色土から、53・57・58はS D09最下層から、54はS D12から、55・59は灰色砂礫下層から、60はトレンチ西側を断ち割った際に出土した。

①土器類(第40・41図)

2～4・11は広口壺、1は細頸壺である。12は、壺の底部である。2～4は、頸部に櫛描文が施された弥生時代中期前半のものである。1は、頸部にハケ調整が施され、口縁端部には刻みがめぐる。11の体部には、刻目のある貼付突帯を4条めぐらす。12は、底部外面をナデる。8は、全面に弱い櫛描文が施されている。9は、縄痕文を施した土器である。10は、体部外面に縦と横方向の櫛描文が施される。14は、外面が叩き、内面はハケ調整している。弥生時代後期のものである。甕(5～7・13)は、口縁端部が大きく屈曲し、端部に刻みが施される。7の体部には、2条のヘラ描沈線文を施す。弥生時代前期のものである。6は、5条の沈線がめぐる。5は、内外面ハケ調整で、内面はナデ調整する。弥生時代中期前半の甕である。13は、外面ハケ調整している。



第38図 三山木遺跡遺構配置図



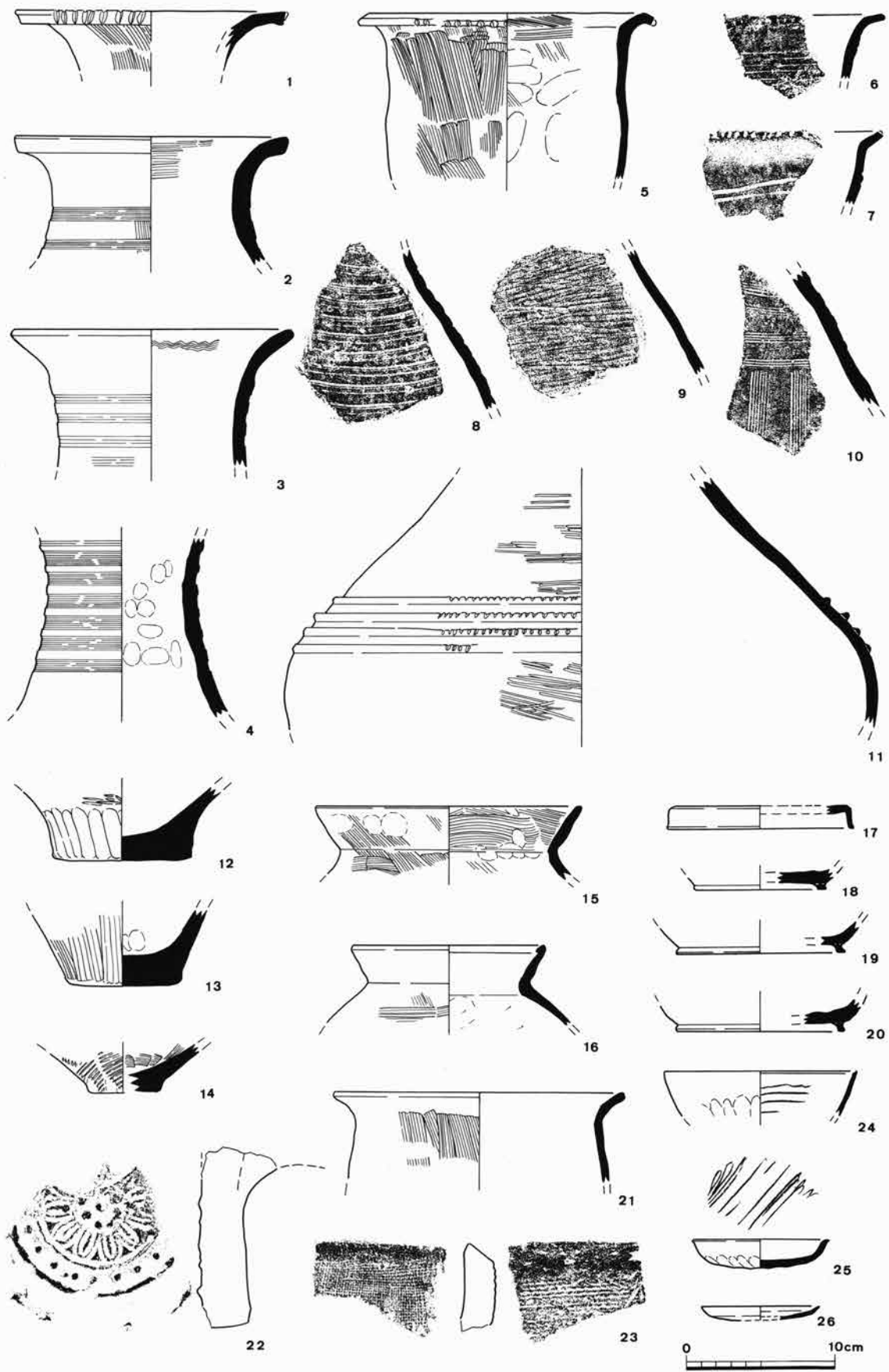
第39図 第1・2トレンチ土層図

甕(15・16・21)は、球形の体部と外上方に立ち上がる口縁部とからなる。16は、布留式土器である。この時期の土器の出土量は少ないが、京田辺市での確認例も少ない。蓋(17)は、短頸壺の蓋である。杯(18~20)底部縁に輪状の高台を貼り付ける。ロクロナデ整形である。瓦には、軒丸瓦(22)と平瓦(23)がある。22は一部欠損していたため、復原した結果、蓮子1+8、単弁11弁、子葉があり、間弁は三角形を呈し、外区に珠文がめぐり、直径15cmほどで、胎土に砂粒を含む。平城6134C型式で、近辺の遺跡では長岡京跡左京第121次調査に類例を見る。瓦器椀(24)の内面には、粗い暗文が見られる。黒色土器皿(25)の内面底部にはジグザグに暗文が施され、外面はナデ調整する。土師器皿(26)は、丸味のある底部と外上方に短く立ち上がる体部とをもつ。27は、細頸壺で、外面頸部に櫛描文が、口縁端部に×状に刻みが施される。内面はハケ調整後ナデしている。28~33は、広口壺である。28は、口縁端部に波状文と刻目を施す。30の頸部と体部上半に多条のヘラ描沈線文をハケ調整後に施す。内面はハケ調整する。31は、刻目のある貼付突帯を3条めぐらす。32は、斜格子状にヘラ描沈線文を施し、その上下に3条と4条以上のヘラ描沈線文と圧痕のある貼付突帯を2条めぐらす。体部下半にハケメ痕も見られた。33の外面は、ていねいにヘラ磨きを施す。甕(34~44)の大半は口縁端部に刻目を施し、3~7状のヘラ描沈線文をめぐらす。弥生時代前期後半のものである。39の口縁部外面には、ヘラ状工具による圧痕が見られる。底部の外面はハケ調整する。45は、円筒埴輪片である。土師質でタガは低い。調整については、磨滅しており不明である。杯(46・47)は、底部縁に高台を貼り付ける。47は小型品である。48は、口縁部が「S」字状に屈曲する蓋である。ロクロナデ調整する。49は、瓦質の羽釜である。50は、大和型の瓦器椀である。調整については、磨滅しており不明である。51は、浅い土師器皿である。

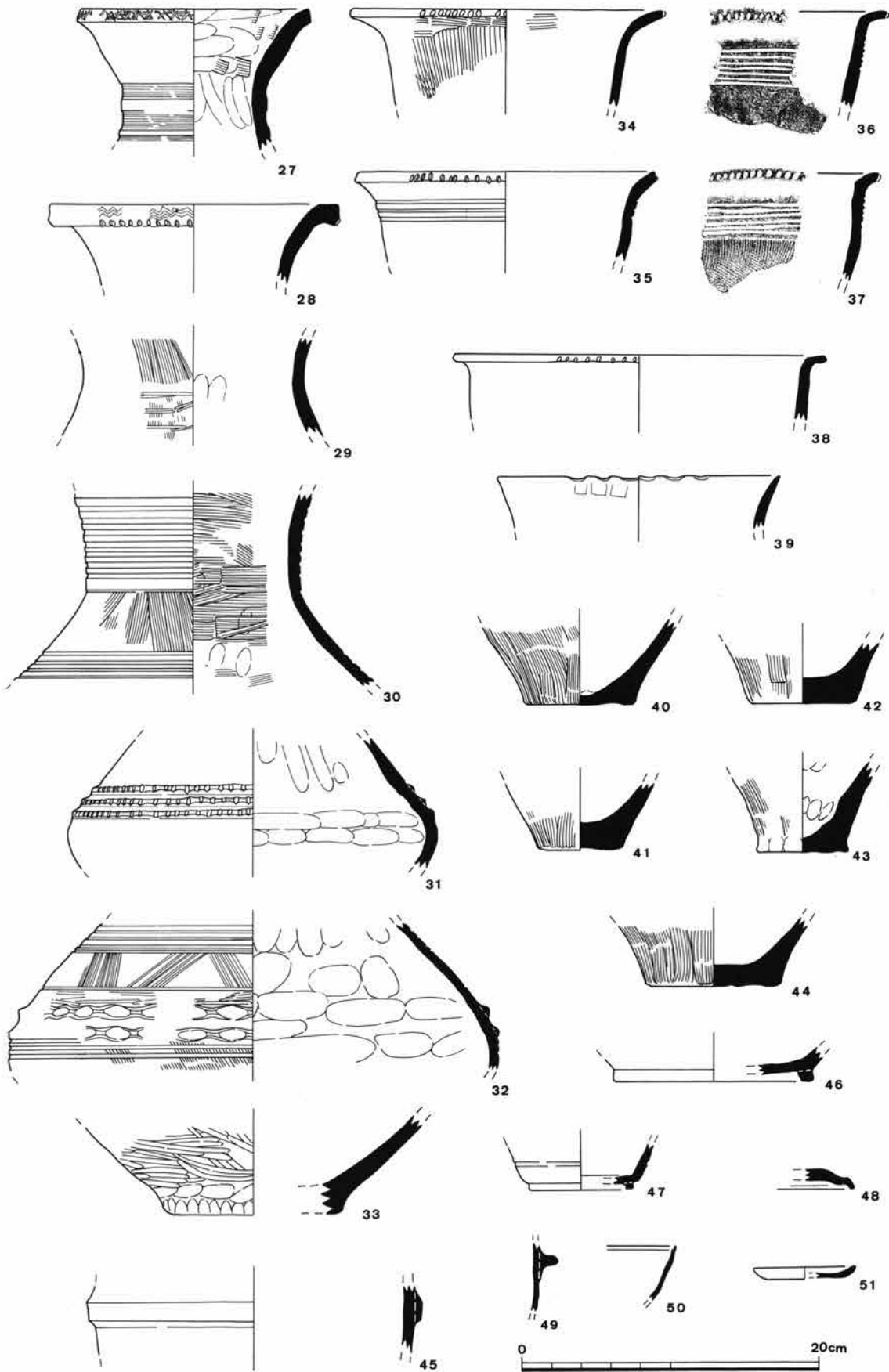
(岡崎研一)

②石器類(第42図) 今回の調査で石庖丁や敲き石、凹石、スクレイパー、剝片など弥生時代の石製品のほか、旧石器時代に属する剝片(60)も出土した。

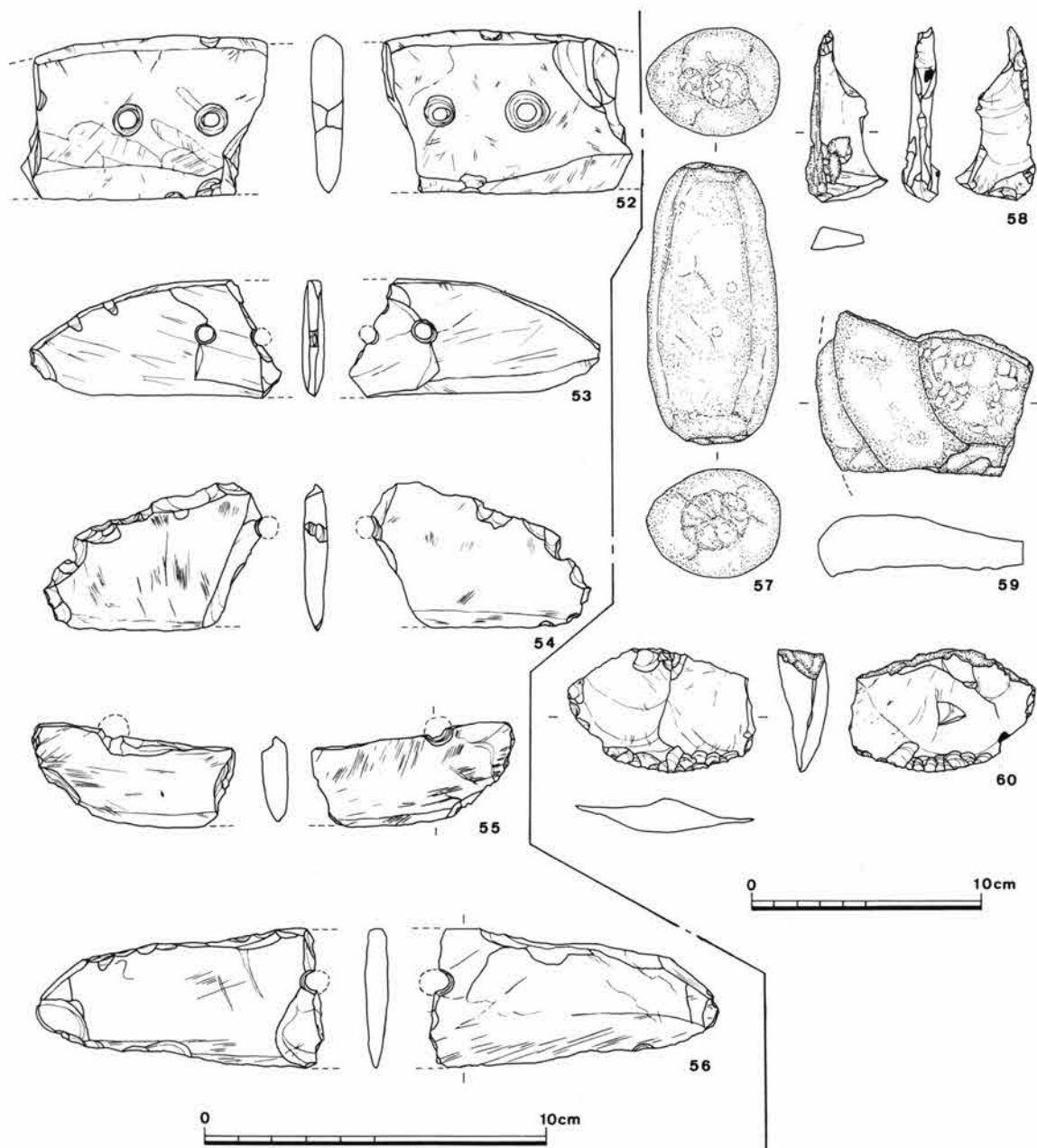
52は、凝灰岩製の石庖丁である。53は、サヌカイト製の石庖丁である。54は、凝灰岩製の石庖丁である。55は、サヌカイト製の石庖丁である。56は、サヌカイト製の石庖丁である。いずれも半月形直線刃形を呈する。57は、砂岩製の敲き石である。両端部に敲き痕が見られる。最大長12.2cm、最大幅5.7cm、最大厚4.6cmを測る。58は、サヌカイト製のスクレイパーである。横長剝



第40図 出土遺物実測図(1)



第41図 出土遺物実測図(2)



第42図 出土遺物実測図(3)

片の端部に調整を行い、刃部を作り出している。最大長5.5cm、最大幅8.2cm、最大厚2.2cmを測る。59は、砂岩製の凹石である。60は、旧石器時代の縦長剝片である。最大長7.6cm、最大幅3.5cm、最大厚1.6cmを測る。

(船築紀子)

3. まとめ

二又遺跡については、今回と京田辺市教育委員会の調査成果を第43図に載せた。京田辺市教育委員会の調査地については、市1～5トレンチとした。その結果、以下のことが考えられる。

①柱穴群は、市1・5トレンチに多く見られ、市2・4トレンチならびに第2トレンチでは、



第43図 二又遺跡遺構図

調査地北半に集中する傾向が見受けられた。その周辺にあたる市3トレンチと第3トレンチでは、柱穴は極端に減少する。市5トレンチ北東隅には落ち込みが見られ、市1トレンチ北側での柱穴は減少する。この両調査地北側には、現在水路が東流する。古代においても、水路がこの付近を通り、その落ち込みが市5トレンチ北端で見られたと考える。このような柱穴群の集中は、居住域と田畑などの生産域が明確に分かれていたためと考える。

②飛鳥から平安時代にかけての井戸が、柱穴群の広がりの中に散在する。井戸の構造もさまざまであり、水脈に沿って築かれたと思われる。今回検出したSE03は、非常に浅く、異なった水脈を利用して築かれたと考える。これは、長期間にわたって建物を建て替え、住居の中心を変えながら、連綿と続いたためと考える。

③第3トレンチ遺構面の標高は、約29mに対し、市5トレンチでは約30mであった。古代では居住域付近である市5トレンチ側が約1mほどの微高地であった。

④SB01・02は、検出した遺構の中で大きな掘形を持つ建物と言える。

これらのことから、山本駅あるいは山本荘との関連については、直接繋がる遺物が出土せず、不明である。しかし、第2トレンチ周辺の限られた範囲に建物跡が広がることが判り、今後の調査に期待される。

三山木遺跡については、既調査地で検出した遺構と、出土した遺物に補足する成果が得られた。SD09・12の検出は、「山崎」から延びる丘陵先端部の削平が多時期にわたって行われたことを示す。出土遺物の大半は、包含層出土の弥生土器であり、削平を受けた丘陵部には弥生時代前期

から後期までの遺構が存在したと想定できる。中でも前期後半から中期前半の土器量が大半を占め、南山城地域での当時期の良好な資料を得ることができた。

(岡崎研一)

- 注1 鷹野一太郎ほか「二又遺跡・三山木遺跡発掘調査概報」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第28集 京田辺市教育委員会) 1999
- 注2 岡崎研一・田代弘「三山木遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第92冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
岡崎研一「三山木遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第98冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
引原茂治・岡崎研一「三山木遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第103冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 注3 調査参加者 内田雅之・馬崎あおい・川端美恵・北森さやか・小西麻佐子・坂本由香・柴田文恵・徳田智恵子・中川佳子・榑崎藍子・早川千里・兵頭真千・藤井矢壽子・藤原美奈子・松本彰太
- 注4 鷹野一太郎ほか「宮ノ下遺跡発掘調査概報」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第23集 田辺町教育委員会) 1997
- 注5 伊野近富「京都府田辺町興戸遺跡の方格地割について」(『条里制研究』第8号 条里制研究会) 1992
- 注6 同志社大学校地学術調査委員会「古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第1集 田辺町教育委員会) 1980
- 注7 河野一隆「椋ノ木遺跡第5次の調査成果」(『京都府埋蔵文化財情報』第83号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 注8 『京都・激動の中世』京都文化博物館 1996

8. ^{はたのまえ}畑ノ前遺跡第6次発掘調査概要

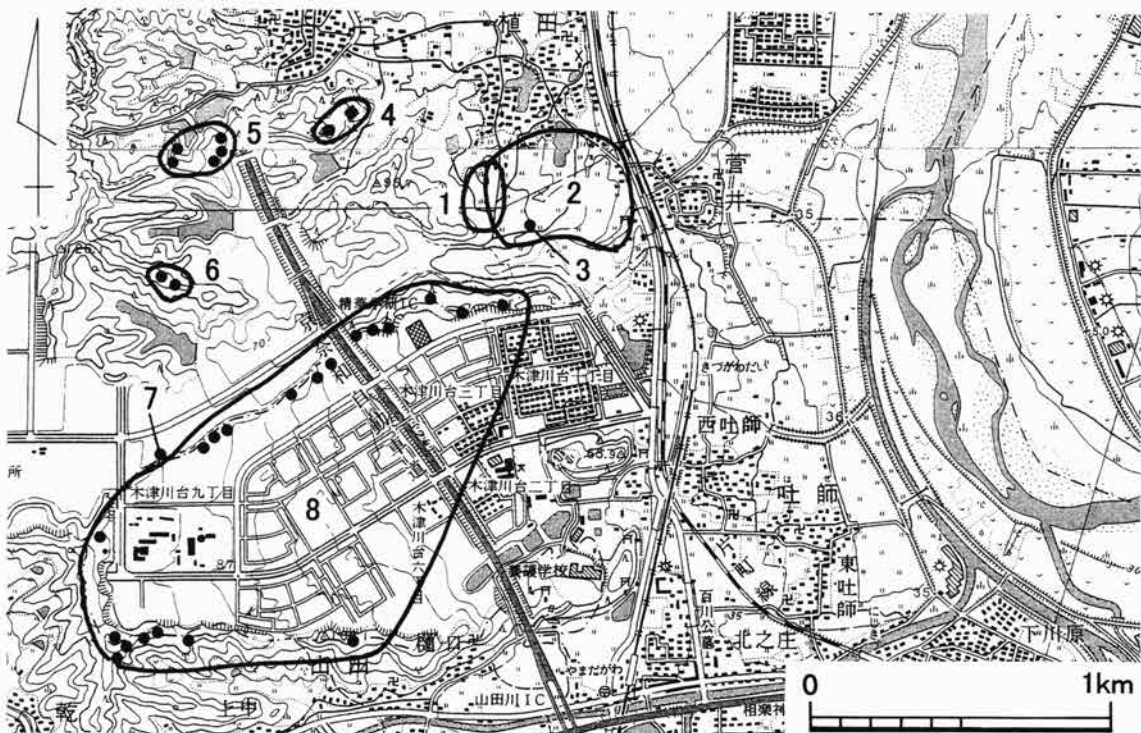
1. はじめに

今回の調査は、府道山手幹線の建設に伴う事前発掘である。調査地は畑ノ前遺跡の範囲に該当するとともに、調査区の東端部の一部は、畑ノ前東遺跡の範囲内にも該当する場所である。遺跡の南東約100mには直径25mの植田大塚古墳があり、周辺の丘陵稜部にも数多くの古墳が点在している(第44図)。

当遺跡の調査は、昭和59・60年に(財)古代学協会により精華ニュータウンの建設に伴う発掘が実施され、弥生時代中期の竪穴式住居跡や土坑のほか、墳丘が削平された6世紀後半の小円墳を主体とする7基の古墳(畑ノ前古墳群)および奈良時代の掘立柱建物跡群などの各時代の遺構が検出された。遺物としては、これらの遺構群と同時期の弥生土器・土師器・須恵器や軒瓦・平瓦・丸瓦などが出土した。^(注1)

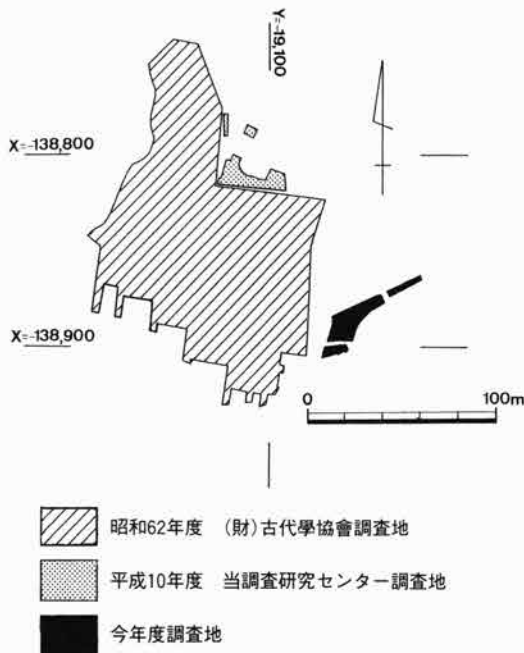
平成10年には、(財)古代学協会調査地の北側隣接地を当調査研究センターが調査した。その調査概要によると、調査地は谷および斜面にあたる場所であり、古代学協会の調査にみられたような顕著な遺構は検出されなかつた。^(注2)

今回の調査は第6次調査となる(第45図)。現状では東西方向の道路である、精華大通りと南北



第44図 調査地位置図(1) (国土地理院 1/25,000 奈良)

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 畑ノ前遺跡 | 2. 畑ノ前東遺跡 | 3. 植田大塚古墳 | 4. 蔭山古墳群 |
| 5. 砂留古墳群 | 6. 永谷古墳群 | 7. 植田大谷古墳 | 8. 吐師山古墳群 |



第45図 調査地位置図(2)

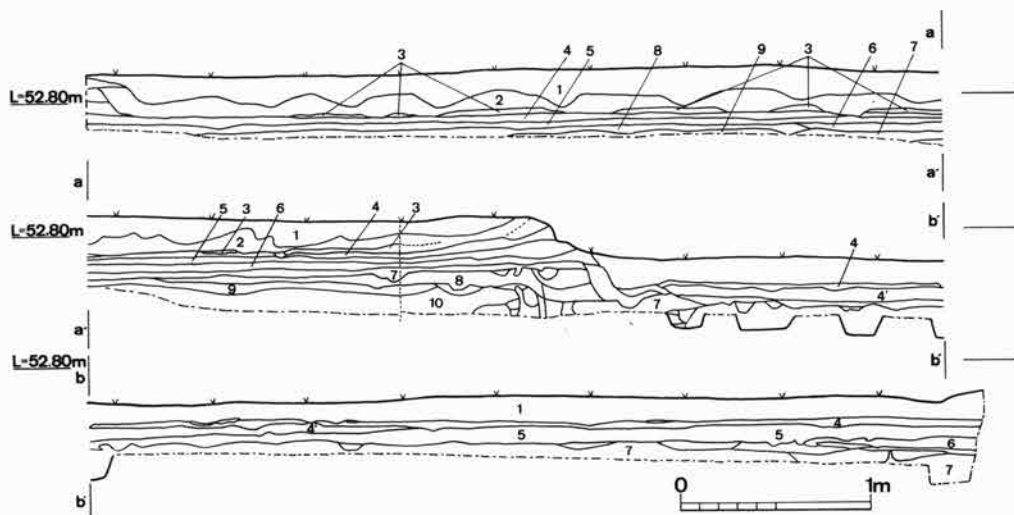
方向となる山手幹線との交差点部分にあたる。現地での発掘調査は、平成14年4月15日に開始し、同6月13日に全ての調査工程を完了した。調査面積は約380m²である。現地調査は調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎および調査第3係調査員柴暁彦が担当して行った。本概要報告の執筆は柴が行った。

調査期間中は、京都府教育委員会ならびに精華町教育委員会の指導・助言を得た。また、京都府木津土木事務所を始めとする関係各機関からは、多大な協力を得ることができた。現地調査および調査後の遺物整理や図面の調整にあたっては調査補助員・整理員の参加協力を^(注3)得た。記して感謝する。なお、調査にかかる費用は京都府土木建築部が負担した。

2. 調査概要

(1) 層序(第46図)

北調査区の断面図を取り上げる。基本的には各調査区とも隣接しており、同様の層序をなしている。第1層は表土層であり、第2層耕作土、第3層床土、第4～6層の水平堆積をなす無遺物層があり、第7層が中世および奈良時代の土器を含む遺物包含層であり、第8層を切り込む形で中世の遺構が存在する。奈良時代および古墳時代の遺構は第8層上面で検出している。第10層は



第46図 北調査区北壁断面図

- | | | | |
|----------------|------------------|-------------------|-----------|
| 1. 表土 | 2. 暗灰色粘質土(耕作土) | 3. 灰色粘質土(床土) | 4. 明褐色粘質土 |
| 5. 灰褐色粘質土 | 6. 暗灰色粘質土 | 7. 暗灰褐色粘質土(遺物包含層) | 8. 暗灰色粘質土 |
| 9. 黄灰色粘砂礫(検出面) | 10. 黄茶灰色粘砂礫土(地山) | | |

地山層である。

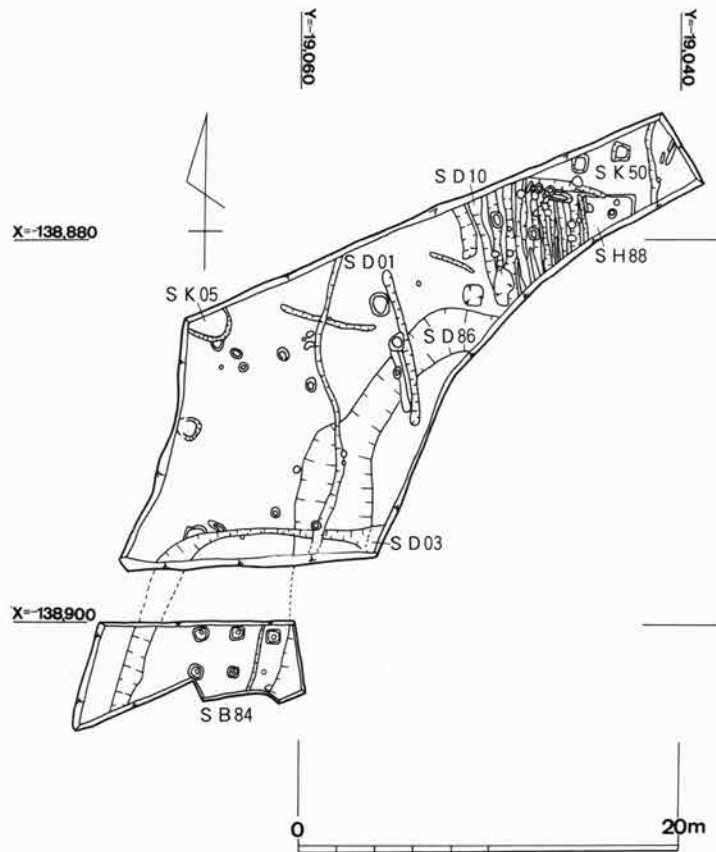
(2) 検出遺構(第47図)

調査地は、農道部分を生かすため、合計3か所に分断している。調査の便宜上、位置関係から北・南および東調査区として説明する。

検出した遺構は、古墳時代と奈良時代、そして中世の遺構の3時期の遺構が存在した。以下、主な遺構について述べる。

古墳時代の遺構

竪穴式住居跡 S H88(第48図) 一辺約5mを測る方形の住居跡である。壁際に周壁溝を持つ。検出面から床面までの深さは約0.15mを測る。支柱穴は2つを検出した。この住居跡は一部が調査区外に及ぶ。



第47図 北・南調査区遺構平面図

埋土中から土師器片が出土しているが、小片のため時期については明らかではない。住居の規模や土器の胎土から、古墳時代の遺構と判断した。

土坑 S K 05 北調査区北東隅で検出した幅約2m、長さ1.6m、深さは0.25mを測る楕円形の土坑である。調査地の北西隅で検出しており調査区外へ延びるため、全容は不明である。

この土坑から須恵器片や耳環が出土した(第52図)。古墳の埋葬主体部に副葬された遺物が後世の廃棄土坑に混入したものと考えられる。

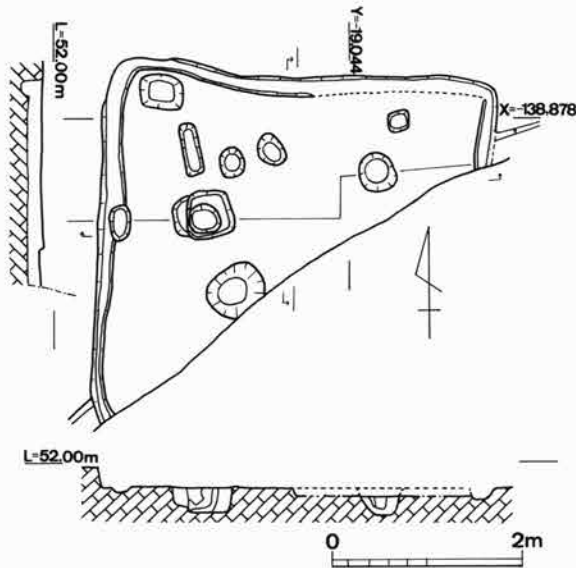
奈良時代の遺構

掘立柱建物跡 S B 84(第49図) 南調査区で検出した。溝 S D 03に区画された南側で検出された東西2間(4m)、南北1間(2.1m)以上の建物跡である。南北棟の建物と考えられるが、北および南側は調査地外のため全体の規模は不明である。

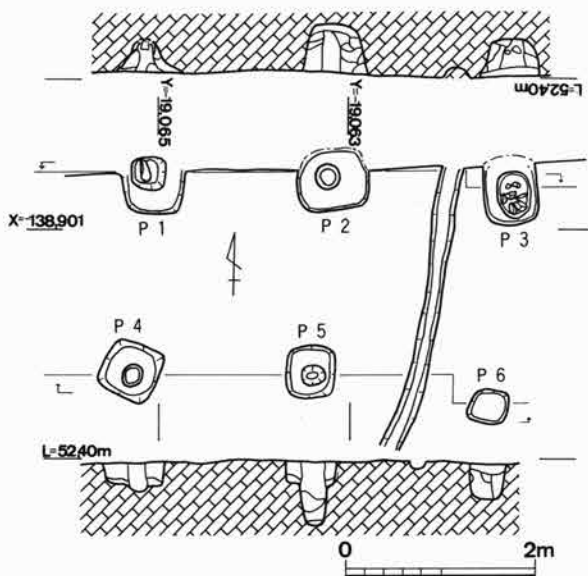
P 1とP 3からは柱の抜き取り痕から礎を検出した。P 1からは上面を水平に据えた小人頭大の礎1つが、P 3からは小人の拳大の礎7石を並べた形で検出しており、柱の根石と考えられる。また、P 2およびP 5の柱痕跡が深く掘り込まれていた。P 2の柱痕からは、瓦片が出土した。

溝 S D 03 北調査区の南西寄りで検出した。幅約0.6mを測る。この溝は、調査区の西壁際で南へ屈曲し南調査区へ延び調査区外に及んでいる。S B 84を区画する溝と考えている。

溝 S D 86 幅約4m、深さ約0.3mを測る。この溝の埋土中から8世紀前半を中心とする土師



第48図 SH88実測図



第49図 SB84実測図

器・須恵器などがまとまって出土した。古墳時代の遺物は出土していないが、過去の調査例などからみて、古墳の周溝の可能性も考えられる。

また、東調査区では建物跡としての認識はできないが、東西方向に並ぶ柱穴を確認した。この調査地の周囲に建物跡が存在していると考えられる。

中世の遺構

溝SD01 ゆるく蛇行する南北方向の溝であり、最大幅約0.6m、深さ0.15mを測る。この溝から古瀬戸の四耳壺片が出土した。

耕作溝群 北調査区中央付近から東調査区にかけて耕作に伴うものとみられる、連続する溝群を検出した。これらの溝群は、東西方向に並ぶものと南北方向を示すものがみられた。

3. 出土遺物

北調査区SK05出土遺物(第52図)

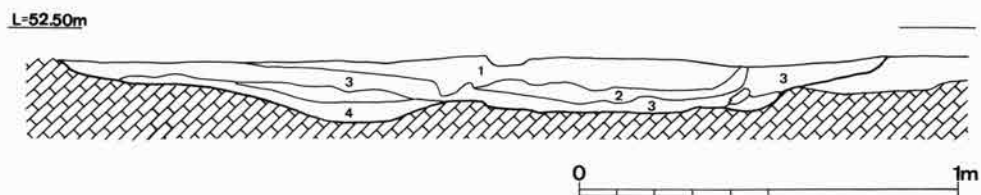
須恵器3点と耳環2点が出土した。

1は杯身である。口径10cm、器高2.5cmを測る。底部には土器の乾燥前に地面に押し付けたような圧痕がみられる。

2は甕口縁部である。口径31.2cm、残存高6.2cmを測る。頸部にはヘラ状工具で右上

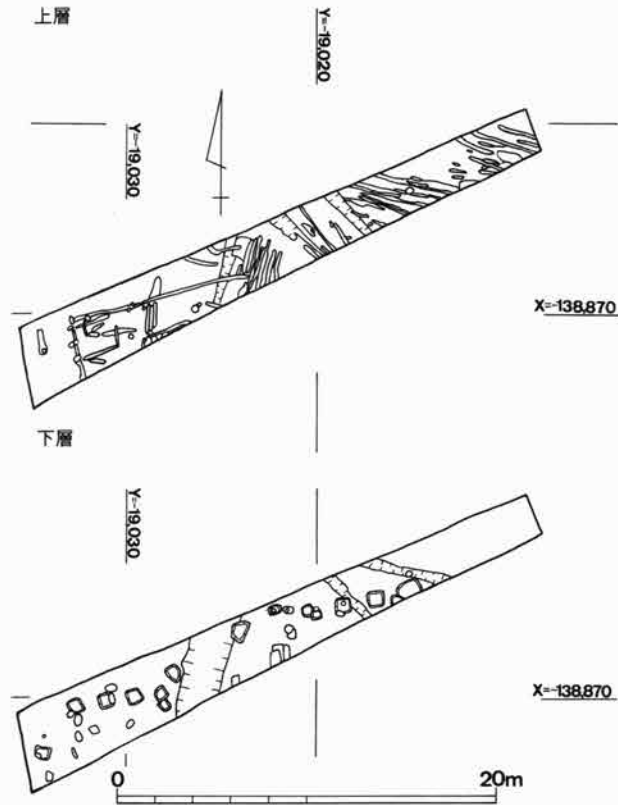
から斜め方向に刻みを二段に施し、その後横方向の沈線を付けている。

3は器台状になると思われる体部片である。最大径は36cmを測る。屈曲部の上下に櫛状工具により波状文を施している。



第50図 SD86断面図

1. 暗黄茶色粘砂質土 2. 淡黄色粘砂質土 3. 暗黄茶色粗砂土 4. 明黄色粘質土



第51図 東調査区平面図

4・5は耳環である。いずれも金環である。4は直径2.4cmを測る。いずれも金箔が破れ銅の地金が露出している。

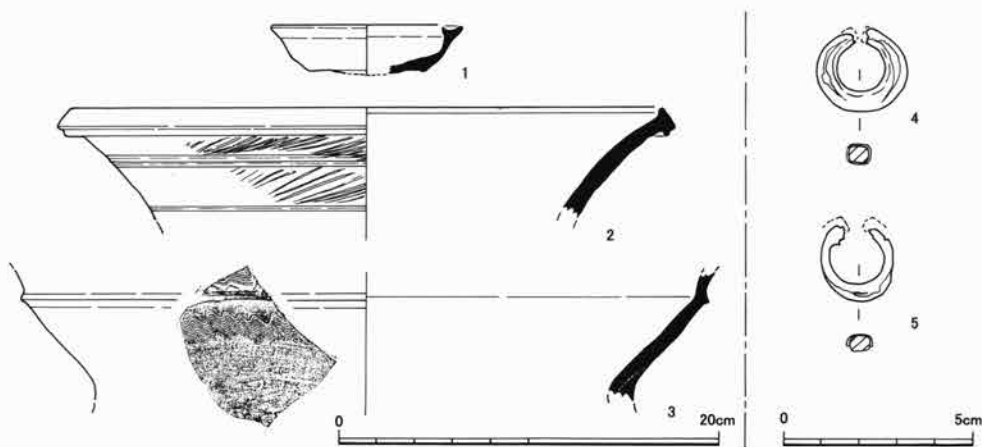
北調査区S D86出土遺物(第53図)

6～13は土師器、14～29は須恵器である。6・7は杯である。

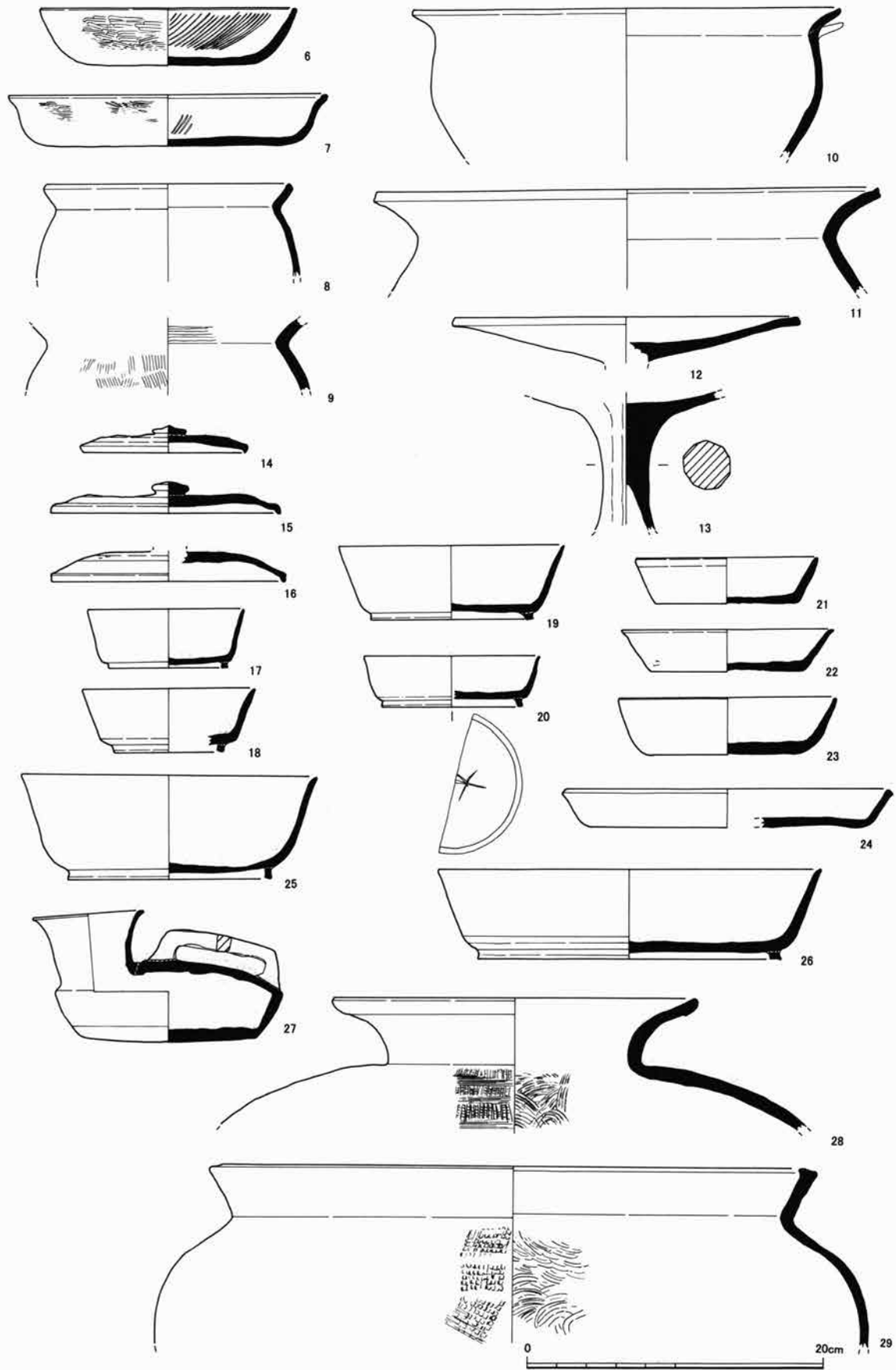
6は口径17.5cm、器高3.8cmを測る。内面には放射状暗文と一部に螺旋状暗文がみられる。

7は口径21.5cm、器高3.5cmを測る。内面にわずかに放射状暗文がみられる。

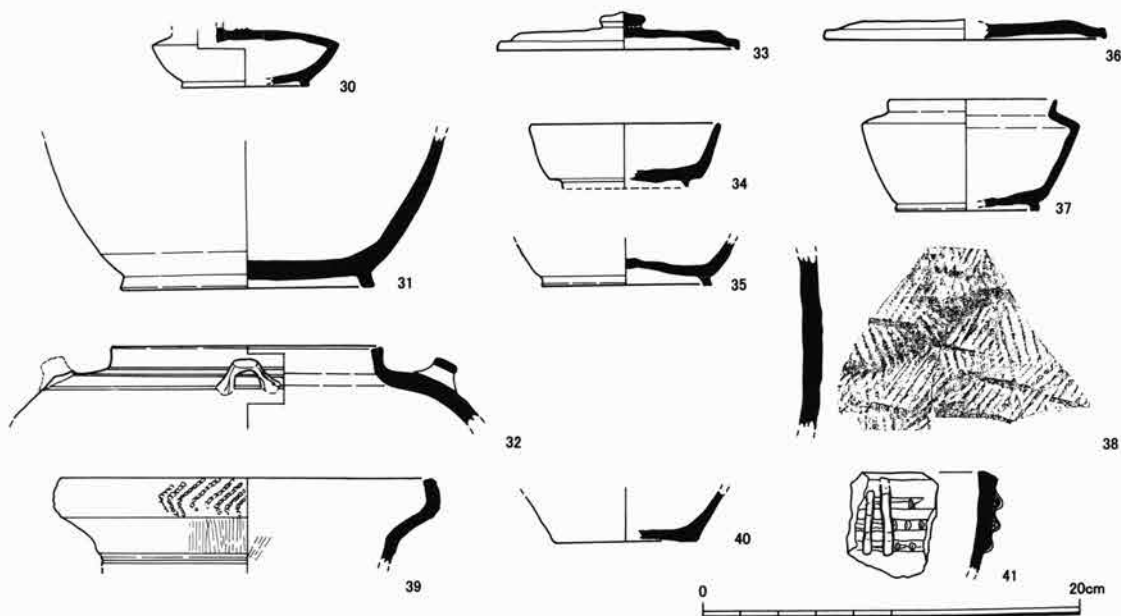
8は甕である。口径16.6cmを測る。口縁端部内面はわずかに肥厚する。内面に煤の付着がみられる。



第52図 出土遺物実測図(1)



第53図 出土遺物実測図(2)



第54図 出土遺物実測図(3)

(30. 北調査区 S K 50 31. 同 S D 10 32. 同 S D 01 その他、北調査区包含層)

10は鍋である。口径29cmを測る。

11は甕である。口径は34cmを測る。

12・13は高杯である。口径は13.2cmを測る。13は脚部であり、10面に面取りがなされている。

14～16は杯B蓋である。14は口径11cm、器高1.8cmを測る。15は口径15.6cm、器高2.2cmを測る。

いずれも宝珠形のつまみが付く。

17～20、25・26は杯B、21～23は杯Aである。

17は口径8cm、器高4cmを測る。

19は口径15.4cm、器高5cmを測る。

20は口径12cm、器高3.4cmを測る。底部中央部付近にヘラ記号が刻まれる。

21は口径12.4cm、器高3.1cmを測る。

22は口径14.2cm、器高2.9cmを測る。

24は皿Cである。口径21.8cm、器高2.6cmを測る。

25は口径20cm、器高7cmを測る。

26は口径26cm、器高6.1cmを測る。

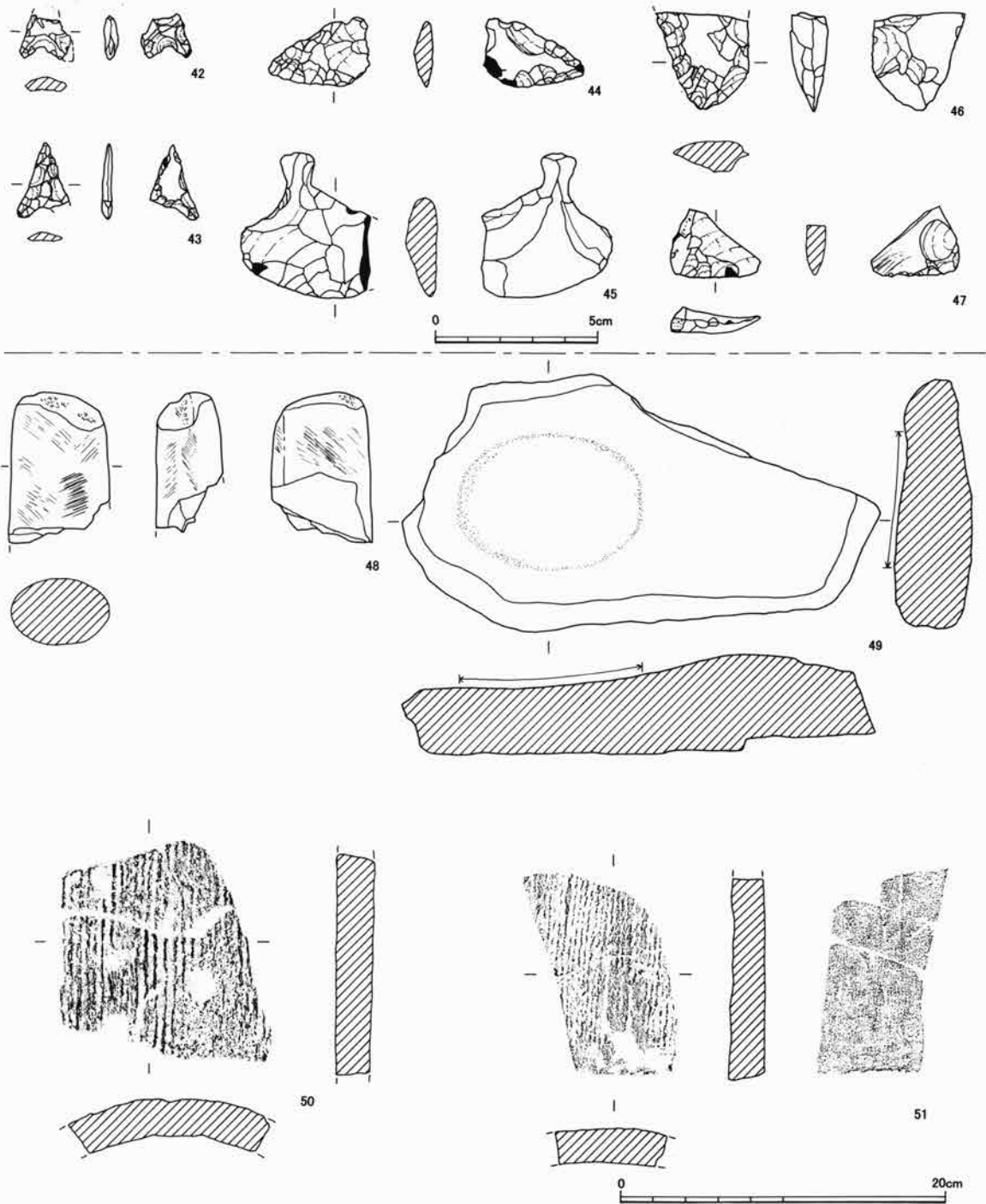
27は平瓶である。口縁部径7.5cm、底径11.9cm、体部の最大径は15.5cm、器高8.8cmを測る。

28・29は甕である。28は口径24.6cm、29は口径38.8cmを測る。28は体部外面の調整はタタキのち横方向のカキ目、29はタタキのちヨコナデである。

その他の遺構・包含層の遺物(第54図)

30は北調査区 S K 50から出土した。小型の平瓶である。体部最大径は10cm、器高は3.1cmを測る。体部に剝離がみられるため、把手が付いていた可能性がある。

31は北調査区 S D 10から出土した。底径13.4cmを測る。



第55図 出土遺物実測図(4)

(42・49. 北調査区S D86 50. 東調査区包含層 51. 南調査区S B84 P 2)

(石器の黒塗りは新しい剝離面)

32は北調査区S D01から出土した古瀬戸の四耳壺である。口径14.4cmを測る。頸部および肩部に横方向の3条の沈線をめぐらせている。

33~41は北調査区の包含層から出土している。39~41は弥生時代中期中葉の土器である。39は口径18.5cmを測る。40は底部径7.4cmを測る。41は鉢の口縁部である。3条の横方向の突帯を貼り付け、突帯上に「D」字状の刺突を施し、さらに横方向の突帯上に縦に粘土帯を貼り付けている。

石器(第55図)

42・43は凹基無茎石鏃である。42は長さ1.4cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。43は長さ2.35cm、幅1.6cm、厚さ0.25cmを測る。いずれも石材はサヌカイトである。

44・45は石匙である。44は長さ3.1cm、幅2.1cm、厚さ0.55cmを測る。石材はサヌカイトである。45は長さ4cm、幅4.35cm、厚さ0.95cmを測る。刃部は1/3が欠損している。石材は安山岩である。以上が縄文時代の石器である。

46は尖頭器の破片である。サヌカイト製で、長さ3cm、幅2.9cm、厚さ0.9cmを測る。

47は調整剝離のある剝片である。長さ2.8cm、幅2cm、厚さ0.6cmを測る。石材はサヌカイトである。

48は太型蛤刃石斧である。長さ9.1cm、幅6.2cm、厚さ4.1cmを測る。刃部は欠損し、基部が残存している。46・48は弥生時代のものと考えられる。

49は砥石である。長さ29.4cm、幅15.6cm、厚さ5.9cmを測る。石材は砂岩である。

瓦(第55図)

50は東調査区包含層から出土した。長さ、幅とも13.2cm、厚さ2.2cmを測る。焼成はやや不良で色調は黄灰色をなす。

51は南調査区S B84 P 2から出土した。長さ12cm、幅9.2cm、厚さ2cmを測る。焼成は良好で色調は青灰色をなす。

4. まとめ

今回の調査では、第2次調査の成果を補足する貴重な資料が得られた。しかし遺構の広がりは今回調査地にとどまるものではなく、さらに煤谷川への傾斜面までの丘陵部に広範に存在する可能性がある。

今回の調査では明確な古墳は確認されなかったが、調査地近辺に古墳が存在していたことを示す須恵器および耳環が出土した土坑(S K05)を確認している。また奈良時代の成果として、溝S D86を確認した。この溝は北調査区から南調査区に及んでいる。性格は不明であるが、溝から奈良時代前半を中心とする土器が出土しており、(財)古代学協会の調査時に確認された古墳の周溝からも同時期の遺物が出土しており、同様の遺構の可能性もある。

また、溝S D03に区画された掘立柱建物跡S B84を検出しており墓域から居住域への土地利用の変化を捉えることができた。住居跡S H88を検出した東側は溝が多数みつかっており、耕作地としての利用が考えられる。東調査区では柱列は確認できたものの、トレンチ幅が狭かったため明確に建物跡として復原できなかったが、周辺に建物跡が存在する可能性は高い。^(注4)

以上のように今回発掘調査を実施した結果、畑ノ前遺跡の土地利用の一端をうかがえる資料を得ることができた。

(柴 暁彦)

- 注1 川西宏幸ほか『京都府(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書―煤谷川窯址・畑ノ前遺跡―』精華町教育委員会・(財)古代学協会 1987
- 注2 岩松保 「畑ノ前遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第86冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注3 調査参加者(敬称略) 杉江貴宏・藤田佳照・朴貴広・穂積優子・鷺原裕太郎・川村真由美・稲垣あや子
- 注4 畑ノ前東古墳群 第1回京都府埋蔵文化財研究集会資料 1993

圖 版

図版第1 山田黒田遺跡



(1) 調査地周辺(北から)



(2) 調査前風景(南西から)



(3) 第1トレンチ作業風景
(南西から)

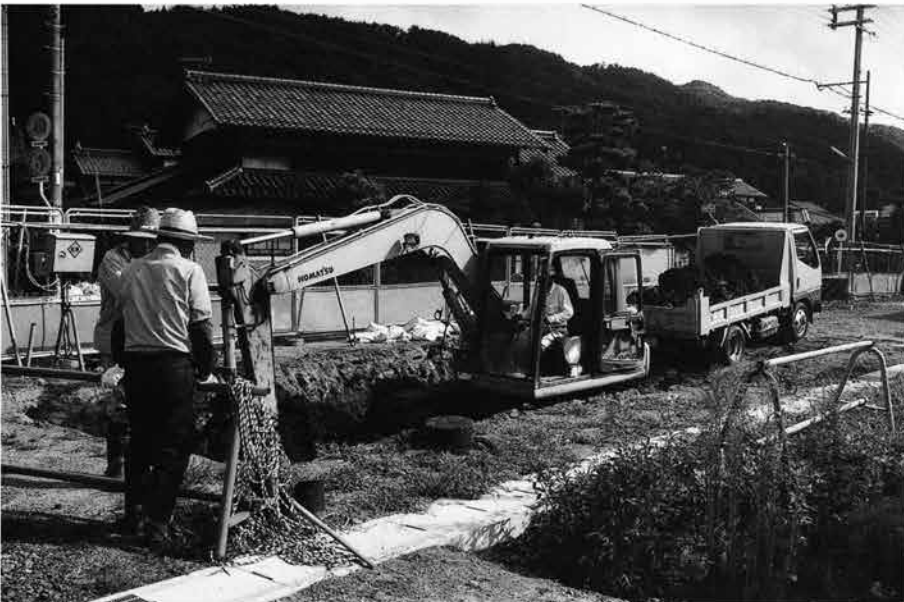
図版第2 山田黒田遺跡



(1) 第2トレンチ重機掘削風景
(東から)



(2) 第2トレンチ作業風景
(南西から)



(3) 第3トレンチ重機掘削風景
(南から)

(1) 第3トレンチ自然流路
(南から)



(2) 第3トレンチ自然流路土層
断面(南東から)



(3) 第3トレンチ自然流路内遺物
出土状況(南東から)





1



11



2



13



6



14



7



15



(1) 全景(北から)



(2) 調査地全景(南東から)



(1) 1 トレンチ全景(西から)



(2) 3 トレンチ全景(北から)



(1) 2トレンチ全景(西から)



(2) 2トレンチ全景(東から)



(1) 4トレンチ全景(北から)



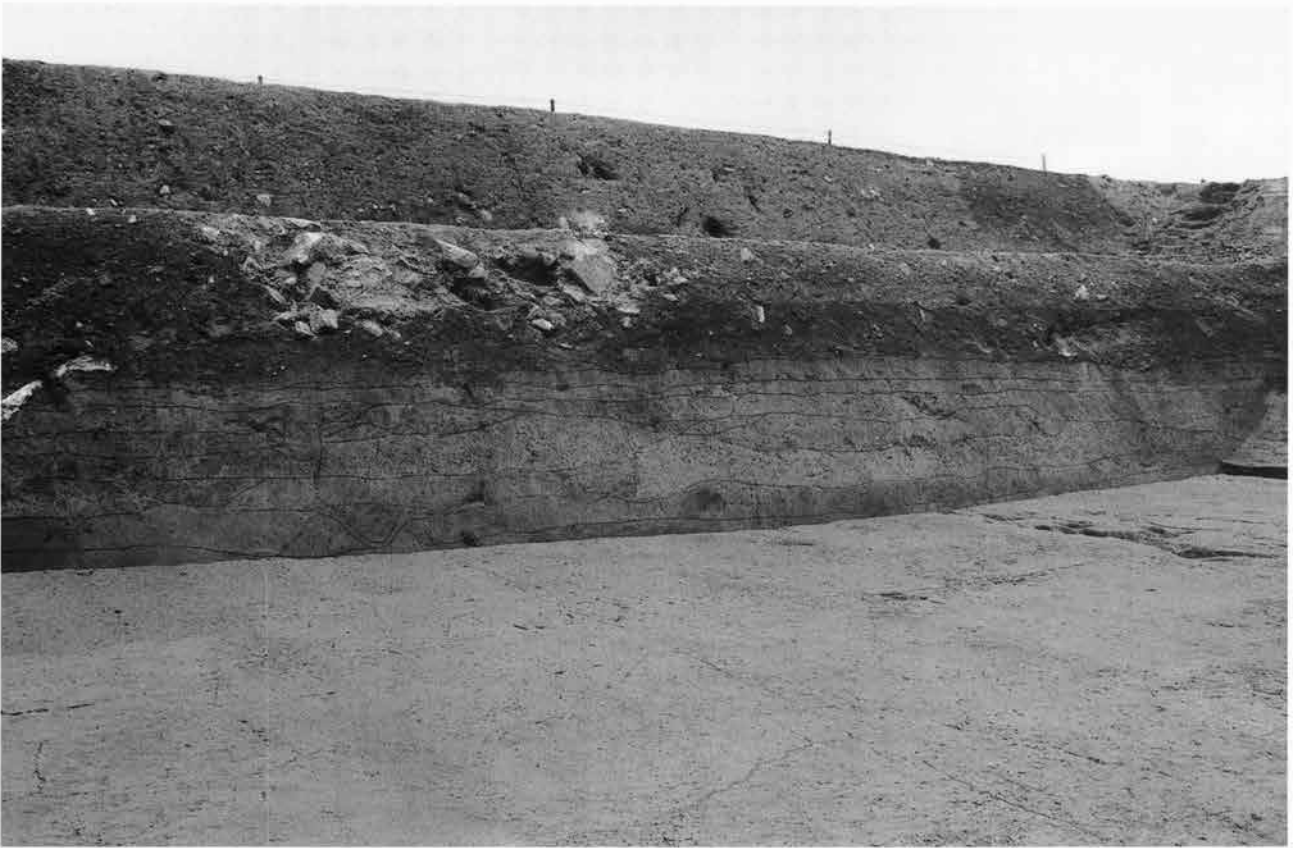
(2) 2トレンチ北壁(南東から)



(1) 調査前の状況(西から)



(2) トレンチ全景(東から)



(1) トレンチ南壁土層断面(北東から)



(2) 検出遺構(西から)



(1)調査地全景(東から)



(2)調査地全景(南東から)



(3)第1トレンチ壁面整形作業
(南東から)



(1) 第2トレンチ重機掘削風景
(北西から)



(2) 第3トレンチ全景(南西から)



(3) 第5トレンチ全景(南西から)



(1) 第7トレンチ全景(南西から)



(2) 第7トレンチ溝跡(南東から)



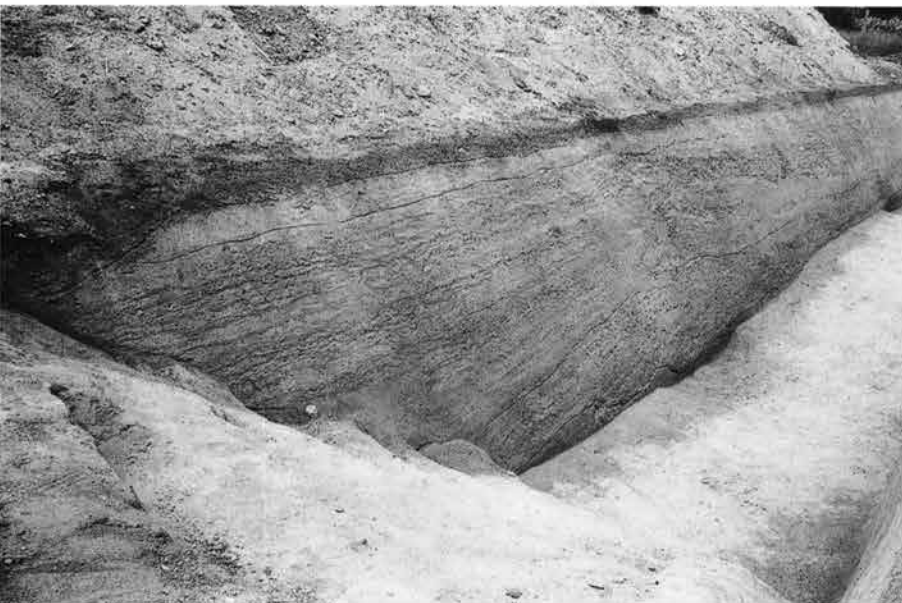
(3) 第7トレンチ溝跡土層断面
(南東から)



(1) 第7トレンチ北東壁土層断面
(南東から)

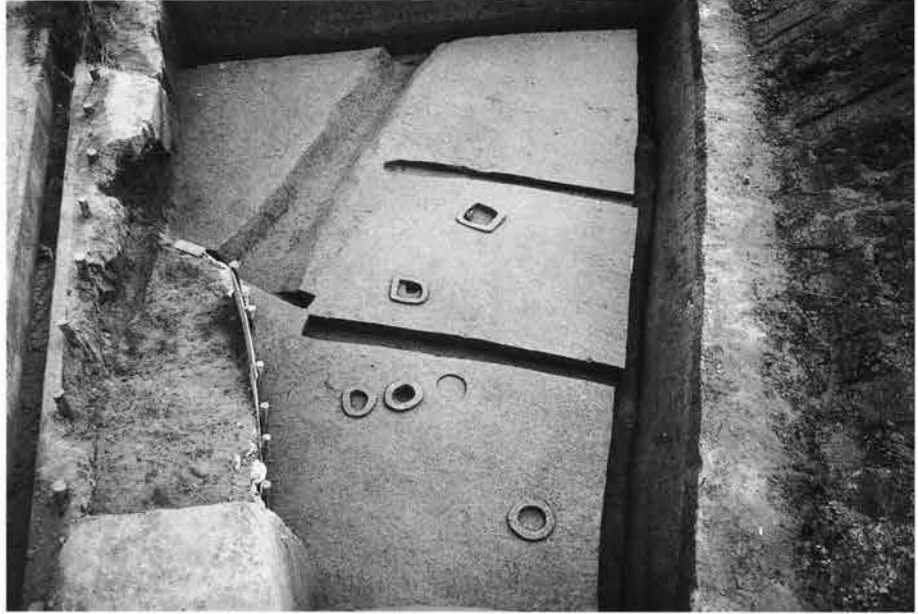


(2) 第8トレンチ全景(南東から)



(3) 第8トレンチ南東壁土層断面
(南東から)

(1) 第1トレンチ完掘状況
(北東から)

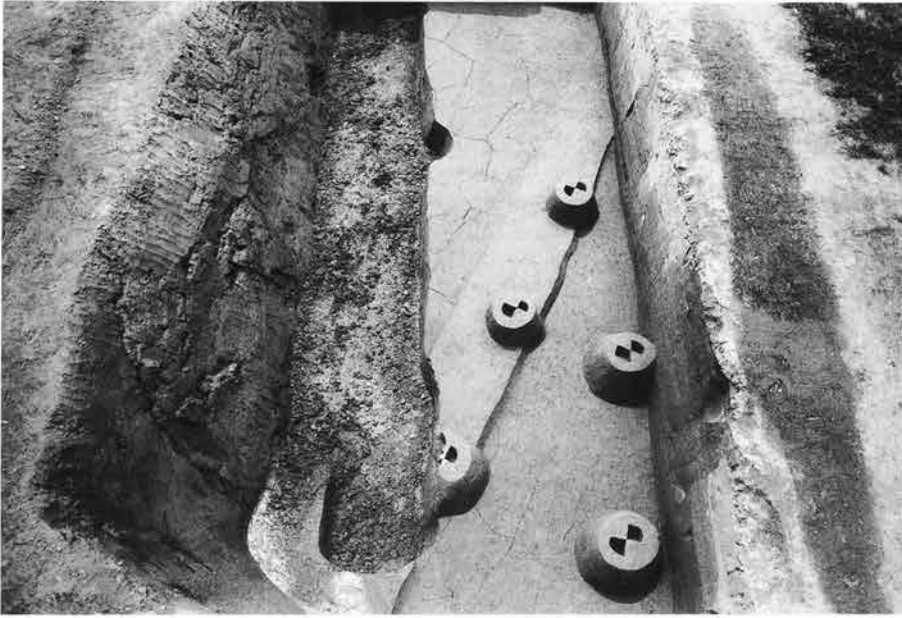


(2) 第2トレンチ完掘状況
(西から)



(3) 第3トレンチ完掘状況
(南東から)





(1) 第4トレンチ完掘状況
(北西から)



(2) 第5トレンチ完掘状況
(北西から)



(3) 第6トレンチ完掘状況
(北西から)



(1) 第7トレンチ完掘状況
(北西から)



(2) 第8トレンチ完掘状況
(南東から)



(3) 第9トレンチ完掘状況
(北東から)



(1) 第10トレンチ完掘状況
(南東から)



(2) 第5トレンチ土器出土状況1
(南東から)



(3) 第5トレンチ土器出土状況2
(南西から)



(1) 遠景(北西から)



(2) 第2トレンチ調査前
(南東から)



(3) 第1トレンチ調査風景
(東から)



(1) 第1 トレンチ全景(西から)



(2) 第1 トレンチ全景(南西から)



(3) 第2 トレンチ全景(北西から)

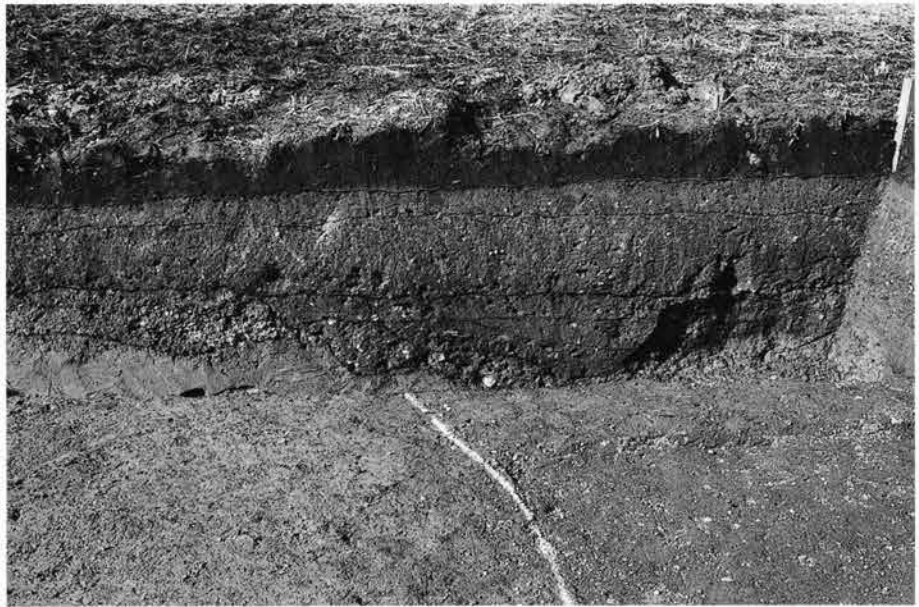
(1)第2トレンチ古墳周濠検出
状況(南西から)



(2)第2トレンチ古墳周濠検出
状況(北東から)



(3)第2トレンチ北壁、古墳周
濠部(南東から)





(1) 第3トレンチ全景(南から)



(2) 第3トレンチ北拡張区
(南から)



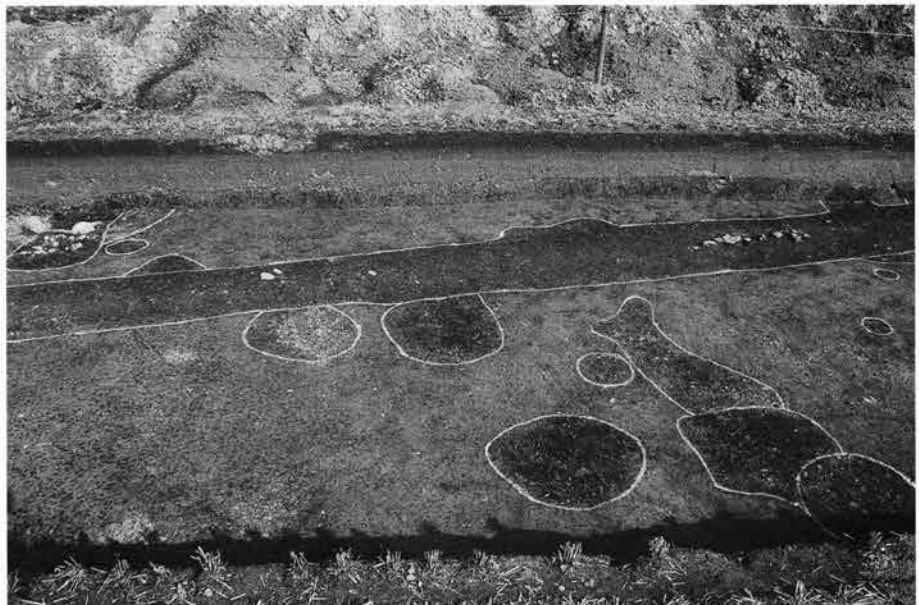
(3) 第3トレンチ土坑SK1
(東から)



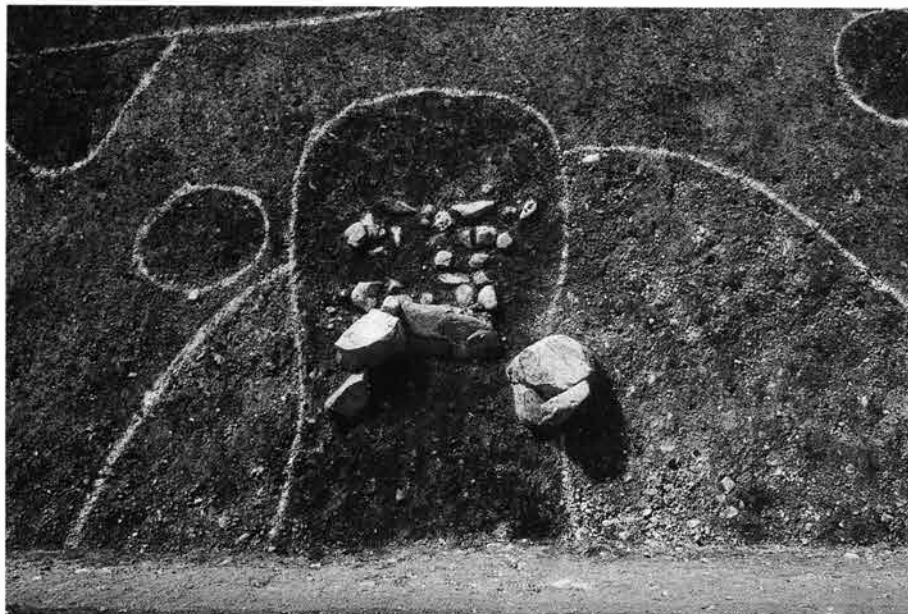
(1) 第4 トレンチ全景(北から)



(2) 第4 トレンチ全景(南から)



(3) 第4 トレンチ中央部遺構検出
状況(西から)



(1) 第4トレンチ集石土坑
(東から)



(2) 第4トレンチ集石検出状況
(南から)



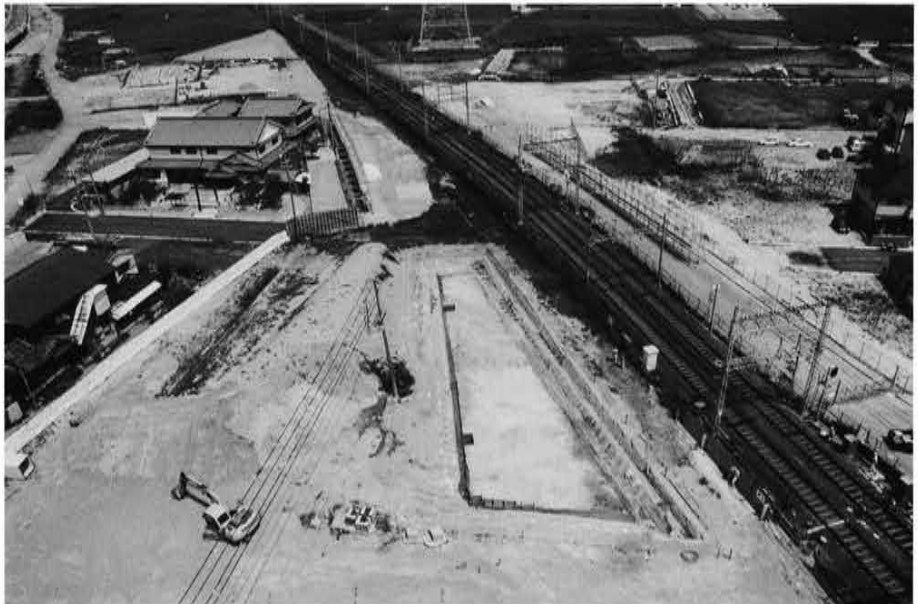
(3) 第4トレンチ北部東壁
土層断面(東から)



(1)遠景(北東から)



(2)第2トレンチ全景(真上から)



(3)第3トレンチ全景(南から)



(1) 第1トレンチ調査前全景
(南東から)



(2) 第1トレンチ調査後全景
(北から)



(3) 第1トレンチ東壁断面
(西から)



(1) 第2トレンチ調査前全景
(南東から)



(2) 第2トレンチ調査後全景
(東から)



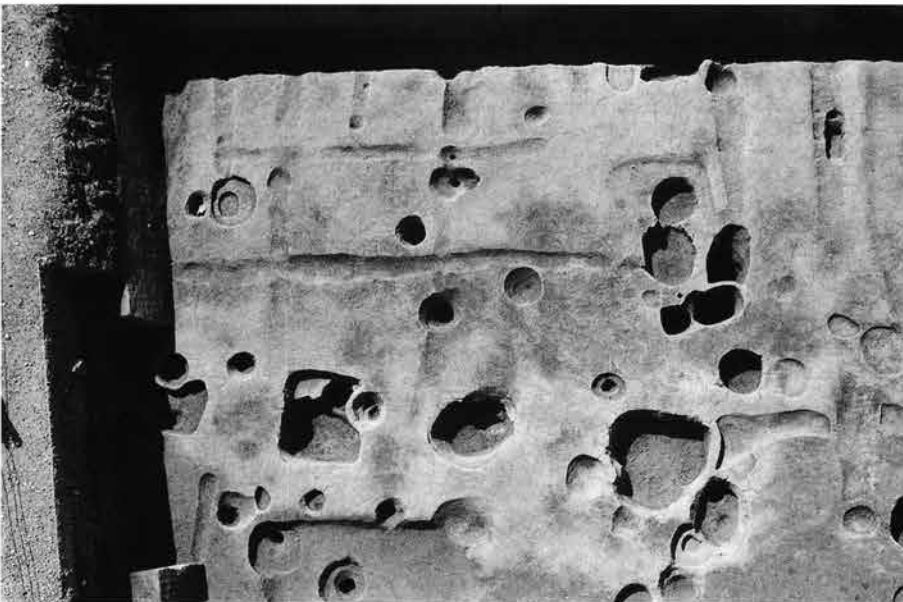
(3) 第2トレンチSB01・03検出
状況(南から)



(1) 第2トレンチSB01完掘後
近景(南から)



(2) 第2トレンチSB02検出状況
(南から)



(3) 第2トレンチSB02完掘後
近景(真上から)



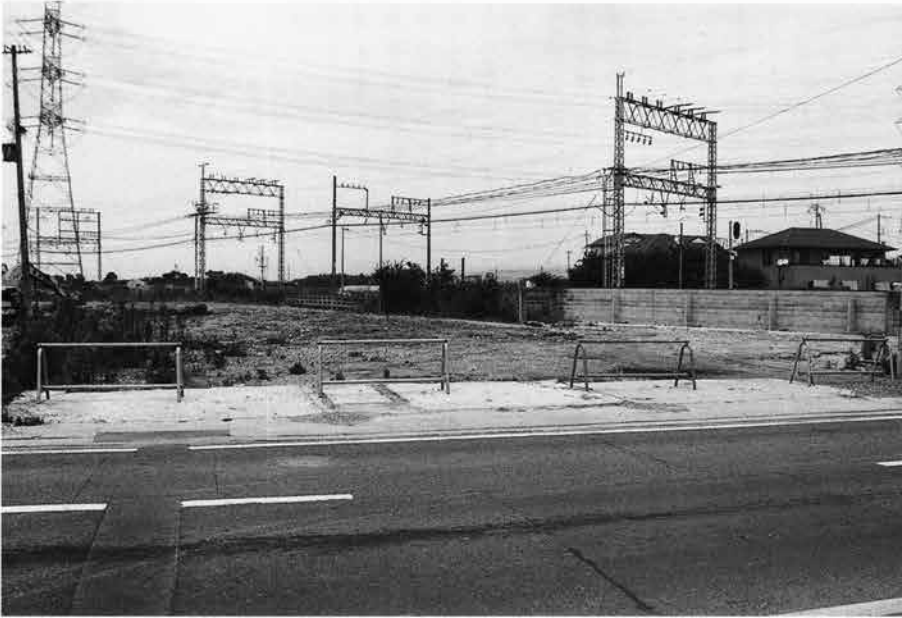
(1)第2トレンチS E03近景
(南から)



(2)第2トレンチS E03完掘状況
(南から)



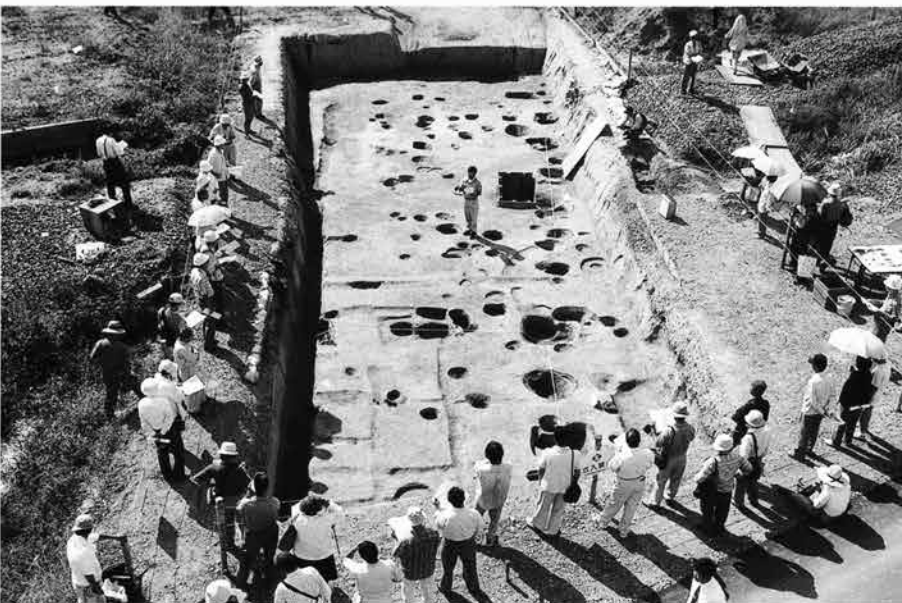
(3)第2トレンチS B01柱検出
状況(北西から)



(1)第3トレンチ調査前全景
(南西から)



(2)第3トレンチ調査後全景
(北西から)



(3)現地説明会風景 第2トレンチにて(東から)



18



1



26



34



42



57



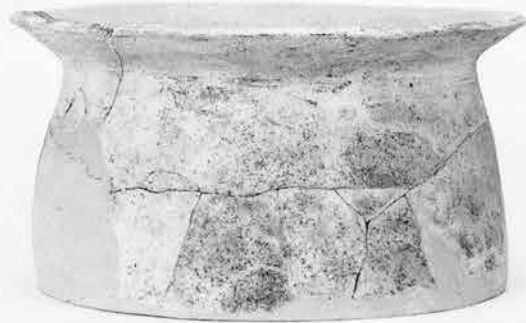
54



13



12



67



51



68



(1) 第1・2トレンチ重機掘削
状況(北から)



(2) 第1・2トレンチ調査前近景
(南から)



(3) 第2トレンチS D09近景
(東から)



(1) 第2トレンチSD12近景
(南から)



(2) 第2トレンチ南壁堆積状況
(北から)



(3) 第2トレンチ瓦出土状況
(北から)



63



64



62



25



22

(1) 出土遺物(1) 62~64は二又遺跡、22・25は三山木遺跡



52



58



53



56



60



57

(2) 出土遺物(2)



(1) 調査地遠景(北から)



(2) 調査地全景(真上から)



(1) 調査前の状況(南西から)



(2) 北調査区北壁断面
(南東から)



(3) 北調査区 S H88完掘状況
(南西から)



(1)北調査区S D86検出状況
(南西から)



(2)東調査区上層遺構完掘状況
(東から)



(3)東調査区下層遺構完掘状況
(西から)



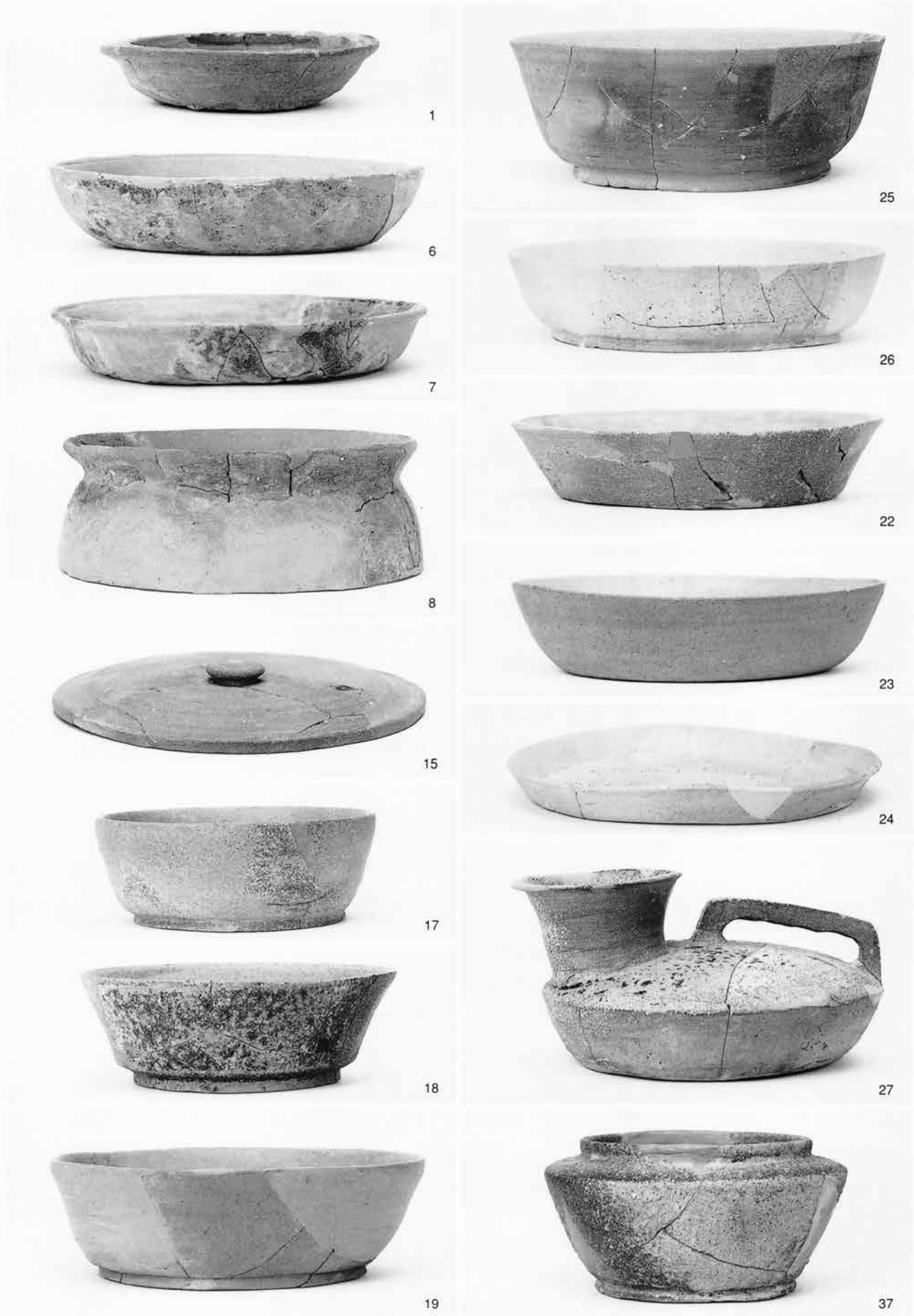
(1)南調査区S B84完掘状況
(南から)



(2)南調査区S B84ピット検出
根石(北から)



(3)南調査区S B84ピット検出
根石(北から)



出土遺物(1) (番号は実測図番号に対応)



43



42



44



45



46



47



4



5



48



49

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第106冊							
編著者名	村田和弘・石尾政信・増田孝彦・中村周平・河野一隆・竹原一彦・岡崎研一・柴 暁彦							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone 075(933)3877				
発行年月日	西暦 2003 年 3 月 28 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 F	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまだくろだ いせき 山田黒田遺跡	よさぐんのだがわ ちようおおあざかみ やまだこあざかりや 与謝郡野田川町大字 上山田小字カリヤ	26464	53	35° 32' 4"	135° 6' 57"	20020807 ~ 20020903	140	道路建設
たかなしいせ きだいにじ 高梨遺跡第 2次	きたくわたぐんけい ほくちようおおあざ しゅうざんこあざな かやまほか 北桑田郡京北町大字 周山小字中山ほか	26381		34° 9' 17"	135° 38' 12"	20020507 ~ 20020607	150	道路建設
きづがわか しょういせき だいじゅうご じ 木津川河床 遺跡第15次	やわたしやわたいっ ちようばた 八幡市八幡一丁目	26210	4	34° 53' 8"	135° 42' 35"	20021105 ~ 20021128	300	下水処理 施設建設
ひがしはらい せき 東原遺跡	やわたしはしもとひ がしはら 八幡市橋本東原	26210		34° 52' 19"	135° 41' 16"	20020722 ~ 20020829	600	土地区画 整理
うちざとはっ ちよういせき だいじゅうは ちじ 内里八丁遺 跡第18次	やわたしおおあざう ちざとこあざはっ ちよう・なかじま・ ひゅうがどう 八幡市大字内里小 字八丁・中島・日 向堂	26210	37	34° 51' 47"	135° 44' 4"	20020619 ~ 20020812	430	道路建設
たきざいせき だいさんじ 薪遺跡第3 次	きょうたなべしお あざたきぎ 京田辺市大字薪	26342	24	34° 49' 13"	135° 45' 38"	20020109 ~ 20020227	400	道路建設
ふたまたいせ きだいにじ 二又遺跡第 2次	きょうたなべしみや まぎたなほか 京田辺市三山木田 中ほか	26342		34° 47' 47"	135° 47' 14"	20020520 ~ 20020927	1,000	土地区画 整理

みやまぎいせきだいがじ 三山木遺跡 第5次	きょうたなべしみやまぎやなぎがちょうほか 京田辺市三山木柳ヶ町ほか	26342		34° 47' 41"	135° 47' 16"	20020521 ～ 20020712	350	土地区画整理
はたのまえいせきだいろくじ 畑ノ前遺跡 第6次	そうらくぐんせいかちょうおおあざうえだこあざはたのまえ 相楽郡精華町大字植田小字畑ノ前	26366	51	34° 44' 52"	135° 47' 30"	20020415 ～ 20020613	380	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
山田黒田遺跡	散布地	古墳前期		流路		土師器		試掘
高梨遺跡第2次	集落	奈良		なし		須恵器・瓦		
木津川河床遺跡第15次	耕作地	中世		溝		須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・瓦		
東原遺跡	散布地	江戸		水田		陶磁器		試掘
内里八丁遺跡第18次	集落	弥生後期 古墳 飛鳥・奈良・平安 中世		水田 溝 島畠		弥生土器・石庖丁 鉄製鍬鋤先 須恵器 瓦器		試掘
薪遺跡第3次	集落 古墳	縄文後期 古墳 奈良～平安 鎌倉		溝・土坑・柱穴 周濠 土坑		縄文土器・石器 埴輪(円筒・朝顔・ 形象) 土師器・須恵器 瓦器		試掘
二又遺跡第2次	集落	飛鳥・奈良・平安 鎌倉		掘立柱建物跡・井戸・溝 溝・畦		土師器・須恵器・曲物 瓦器・鉄鍬・銭貨		
三山木遺跡第5次	集落	弥生 鎌倉		溝 溝		弥生土器・石庖丁 土師器・瓦器		
畑ノ前遺跡第6次	集落	縄文・弥生 古墳 奈良 中世		竪穴式住居跡・土坑 掘立柱建物跡・溝 溝		石器・弥生土器 須恵器・金環 土師器・須恵器・瓦 古瀬戸		

京都府遺跡調査概報 第106冊

平成15年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 (株)大光社

〒604-0086 京都市中京区小川通丸太町
下ル中之町76
Phone (075)222-1333 (代)